
精霊密使～ボクが恋したカミナリ精霊の少女

カーティス・N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊密使〜ボクが恋したカミナリ精霊の少女

【Nコード】

N5721H

【作者名】

カーティス・N

【あらすじ】

白川光一、中学2年生。見学に行った寺で、虎目模様の玉を拾った・・・自分でも気づかない内に、彼は不思議な冒険に足を踏み入れたのだ・・・

1、きっかけ（前書き）

主な登場人物

【白川光一】中学2年生。主人公。運動神経抜群だが、勉強は苦手。ある日、不思議な玉を手に入れた事から、冒険に足を踏み入れる

【山田 勉】光一のクラスメート。変わり者で頭脳派。「宇宙人」というあだ名をもつ

【清水先生】光一のクラスの美人英語教諭。父の仕事を手伝っている。

【清水健一】清水先生の父親。ある事件により犬となってしまう。探偵事務所をもち、苦しんでいる精霊のために働いている。

【雷丸】いかずちまる雷を操り、白いハヤブサに変化する美しい少女の精霊。光一に靈力を握られている。

1、きっかけ

主な登場人物

1、きっかけ

十一月、秋の酩たけなわを少し過ぎた頃・

古びた瓦屋根のひさしの彼方、突き抜けるような青い空には、細筆をそつと走らせたような薄雲がたなびいていた。視線を下げれば、すすけた渡り廊下に、赤く色付いた楓の葉がちらほらと落ちている。頬を撫でる風はひんやりと透き通り、深呼吸したら、それだけで心が洗われそうである。

「・・・」

光一は首をひねった。ほんの一瞬だが、誰か目には見えない人が、並んで歩いているような気がしたのだ。

「誰、風の妖精？」

囁くように聞いてみた。が、返事はない。

『そりゃそうだ。ガラにもない・・・』

光一は一人照れ笑いを浮かべた。

と、彼の数歩先を歩いていた腰の曲がったお婆さんが立ち止まった。

「さてと、ここじゃわい。座布団は足りとるじゃろうか」

お婆さんは、亀のように首を伸ばして、お寺の本堂をのぞきこんだ。見れば、二十畳ほどの板間の部屋は、大勢の人の後ろ姿で埋まっていた。線香に混じって、油っこい整髪料の臭いが漂ってくる。

「あいや、早、いっぱいじゃ」

「座れないなら、いいです」

遠慮がちに話す光一を後目に、お婆さんは掠れ声を張り上げた。

「どこぞか、開いとりませんか！」

人々の頭がぞわぞわと揺れ、その内の数人が振り返りながら手をふった。

「ほづれ、坊ちゃん、ええとこが開いとった。あすこにしい」

お婆さんは、前の方の真ん中あたりを指さし、しわくちやの笑顔を残して、帰っていった。

「どうも」

光一は小さく頭を下げると、出かけた溜息を飲み込んで、開いていた座布団に座った。

「坊や、中学生か」

隣から、でつぶり太ったおじさんが声をかけてきた。

「ええ、はい」

「そいつは熱心なこった。仏像さん、しっかり拝みよ」

「はい」

おじさんはそれ以上話しかけることはなく、むっつり顔になって目をつぶった。

『知らなくてもいい、せめて同じ年ぐらいの子は・・・』

光一はあらためて周りを見た。

でも、いるのは大人ばかり、それも気難しそうな、おじさんやおじいさんばかりだった。

『もう、なんで、こんな所にしたんだよ』

ズボンの後ろポケット、この寺を指してくれた鉛筆をこっそり恨んだ。

彼の名前は白川光一。

関東地方の北部、美月市に住んでいて、地元の美月中学校の二年生である。大まかに分類すれば、体育が得意で、勉強はちよつと勘弁というタイプである。クラブ活動は、バスケットボール、卓球、陸

上、さらには書道と渡り歩いたが、どれもピンとくるものがなくやめてしまった。苦手なことはたくさんある。中でも、何もせずじっとしているのが大の苦手だ。この間も、友達と行った釣り堀で、あまりに魚が釣れないので、竿で引っかけた水草を金網に投げつけて遊んでいて、そのおやじさんに大目玉を喰らったばかりだった。そんな彼が、好天に恵まれた秋の日の日曜日の昼間に、寺の本堂に敷かれた座布団の上、まったく場違いな所に、座らせられることになってしまったのである。

なんでこんなことになったのかというと、総合学習の宿題で、町のどこか、施設を見学することになったからだ。

ここぞという所がなかったので、いい加減な気持ちで、教室の後ろに張られた町の地図に、「えい！」と鉛筆を投げつけた。尖った芯がうまく突き立ったのが、Eマークのついたこの寺だった。

「決まったわね」

放課後のことだったが、丁度、通りかかった先生にこの場面を見られてしまい、否定もできずに「はい」と頷いた。

そして日曜日になって来てみたところ、やたらと人が集まっていた。なんでも、四百年に一度しか、お目にかかることができない仏像が拝めるそうで、たまたまその日に出くわしてしたのだ。

光一には場違いなことは、はっきりしていた。すぐにでも抜け出したかったけれど、受付で名前を書いてしまったし、親切そうなお婆さんに案内してもらったし、それに古い寺が醸す重さみたいなものに見張られている感じがして、今さら引き返すわけにはいかなかったのである。

『痛つつつつう・・・』

座って五分も経っていないのに、ジーンと足が痺れだした。尻を浮かせて指を揉むと、体中に痛みが走り、ありもしないワサビの臭いがツーンと鼻にきた。ひとり身悶えしていると、祭壇の横の戸が開き、紫色の袈裟をかけた二人のお坊さんが現れた。一人は大切そう

に古ぼけた木箱を抱えている。

「皆様、お待たせ致しました。では、さっそく、ご開帳のお祈りを始めます」

丁寧にお辞儀をし、祭壇の前に座った。

「まずは、お手を合わせ、目をおつぶりください」

『いつまで待たせるんだよ？』

学校だったら、すぐに音をあげて体をがたつかせていたに違いない。でも周りにいるのは、厳めしそうな大人ばかり。光一は仕方なく目をつぶり、手を合わせた。

ポック　ポック　ポック　ポック

木魚を叩く音と、鼻をつまんだような祈りの声が聞こえ始めた。

光一は、催眠術にかけられたように、急に眠たくなってきた。その一方、足の痺れは峠を越え、ズーンと重い痛みに変わった。

『うっ……』

我慢できず、瞼を引きつらせながら、正座を崩した。声を立てないように片手で口を押さえながら、痺れた足をさすった。

『「あれ？」』

ふと、祭壇の上を見た光一の目が釘付けになった。

というのも、蓋の開けられた木箱の奥にある、黒く変色した仏像の両手の隙間に、きらりと光るものが見え、ポトリと転げ落ちたのだ。お坊さんや、大人達は真面目に目をつぶっているので気付いていない。それは、前に並んだ座布団の間をかすめながら転がってきて、光一の前に止まった。

直径三センチほどの玉だった。

黄色か金色か、虎の目のような美しい模様が入っている。貴重な仏像が持っていたのだから価値あるものに違いない。光一の手は自然にそれを掴んでいた。

ピリッ！

一瞬、電気が走ったような痛みを感じた。が、その後は何も起こらなかった。

やがて、祈りは終わり、皆は「ほうほう、あれが」とありがたそうに、祭壇の中央に置かれた仏像をながめた。

誰も、手の間にあつた玉がなくなつたという人はいなかつた。箱から取り出したお坊さんにしてもだ。何しろ、滅多にお目にかかれないう代物なので、隠れるように挟まっていた物がなくなつても、気付かなかつたのかも知れない。

お坊さんの一人が、ありがたい仏像の由来を話した。細かいことは聞きもらした光一だったが、大まかな所では、仏像は千年以上も前にいた偉い修行僧が、旅の途中でこの土地に立ち寄り、荒れ狂う嵐を鎮めるために作つたということだった。

その後、参加者の一人一人が、仏像の前で手を合わせて儀式は終わり、再び箱の蓋は閉じられた。次にお目にかかるのは、また四百年後ということだった。

光一は寺の事をあれこれ聞くために来たのだが、話し好きのおじさんたちが、お坊さんを取り囲んでしまいかねなかつた。ついでに、拾い物をしたことを言うきっかけもなくしてしまった。

結局、本堂の入り口にあつたパンフレットを一枚もらつて寺を出た。宿題はそれを写すことにした。家に帰つてすぐ、虎目模様の玉を通学用の肩掛けバッグに入れた。

机の中に入れてしまつたら、泥棒してみたみたいだし、肩掛けバッグの中なら、思いついた時に、いつでも返しに行ける。そう考えたのだ。

2、不思議な犬

翌日、登校途中、光一は目を見開いた。

筋雲が浮かんだ青空をジェット機が横切り、その後ろには真っ白な飛行機雲が一直線に伸びていた。

『あんな風に空に絵を描けたら、どんなに気持ちよいことだろう』あれこれ想像しながら歩きだしたその時だった。

・飛行機雲かい、こりゃ昼からは雨じゃわい・どこからか声が聞こえた。

「えっ？」

あたりを見回したが誰もいなかった。隣の空き地の砂利山の上に、灰色の犬が座っているだけだ。

「まさか、君がしゃべったんじゃないよね」

光一は冗談めかして聞いた。聞いたはいいが、もし、本当に話したらどうしようかと、胸が少しどきどきした。しかし余計な心配だった。犬は、呼びかけには知らん顔、先の方の黒い耳は、よそを向いたままだった。

『するとさっきの声は、空耳・・・』

ちよいと首を傾げながら歩き始めた。

・気を付けていきよ・・・

また声が出た。息が洩れるような低い声。

光一はガクンとつんのめりそうになった足を、なんとか踏ん張って、歩き続けた。どこから聞こえたのかは、はっきりしていた。後ろの砂利山の上からだ。

『どうして犬がしゃべったりする？それとも僕に犬の言葉が分かる

能力が宿ったのか」

振り返ったら、あの犬が飛び跳びかかってくるような気がして、そのまま人通りの多い交差点まで急いだ。

「ここまで来れば大丈夫」

大きく息を吸って後ろを見た。小さく見える砂利山の上にすでに犬はいなかった。

「人騒がせな奴！」

自分が勝手にビクついただけかも知れないが、光一は八つ当たりのように舌打ちしながら横断歩道を渡った。

八時三十分、始業のチャイムが鳴った。

ざわめいていた教室が静まり、二年B組の担任、清水先生が教室に入ってきた。

「おはよう」

ほんの少し首を曲げて微笑んだ先生に、皆はほっくり顔を浮かべた。清水先生はこの春に、光一の中学校にやってきた。年は教えてくれないが、お姉さんといってもいいぐらい若くて美人である。担当の英語の教え方も非常に好評である。

「ほんと、ついてたよな」

光一らは隣のクラスの、ぶすつと顔の女性教諭と擦れ違ったびにいっていた。

ただし、休日の公開授業の日は大変だった。先生の隠れファンになった父さん達まで押し寄せて、教室の後ろはすし詰め状態になってしまうからだ。

もちろん、光一の父さんも同じだった。先週の公開授業では、浮き浮き顔で生徒達と一緒に「はい！」と手まで挙げていた。

「さて、今日の日直は、光一君とはるかちゃんね。お願いします」

光一は先程の犬のことで少し頭がぼーっとしていたが、名前をいわれ、しゃきりと目が覚めた。

日直の仕事は、授業の開始と終わりの号令と黒板消し、それに朝会の際の、一分トークというものがある。

「起立、おはようございます。着席！」

光一は隣の席の鈴木はるかと前に出て、威勢よく号令をかけたが、内心は焦っていた。何を話すか、考えておくのをすっかり忘れていたのだ。

「私、昨日、お母さんとパイを焼いたんです。それで砂糖の量をまちがえて・・・」

金曜日に打ち合わせしたとおり、先にはるかが話し始めた。

『まずい、まずいぞ。僕の番になっちまう』

焦ると何も思いつかなくなってしまった。

「じゃあ、次は光一君ね」

皆の拍手の後、先生がいった。

「えーと・・・今朝のことですが、僕、犬の声を聞いたんです」

「ウー、ワンワン！」

茶化すようにいった誰かを、先生がきつい目をして睨んだ。

「今は、友達の大切な話の時間です。それで光一君、どうしたのかしら」

途中で話を切り換えるわけにもいかず、光一は続けた。

最初こそは、ぶすつと吹き出す生徒がいたが、すぐに皆、真剣な顔になった。怖い話や不思議な話は大好きなのだ。はるかより大きな拍手を受け、光一はほっと息をついた。

「それで、今の二人に質問とか、意見がある人はいるかしら」

「はい」

先生の問いかけに、メガネをかけた山田勉が手を挙げた。

これは光一が予想していた通りだった。勉は引つかかることがあると、すぐに質問する。テストは百点ばかりの秀才で、様々なことを知っているが、ズレていることも多い。遊びに誘ってもぜんぜん乗ってこない。ひよろりとした体型と、よく分からない奴という意味

で、【宇宙人】というあだ名がついている。

「はい、勉君」

「光一君の話ですが、おかしな箇所があります」

「どういうことかしら」

「犬というのは、大体が近視なのです。それで遠方のものは、よほど白黒はつきりしていないと見えないのです。昼間の空は、僕らが思っているより、ずっと明るくて白っぽい。だから、今朝みたいに晴れ上がっていて筋雲があったら、飛行機雲はよく見えなかったはずなのです。この点について、光一君は、どう思いますか」

なるほど・・・と、皆は感心したように頷いたが、半分は首を傾げた。やはり少しズレてる。犬が話をしたことではなくて、視力について指摘するなど。

『でも、確かに勉のいう通りだ。なんとなくつまらないけど、やはり、あの声は思い過ぎだったようだ』

光一はしよぼしよぼと返事をした。

「はい、自分でいうのも変だけど、その通りです」

「はい、それと・・・」

勉はもつと意見があるように、また手を挙げた。だが生憎、授業開始のチャイムが鳴った。

光一は、なんとか朝会をやり過ごして席に戻った。

「それでは授業をはじめます。皆、英語のテキストを出して」

光一は何気なく先生の方を見た。下を向いて教科書をめくっているが、何故か、考えごとをするように遠い目をしていた。

「こちらから、ぼつとしてないで」

ふと目があつた先生の顔は、いつもの通り笑っていた。光一は慌てて机の中に手をつ込んだ。

3、犬を追いかける

「光一君、先生に日直の仕事が終わったこと、報告してくるね」
黒板を消し終え、一息ついたところで、はるかがいった。

「えっ、僕は行かなくていいの？」

「うん、お菓子作りのレシピがのってるホームページを、見せてもらう約束してるから」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

はるかに手を振り、光一は学校を出た。

今日は五時間授業。帰宅して二時間ぐらいは外でぶらつけるはずだったが、あいにく雨が降りだしていた。

「家でゲームでもするか」

肩掛けバッグを脇に引き上げながら、走り始めた。

雨が本降りになってきたので途中にある郵便局に駆け込んだ。急な雨降りで困った客のために傘があるはずだったが、一本も残っていなかった。

「あら残念。でも、少ししたら止みそうよ」

郵便局員が声をかけてきた。

『まあ、せっかくだから』

光一は、温かい建物の中で雨宿りすることにした。窓際に大型のテレビがあり、その横のソファに腰掛けた。制服が濡れていて注意されるかと思っただが、愛想のいい郵便局員は「いいのよ」とばかりに頷いた。

テレビでは国際テニストーナメントの中継をしていた。

日本とカナダの選手が戦っている。他に見るものもなく、テレビ画面を見つめた光一だったが、特にテニスに興味があるわけでもなく、すぐに飽きてきた。視線をずらし、窓ガラスを流れる雫を見つめた。

「うっ！」

思わず声が出た。

ちょうど日本選手が点を入れ、解説者の声が大きくなった所だったので、目立つことはなかったが、人目を気にしている場合ではなかった。

すぐ外の軒先に、犬が走り寄ってきて、こちらを覗き込んだのだ。耳の先が黒い灰色の犬。今朝の犬だった。

光一はテレビに顔を向けつつ、横目でうかがった。その犬はこちらを見ていなかった。視線はテレビに向けられていたのだ。じっと観察していて、驚くべきことを発見した。

犬は、日本選手が点を入れると、ピーンと持ち上げた尾っぽを嬉しそうに振っていた。偶然かとも思ったが、コートチェンジしてもずっとそうだった。

『あいつは、日本のテニスプレーヤーを応援してる！』
ガラス越しだったし、建物の中には大人の人もいたので、安心して観察できた。そんな光一にはお構いなしに犬はテレビを見続けた。

雨がほとんど止んだ頃、朱色のカッパを着た人が自転車を停めた。

光一はまた顔をそらし、横目でうかがった。

フードの中に見えたのは、とても綺麗な女性の顔……『清水先生』だった。

先生は建物には入ってこなかった。困ったような表情を浮かべると、犬に近づき、その尻をぼんと叩いた。そして足をばたつかせる犬を抱き上げ、丸まった腰を籠にすっぽり入れ、自転車にまたがった。

光一は自転車が走りだすのを見届けると、すぐにもソファアから立ち上がった。郵便局員に頭を下げ、外に飛び出した。やることは決まっていた。

『あの不思議な犬、そして清水先生。後を追いかけてやる！』

フードを外した先生の長い髪が、三十メートルほど先で揺れている。よく注意されているが、教科書を学校に置いたままにしていたことが役に立った。ほとんど空のバッグは、走っていても邪魔にはならない。時々、軽い音がしている。昨日、寺で拾った玉が中で転がっていた。

自転車のスピードは遅かった。調子よく後を追いかけていたが、さすがに五分も経つと、胸が張り裂けそうになってきた。徐々に距離があき、先生の姿が見えなくなりかけた時、青い自転車に乗った勉強が、横道から顔を出した。

「グッドタイミング！」

光一は勉強の後ろの荷台に飛び乗った。

「あわわわ」

突然の乗客に、勉強は訳も分からずハンドルから手を離れた。倒れる直前で、光一が後ろからハンドルに手を伸ばした。

「僕だよ、光一」

「へっ、どうして？だめだよ、二人乗りは。降りてよ」

「そうはいかないんだ。緊急事態なんだ」

光一の切羽詰まった声に勉強は黙った。そうするより仕方なかったのかも知れない。後ろに座っているとはいえ、ハンドルを握り、ペダルを漕いでいたのは、光一だったのだから。

「ほら、前を見るよ。朝会で話しただろう、言葉を話した犬。そいつを清水先生が自転車に乗せてるんだ」

勉強は外れかけたメガネを掛け直して、前をのぞいた。

「確かにあれは清水先生だけど・・・」

疑いの声を出した勉強に、光一は郵便局での出来事を話した。何か反論するかと思っていたが、楽しそうな声が返ってきた。

「日本の選手を応援するなんて、外国産の犬じゃないんだね。何犬

なんだろう」

「そんなこと、考えてもみなかったよ」

光一は苦笑いしながら、ペダルに置いた足に力を込めた。

途中、二人乗りを見咎めた警察官が、交番から飛び出してきたが、うまい具合に通りがかりのお婆さんと当たってしまった。その隙にスピードを出したので、あやうく先生を追い抜きそうになった。

「ふう、危ない危ない」

光一は慌ててブレーキを握り、間を置いた。

先生は後ろかっけてくる二人には気付かなかった。

やがて周囲の家は疎らになった。先に行く自転車は、こんもりとした林に伸びる一本道に入ってしまった。

『これ以上進んだら、絶対に気付かれてしまう』

光一はブレーキを握った。

「どうしたの？」

「ここまで来てなんだけど、勉は行きたいかい」

「うん、どんな犬か、見てみたいよ」

あっけらかんと答えが返った。

「勉、何か引つかかるっていうか、怖くないのかい」

「だって先にいるのは清水先生でしょ。怖くなんてないよ」

「まあ、そうだよな」

先生の姿はもはや見えなかった。光一は勉と座席を入れかわり、自転車漕ぎ始めた。

すぐにもガタつく砂利道になり、周り高い杉の木に覆われた。重苦しい灰色の空はより濃厚さを強めている。

「もうすぐ日が沈む。直でこっちに来てしまったから、遅くなったら、母さんがあれこれ質問してきてうるさくなる。そっちは平気か」
後ろからフンフンと鼻息をかけてくる勉に聞いた。

「うちは平気。もともと閉館時間の伸びた図書館にいつて勉強する

つもりだったし」

「図書館？おまえクラブやってないと思ったら、図書館通いしてたの」

「まあね。日頃の行いが、こういう時、役に立つんだよね」
「チエツと舌打ちした光一の後ろで、笑い声が漏れた。」

ほどなく二本の太い石柱が、道の両脇に現れた。

4、井戸の中の怪物

【清水探偵事務所】

一本の石柱にプラスチック製の看板がかかっていた。

「清水先生の家、探偵事務所だったんだね」

「おお、格好いいじゃん」

光一は興奮した。

テレビに登場する探偵は、警察がお手上げた事件も容易に解決してしまう。悪人に狙われたり、危険ない目にも会うが、いつも格好よく擦り抜ける。

「探偵って、本当はすごく地味なんだよね。行方不明の人を探したり、人の秘密を探ったり・・・」

勉が冷静にいった。もう一本の石柱をしきりに見ている。ムツとした光一だったが、自転車を貸してくれたので黙っていた。

「光一くん、ちょっとこれ見て」 勉が呼んだ。

「どうした」

「この柱に彫られていることが気になって」

【木々の影、道を覆った後、これより先、進むべからず】
石柱には、掠れた文字で彫り込まれていた。

もはや辺りは暗くなりかけていた。もし晴れていても、この時間になれば、杉林の陰になって、やはり暗いに違いない。

「なんだろう。暗くなったら入るなということだけど。ここにあるのは二本の柱だけ。門があって閉じ込まれてしまうこともないし」
これまで澄ましていた勉の顔が強ばってきた。

「なんとかなるよ。まさかお化けが出るってわけじゃないしな」
光一は、勉を励ますように明るく話したが、内心は少しビクついていた。

木々の向こうに、明かりがちらついた。道が曲がっているのによく見えないが、先生の家に違いない。ここからは五十メートルもない。「何かあったら助けを呼べばいいさ。先生はすぐ先にいるんだし」
「そうだね、走ったら8秒前後の距離だものね」

少し上ずった声で勉が応えた。爪でメガネのレンズを弾いている。冷静に頭を使い、不安を紛らわそうとしているらしい。

二人は流れに乗ってしまったのだ。こういう場合「やめよう」というのは、前に進むよりも勇気が必要となる。

「じゃ行くか」

「うん」

自転車を石柱の横に置き、前に進んだ。

十歩ほど歩いた所で、勉が立ち止まった。二人の手前、数メートル先の地面に霧が這い出していた。

「なんだか変だよ」

いいながら、光一の鼻先にメガネを突き出した。

「ほら」

黒縁メガネの厚いレンズの表面は、曇りなく滑らかに光っていた。光一は勉がいたいたいことがわかった。確認のために自分の髪をまさぐった。さつき雨に濡れた髪はすっかり乾いていた。指がサラサラと髪を撫でた。

「霧が出ていて湿っぽいはずなのに、メガネのレンズも髪の毛も乾いている。どういうことだ？」

隣の相棒に目をやった光一は息を飲んだ。なんと勉が、地面を這う霧に乗って、ツツツと前に進み始めていたのだ。

「勉！」

大声で呼びかけたが、返事はなかった。

光一は急いで後を追った。が、あいにく地面に伸びていた木の根につまづいて転んでしまった。その反動でバッグの蓋がガバツと開き、留め金が額を強く打った。

「イデー！」

思わず唸った。足元には、バッグからこぼれた例の玉が転がっている。

『手放してはならない』

心のどこかで声が聞こえ、それに手を伸ばした。上着のポケットに突っ込み、バネ仕掛けのように起き上がり、勉の後を追った。

硬い土の道を曲がると、古びた洋館が現れた。冬が近いというのに、蔦の葉が生い茂り、壁をびっしりと覆っている。広いポーチのついた玄関には、さきほど見た電灯が点いていて、先生の自転車が置かれていた。

「勉！」

細いシルエツトが建物の裏に流れていくのが見えた。

光一は玄関ドアに鈍く光るノッカーを勢いよく叩き、バッグを置いた。いざという時に、先生が駆けつけてくれることを願ったのだ。建物の裏に走り込んでみると、すぐ先に屋根のついた井戸があった。

「ああ！」

なんとということだろう、勉はその井戸の中に吸い込まれるように消えてしまった。

特に仲がよいというわけではなかった。でも、光一がここに連れてきたせいで、大変なことが起こってしまった。

「助けなくては！」

理性を働かせる暇はなかった。走り込みながら井戸のつるべに飛び付いた。

カラララ・

高い音を残して急降下し、いきなりガクンと止まった。勢いあまり、握っていたロープを離してしまった。

暗闇を、回転しながら落ちていく。どのぐらいの深さがあるのか見当もつかなかった。

『井戸ってこんなにも深いのか』

『プールでは泳げるが、井戸の中では泳げるか』

『もし、底には水が無く、岩が剥き出していたら・・・』

『それどころか、勉を連れ去った霧の化け物が待ち構えているのかも・・・』

瞬時だったのかもしれないが、様々な思いが頭を巡った。

タウンン・

結局、辿り着いた先にあったのは、水でもなく岩でもなかった。ぬるぬるしていて蒟蒻のように弾力がある物。幸いにも、そこにでん部から落下し、三回ほど大きくバウンドして止まった。

「こ、光一君？」

暗闇に声が響いた。

「勉？」

大きく手を振ると、ピターンと音がして勉の呻き声が漏れた。どうやら頬を叩いてしまったらしい。

「お前、さっき霧に乗ってたぞ」

「霧じゃないよ。何かにしっかり足首を掴まれていたんだ。それで、転ばないようにするので精一杯だった」

「何かあって？」

「ほら、目の前に白いものが迫っていたでしょう。あれは霧とかの気体ではなく、軟体動物の触手・・・」

勉は急に話をやめ、光一の手を取って地面に押しつけた。

「ほら、僕らが今、座っている所の感じもそれと同じ。あっ」
急に地面が波立ち始めた。

「軟体動物っていったって、こんなでかいのがいるものか！」

光一はなんとかバランスを取ろうとしたが駄目だった。視力が及ばない所では、足場が悪いとすぐに転んでしまうのだ。

その内にも波立ちはどんどん強くなっていった。同時に体が運ばれていく感じがした。

『僕らが行きつく先によいことが待っているとは考えられない。けど、何もできない』

光一は何もできずに膝をついている自分を情けなく思った。

その時、周囲がほのかに明るくなった。四つ這いになった勉が光一の体を見つめている。光の出所は、光一の上着のポケットだった。

「なんだ？」

ポケットに手を突っ込んだ。入っているのは虎目模様の玉。

「あうっ！」

玉を握った瞬間に痛みが走った。昨日、寺で拾った時よりも強い電気が流れたようだ。波立っていた地面が、一瞬、ビクリと固まった。

光一は玉を取り出した。

直径三センチほどのそれは、まるで懐中電灯の豆球のように光っていた。おかげで周囲の様子が見えるようになった。

「何それ、どこで売ってたの」

「それどころじゃない。周りをみるよ」

そこは赤黒く湿った洞穴だった。壁には無数の襞がヌメヌメと震え、二人が揺られている地面は、貝の義足のようにならなっていた。穴は奥にさらに続き、光さえ届かないような暗闇があった。

「こ、ここは臓器なんだ。僕らがいるのは巨大軟体動物の体の中な

んだ」

カタカタと齒を鳴らしながら勉がいった。

「この場所のがそいつの口あたりだとしたら、この奥は胃か腹」

去年、海辺の旅館に泊まった時、光一の父さんはピチピチはねる小さな魚に醤油をかけて、そのまま食べていた。

『今の僕らは、まさにあの魚と同じ』

「脱出しなければ！」

顔を上に向けると、僅かに青黒い穴が見えた。遥かる高み、井戸の入り口に繋がっているに違いないが、震える赤い壁に足掛かりとなりそうな物はない。

「もう、どうにもならないのか」

「光一君、それ！」

そう叫んだ勉のメガネは、眩しい光を反射していた。玉は明るさを増していた。

「それって、これまで、そんなふうに光ったことあったの？」

「いや、なかったような」

光一は言葉を濁した。そんなこと聞かれても、昨日より前のことは知らない。

「それは、ここにあるものに反応しているんだ。徐々に光が強くなっているということは、僕らは玉を光らせるものに接近しているんだ」

勉が鼻息荒く発した。

玉は今や、ミニチュアの太陽さながらに輝いていた。

先ほど上方に見えた穴は、見えなくなっている。音もなく蠢く地面は、確実に二人を奥へと運んでいた。

少し進んで急坂になった。もはや、バランスどころではない。光一は玉をしっかりと握り、もう一方で勉と手を握り合った。電気が伝わったのか、「ひっ」と小さな悲鳴が聞こえた。

二人が折り重なりながら転がりだしたその時、玉を握った手が、壁の中に吸い込まれるようにめり込んだ。急にストップがかかり、勉の重さも加わり、肩が抜けそうになったが、光一は持ち堪えた。

「大丈夫かい、光一君」

「あ、ああ」

答えながらも、光一の左手はぐにぐにゆくと肉襷に埋まっていた。

・・・それこそは、我が瞳・・・くぐもった声が聞こえた。

「うっ！」

鋭い刃物で抉られるような激痛が、光一の手の中に走った。痛みは心臓の鼓動のようなりズムで襲ってくる。

『開いては、だめだ』

手から抜け出そうとする玉を必死に握りしめた。

『由緒ある仏像からこぼれた玉。手放してはだめだ！』

「私の瞳を届けてくれた者よ。手を開かれよ。さらに握り続ければ、お前の手は焼け焦げてしまっただろう」

壁の中からの言葉は丁寧だった。しかし、光一は手を開かなかった。
「もう、だめだ」

悲しそうな勉の声が響いた。

「もし君が助かったら、僕との冒険のこと、朝会で話して」

「何言ってるんだ！」

光一は怒鳴りながら、力の抜けた勉の手を握り直した。と、玉を掴んでいた一方の手が、ほんの少し緩んでしまった。

ピシッ！

目の前に紫色の光が炸裂した。体中が痺れて強ばった。と感じた次の瞬間、生温かい液体がどっと吹き上がってきた。二人は揉みくちやになりながら上昇していった。

井戸の縁から飛び出した時、光一の視界に懐中電灯をかざした清水先生の影が見えた。その手が柄杓のような物を真一文字に振った。香りのついた水が体を打ったかと思うと、黒い地面が鼻先に迫った。

5、先生と清水探偵

地面が震えていた。

地震か・いや、そうではない。徐々に弱まるが、数秒と開けず、またどろどろと震え始めている。

光一は薄く目を開いた。

カーテンに、窓枠の影がストロボ光を浴びているように映し出されていた。雷だ。地響きからすると、かなり近くで鳴っているらしい。しかし不思議なことに、あの肝を冷やすような轟きは聞こえてこなかった。

光一は荒れ狂う天候を遮断する温かい部屋で横になっていた。井戸から飛び出た時に打ちつけたのか、両足の膝が痛んだ。しかし、その上を優しい手の持ち主がそっと撫でてくれている。とても心地よく、体の内側から、痛みを遠ざける力がわき起こってくるようだ。

「誰だろう、先生か」

そつと頭を持ち上げた光一の目に映ったのは、異国の人のように赤い髪をした女性だった。横を見れば、テーブルを越しのソファアームで、だぶだぶのパジャマ姿の勉が、もう一人の女性に手を当てられている。

「どうしてその手、熱くないの」

勉が酔ったような目付きで女の人に聞いた。

「また訳のわからない質問をして」

光一はぼやいた。

それにしても、二人は助かったのだ。変な液体で濡れた服を脱がしてもらい、優しく介抱されている。

『ここ、先生の家なんだろうけど』

光一は室内を見回した。床には厚手の絨毯が敷かれ、奥手には煉瓦調のしゃれた暖炉がある。さきほど濡れてしまった制服が洗われてハンガーに掛けられている。

「うっ」

いきなり光一はソファーから飛び起きた。

暖炉の中で揺らめく炎、それは二股に分かれて伸びていた。そしてその先に、光一ら二人を撫でている女性達がいたのだ。よく見れば、その体は透けていた。

声に驚いたのか、二人の女性は、引き潮のように暖炉に戻り、揺れる炎の中に消えた。

「光一君、炎の精霊を脅かしちゃだめだよ」

眠そうに瞼をこすりながら勉が起き上がった。

『炎の精霊？するとさっきの勉の質問は、そのことだったのか・・・』
光一は気付いた。

「なんだよ、いつから起きてたんだよ！」

一歩先を行かれたようで、妙に悔しくて怒鳴ってしまった。

「うん、ここ、時計がないからわからないけど、かれこれ三十分ぐらい前からかな」

「うーむ」

光一は朱色に躍る炎を睨みつけながら、勉の方に移動した。

「お殿様みたいだね」

パジャマのズボンの裾を引きずっているのを見て、勉がけらけらと笑った。

「お前・・・」

もう一度、怒鳴りかけた光一だったが、炎の中からも笑い声が聞こえ、ギクリとしてやめた。

「炎の精霊ってぴったりの名前でしょう。悪いものでないことは確

かだよ」

勉の言葉を聞きつけたのか、炎の中に女性の顔が浮かび上がった。今度は一人だけだ。光一がお愛想程度にお辞儀すると、にこりと微笑んだ。

「ほらね」

「まあな、けど、ほらねで済むことじゃないだろう」

光一が溜息をついていると、向かいのドアが開き、白いカーディガンを羽折った清水先生が入ってきた。後ろには例の犬が続いている。

「これで、犬の謎が解けるってわけだね」

目を輝かせる勉の横で、光一は軽く頷いた。

「二人ともお目覚めね。もう八時を過ぎてるわ」

言葉は優しいが、先生の目は怒っているように吊り上がっていた。

「まったく無茶をして・・家の人には電話しておいたわよ。二人とも先生の家に、勉強でわからない所を質問してきたって。後で間違いなくお送りしますってね」

光一はまた大きく溜息をついた。

『僕が勉強だなんて。母さんが信じてくれるわけない。せめて、遊びにきたぐらいにしてくれたらよかったのに』

隣では、勉がほくほく顔で喜んでいる。

「もう、先生のせいだよ、言葉を話す犬から始まって、変な井戸やその暖炉。頭の中がごっちゃごちゃだよ」

そっぽを向いてぼやいた。

「それは言いがかりというもんじゃろう」

光一の前に回り込んできた犬が牙を剥いた。息が洩れる低い声は、間抜けというより凄味があった。

「へえ、うまくしゃべるもんだ」

身を引く光一とは反対に、勉は顔を寄せ、犬の口をのぞいた。

「ねえ、君って、光一君が話した通り、飛行機雲も見えるの？」

「見えるとも。ハハ、勉君は面白い坊やだ。皆と少し違々と絵里子から聞いていたが、わしを怖がるうとはしない。光一君の無鉄砲さと合わせたら、怖い物なしだね」
犬はクシャミをするように笑った。

『いったい何者、僕らのことを聞いて知っているにしても、先生を、呼び捨てにするなんて』光一は首を捻った。

「呑気に笑っている場合ではないわ。雷丸が復活したのよ。早く手を打たなければ」

先生が犬にびしっといった。先生の視線は、稲光が漏れるカーテンに注がれている。

「雷丸つて、雷のこと？」

まだ犬の口をのぞき込んでいる勉を横に光一は聞いた。灰色の犬はいきなり、その左手をペロリと嘗めた。

「ひっ」

生温かさに思わず開くと、掌の中心に、五百円玉くらいの窪みが出ていた。周りはわずかに黄色く光って見える。指でこすってみると電気が走ったようにビリツときた。

「なんだ！」

光一は自分のことながら驚いた。これまでこのようなものはなかった。先程、激痛を堪えながら、玉を握り続けていたためか。

「では、光一君が、雷丸の封印を解いたってこと？」

光一の手を見つめた先生が、少し高い声で犬に聞いた。

「そうだ。この坊やは、雷光の瞳をその手に握りしめていたんだ。それを地底霊の腹の中で、あいつに渡した。霊力を取り戻した雷丸は、お得意の電撃を地底霊に喰らわして、この世に飛び出したのだ」
曖昧ながらも二人の会話内容が、光一に伝わった。

『大嵐を鎮めるために作られたという仏像。その手からこぼれ出た虎目模様の玉は、雷丸という奴の瞳だったのだ。』

それを僕は、あのぬるぬるの化け物のなかで渡してしまった。それで今、外で季節外れの雷が激しく鳴っているのだ」

「もしや僕、大変なことをしてしまったの？」

光一は思い切って犬に聞いてみた。先程まで感じていた不気味さは消えていた。変わり者の勉は別として、清水先生だと話をしている。映像世界では、犬はよく話しているし、面白いといえば面白いことなのだ。

「その通り、大変なことをしてしまった。でもな、意外と簡単なことのような気もするが」

犬は牙を剥き出して笑った。

「どうということ？」

「じきにわかることだわ」

清水先生も何がしか得心したように頷いた。

『いったいなに・・・』

光一が、先生の茶色がかった目をのぞいていると、勉が首を突っ込んできた。

「光一君、謎が解けたよ。この犬に飛行機雲が見えた理由がね」

「どうしてだい？」

形ばかりに聞いてあげると、勉は鼻息荒く答えた。

「コンタクトだよ。犬の目を横から見た時に気付いたんだ。透明で出っ張ったものがはりついてる。どう、凶星でしょう、先生？」

「その通りよ」

先生は呆れ顔をしながら頷いた。

「じゃあさ、犬が僕らと同じように考えたり、話したりするのはどうなんだい。それにここで経験したことは、なんて説明したらいいんだい」

「それは・・・」

勉の鼻息はおさまった。光一はちょっと意地悪な質問だったと反省した。

「父さん、この子たちに話してもいいかしら」

先生が聞いた。父さんと呼んだのは、他でもない灰色の犬をだつた。「もちろん。恐らく、光一君は瞳の納め場所を持つてしまつただろうからな。それに、もう一人にも教ええないわけにはいくまいて」

灰色の犬は、偉そうに鼻先を持ち上げながら答えた。

「そうね。でも、ここで聞いたことは絶対に秘密よ。いい？」

向けられた鋭い視線に、光一と勉は唾を飲み込んで頷いた。

「この犬は、私の父さん、名前は清水健一」

先生は話し始めた。いきなり飛び出した話に、光一は視界に薄い膜が張つてしまつたように感じた。しかし、先生の顔は冗談をいつているようには見えない。

「・・・五年前まで、父さんは隣町で探偵事務所を開いていたの。もちろん今みたいに犬ではなく、人間の姿でね。ある日、たまたま私もそこにいたんだけど、変な依頼が舞い込んできたの」

「うむ、絵里子はまだ高校生だつたな。依頼主は白髪頭のお婆ちゃんで、目が開いたばかりの子犬を箱に入れて持つてきたつて」

犬は昔を懐かしむように、あぐりと口を開けて宙を見つめた。

「それでどんな依頼だつたの」

「そのお婆ちゃん泣きながらいつたの」先生は続けた。

「この子犬の魂を救つて下さいって。私、犬が好きだつたから、子犬を抱きあげたの。するとね、その子は生えたての牙を剥き出してしゃべつたのよ。」

「人間よ、おぬしはこんなわしでも飼おうとするか、それとも野に捨てるか・・・ってね。地の底から湧き出るような低い声だつたわ」
光一の背中に寒いものが走つた。勉はメガネを小突きながら頷いている。

「依頼主のお婆ちゃんは、大金を払って犬を置いて行って、後は連絡もなかったわ。無理もないわ。可愛いはずの子犬が不気味な声でしゃべったのだから」

「そこで責任感の強いわしの登場ってわけだ」

清水探偵・は胸をはるポーズをとったのかもしれないが、後ろにゴロリと倒れた。

「そう、父さんは依頼を受けた。そしてその犬について情報を集めたの。そして、その犬は、山に建設された動物管理センターで生まれ、ペット業者に引き取られて売られたことがわかったの」

「動物管理センターって、飼えなくなつた犬や猫を連れていく所だよね？」

光一は聞いた。いつかテレビで見たことがあつた。映し出された犬たちの悲しそうな目は、今でもよく覚えていた。

「そうよ。そこに手掛かりがあると考えた父さんは、子犬をバッグに入れて連れていったわ」

「わしは係員に見つからないように、建物の中を探索した」

清水探偵が後に続いた。

「すると子犬が急に暴れだした。ある場所に近づくほどに激しく暴れて、抱きしめたわしの喉に噛みつこうとまでした。そして行きついたのは、鍵の掛かったコンクリートの部屋だった」

「引き取り手がないと、入れられるガス室」

勉強がぼそりとつぶやいた。それ以上はいわれなくても分かっている。その部屋で、犬たちは殺されてしまうのだ。

「そう、わしは探偵の七つ道具を取り出すと、鍵を開けて部屋に入った。途端、犬からぐったりと力が抜けてしまった。なにかある！ わしは目を凝らした。すると部屋の隅にぼんやりとした影があつた。それは母犬と子犬の形をしていた。子犬の形をした影は、母犬の腹の上に頭を乗せて、幸せそうに寝ていた」

「清水探偵。ということは、子犬は確かにペット業者に引き取られ

たけど、その魂は抜けて、ガス室に送られた母親の所に残っていたということ？」

清水探偵は、光一の呼び方が偉く気に入ったらしい。フリフリと大きく尾を振った。

「その通り。わしは小さな体を、ぼんやりと見える影と重ねた。これで問題は解決すると思つてな。でも甘かった。子犬の魂は、体に戻ることにはなかったんだ。わしがやるせなく思っていると、抱いていた犬が話した。

・おぬしら人間が奪つたものの重さを知れ・・・とね。

その言葉に、わしは頭をガツンと殴られた気がした。それから急に意識が遠退いていったんだ。わしはせめて、子犬の体を守らなければと思ひ。残っている意識で部屋の外に押し出した。そして目が覚めたら、あら不思議、わしの体は、その子犬ちゃんになっていたというわけなんだ」

「つまり、清水探偵はガス室で死んでしまった。でも、魂が子犬の体に宿つたというわけ？じゃあ、子犬の口を通して話したものは、どこにいったの」

光一は聞いた。

「鋭い質問だ。だが、残念ながらわからない。あれ以来、声を聞いたことはないんだ」

「僕、思い出しました。【動物管理センター、建物を点検中の重大事故】

五年前の新聞に乗っていた事件つて、そのことだったんですね」

鼻息を荒立てて勉が話した。

光一はたまげた。五年前と叫びたら、まだ小学三年生だ。そんな時から勉は新聞を讀んでいのだ。

「そうよ。あの事件をきっかけに、管理センターの隣にお寺ができたわ。犬達の供養をしないと祟りがあるといわれてね。でも、今でもあそこに集められる犬や猫の数は変わらない。とても悲しいことだわ」

先生は俯きながら、清水探偵の背中を優しく撫でた。再び顔を上げた時、その顔は晴れやかに輝いていた。

「あの事件で、父さんは犬になってしまった。でも、悪いことではなかったわ。私達は新しい目を開くことができたんですもの」

「新しい目？」

光一と勉が同時に聞いた。

「それは、精霊達の住む世界を見ようとする目よ。私と父さんは、もっと精霊のことが知りたくなった。そんな時に、この家の売り出し広告が目についたの。幽霊が出たり、人が消えてしまうという噂があつて、ただみたいに安かつたわ」

「わしはピーンときた。この家こそ、わしらに相応しいとね。そして実際に来てみて、様々な精霊達の嘆きや悲しみ、そして喜びを知るようになった。わしは探偵の仕事を再開することを決めた。困っている精霊を助けるために」

6、精霊のこと

清水探偵と先生の話は続き、その間に光一と勉は、乾いた自分の服に着替えた。

「・・・精霊などという雰囲気悪がられるけど、そんなことはないよ。だんだん分かってきたのだけど、精霊というものは、微小なエネルギーの粒でできているみたいなの」

「それはあらゆる物質が、原子の集合体であることと同じですか？」
勉が聞いた。

光一は話についていくために、耳朵を引いて気合いを入れた。

「そう。普通はばらばらに浮かんではいるのだけど、何かのきっかけで、特定の性質をもった微粒子がぎゅっと集まるの。そして精霊が生まれるのよ。あなたたちを飲み込んだ井戸の中の怪物もそうだし、暖炉の炎もそう。それに五年前に出会った子犬に宿っていたものもそう。皆、精霊の仲間よ。犬に宿ったお父さんも、精霊と呼べるかもしれないわね」

光一は首を傾げた。今、いわれたものは、全く違うものに思えたからだ。

「でも先生、怪物にはしつかり触れられたし、炎の精霊は形が見えたり消えたりしてる。子犬に宿っていたものは形も何もなかったんでしょう」

「そうね、様々な種類の液体に例えるとわかりやすいかも知れないわ」

先生の言葉に、勉がパチリと指を弾いた。

「例えば水ですね。水は水蒸気や氷に姿を変える、それに水素と酸素の分子に分けられる。集まり方によって、見え方や触った感じは全然ちがう」

「そう、精霊の中でも、目に見えるものは分かりやすいわ。問題は目に見えないものよ。そういう精霊は、何か形あるものに宿ることが多いの。子犬に宿っていたのは、犬達の恨みの気持ちは集まって精霊になったものだと思うわ」

「気持ちは集まると精霊になるのですか」
勉が聞いた。

「もちろんよ。気持ちって目には見えないけど、やはりエネルギーの粒という実体をもっているの。本当に強いものなら、一人の人間の気持ちでも精霊を作り出すのよ」

「それで清水探偵が、犬になったわけがわかりました。探偵の子犬を救いたいという気持ちは、強烈なエネルギーをもっていて、それが精霊となって子犬に宿ったんですね」

「ええ、そうよ」
三人の横で灰色の犬はプリプリと尾を振った。その目は優しく先生を見つめている。

『きつと清水探偵の本音は、大切な娘を残して死んでしまうなんてできなかつたんだ』

光一は思った。

さらに聞かれた話では、この杉林に囲まれた土地には、千年以上も昔、偉い坊様の祈りの場があったそうなのである。暖炉がある所は、ちょうど祭壇があり、祈りが捧げられていた。

強い力をもった祈りは、大気中のエネルギーを集めて炎を生んだ。その時に精霊も一緒に生まれたいらしい。

先生達がこの家に引越してきて、暖炉に火をともしたとき、炎の精霊は昔のことをいろいろ語ってくれたそうだ。

「偉い坊様って、もしかして雷丸を封印した人のこと？」

光一の質問に、先生は大きく頷いた。

「そう、弘法大師といって、日本に密教を伝えた人らしいのだけど、

ほんの短い時間しかここに留まらなかったし、名を刻んだ書も残さなかつたから、はつきりとはわからないの。とにかく凄い霊力をもつた人で、人々を苦しめていた雷丸から、雷光の瞳を抜き取り、その体を地底霊の中に封印したのよ。

あの地底霊は、もとはただのナメクジ。そこに、暴れ狂う雷丸を逃がさないように、大地のエネルギーを集めて巨大化させたの。

もしかしたら地底霊の力は弱ってきているのかもしれない。そうでもなければ、あなたたちの体のエネルギーはすぐにも吸い取られ、こんなふうには話なんかできなかつたでしょうから」

清水探偵は呑気にも、光一らが地底霊の腹の中から、飛び出してくることが予想していたらしい。でも先生は心配して、地底霊が嫌うラベンダーの香りのする水を、井戸の中に投げ入れ、二人を吐き出させようとしていたのだ。

「雷丸というのは恐ろしい精霊なんですよ。今は偉い坊様もいないし、どうしたらいいのですか」

勉が光一の疑問を口にした。だが、答えはやはり「後で」ということだった。

7、探偵の願事

一息ついた後、先生は熱いココアとパンを運んできてくれた。

光一は小さく舌打ちした。

先生の家で、世にも珍しい体験を見聞きし、しかもおやつまで食べたのである。・学校で話したら、間違いなく話題沸騰だろう。しかし、話すわけにはいかない。隣にいるメガネの相棒と喜びを分かち合うしかないのだ。

「なあ、一緒に来てよかったな」

気を取り直していうと、勉はパンにかじりつきながら振り向いた。その表情は少し曇っている。

「どうした？」

「光一君、もう九時だよ。思い出したんだけど、明日、単語テストがあるよね」

「なんだよ、そんなこと気にしてるのか」

光一はガクリと肩を落とした。テストなど、どうでもいいことではないか。

「そうよ、二人とも勉強してる？」

先生の細い眉がびくんと上がった。

「はい、勉強はしてあるんですが、せつかくだから単語の語源にも目を通しておこうと思って」

「ふふ、そうね、もう帰らないといけないわね」

先生は清水探偵に視線を投げた。

「さてと、坊やたちには、すごいことを知られてしまったわけだ。それを秘密にすることは約束してもらったんだが、実は、もう一つお願いがあるのだ」

清水探偵は耳を立てて、首を伸ばした。ちょうど飼い主の命令を聞く犬のようだ。光一は可笑しくて吹き出しそうになったが、なんと

か堪えた。

「お願いって？」

「二人に、仕事の手伝いをしてほしいんだ。ほれ、わしはこの姿だろう。だから外を歩くのには便利なんだが、建物には、おいそれとは入れない。絵里子も手伝ってくれるんだが、なにせ人手が足りなくてな」

『仕事とは、さっき話していたように精霊のために働くということ？』

光一の胃の辺りが急に重くなった。

『清水探偵は精霊のせい、犬になってしまった。もし、相手が豚の精霊だったら、どうなる・いや、ちょっと待て。精霊のために働く・そんなこと普通なら絶対にできやしない。それに何より、清水先生も仲間だ』

「はい！」

光一は力強く返事した。横を見ると、勉の表情は曇ったままだった。短時間だが、内容の濃い付き合いでわかった。彼の宇宙人レベルは、そんなにひどいものではなかった。

『確かに変わっている。けど、誰よりも純粹なんだ。自分の考えを素直に口に出してしまうことが多いので、誤解されてるんだ』

「どうしたんだい？」

「やりたいんだけど、勉強する時間がなくなりそうだし、それに「それに？」

「自分ではよくわからないけど。僕、皆から変わり者だと思われるでしょう。だから、清水探偵の仕事を手伝ったら、よけい変になつてしまふんじゃないかと思って」

光一は思わず吹き出しそうになったが、先生に睨まれて我慢した。

「確かに勉君の考えることって、他の皆とは違うことが多いわ。でも、この仕事にはびつたりよ。それにここまで、光一君とも上手く

やってるじゃない。自信をもつていいと思うわ」

光一は深く頷いた。

「そうだよ、一緒にやろうよ。それにここじゃ、学校の教科書には出てないこともいっぱいありそうだし、こんな機会滅多にないよ」

「うーん、まあそうだけど。テストの前とか、勉強したい時は手伝えないよ」

「そんな時は、僕一人で手伝う。それでいいよね」

光一が聞くと、清水探偵はよしとばかりに牙を力チ力チと鳴らしたが、先生が毛むくじやらの頭をコツリとやった。

「だめ。テストの前はお手伝いはなし。だから勉君、安心していいのよ」

「わ、わかりました。僕も手伝います」

勉は少し口ごもりながらいった。

「ありがとう。じゃあ、今夜だけの特別サービスをするわね」

言いながら先生は、暖炉の前に進み出て、軽やかなステップを踏み始めた。それに調子を合わせるように、メラメラと燃えている炎が、奇妙な形に変わり始めた。

「アアア」

勉が声にならない声を出した。

先生と一緒に躍っている炎の形は、よく見れば、英単語の形をしていたのだ。長くなったり短くなったり、次々と変化している。サービスとしかいわなかったが、目の前にくねくねと現れるのは、明日のテストに出てくる英単語に違いない。勉の表情の緩み方を見ると、彼の知りたがっていた語源も現れているのかも知れない。

『けど、綺麗だ』

光一は単純に思った。毛糸がいろんな文字に変わる動画を観たことがあるが、それとそっくりだった。いや、炎の方が赤橙黄青・様々な色が混じり合い、動きが滑らかで、もっと美しい。光一が見られている内に、炎は元の形に戻った。

先生は軽く息を弾ませている。

「どう？すぐ終わってしまったけど、勉強熱心な生徒を刺激するには、十分だったはずよ」

勉はにつこり頷いたが、光一の頭の中では、英単語がごちゃまぜに集まってダンスをしていた。

「あんなのなした。知ってる単語も、他のと混じって、わけがわからなくなってしまった」文句をいったが、先生は知らん顔をしていた。

「さあ、坊やたち、別の部屋に案内しよう」

清水探偵が尾を振りながらいった。

部屋を出ると、薄暗い廊下に黄色の裸電球が並んでいた。時折、霧が生まれては、動物や人の形、なんとも名状しがたい物の形になっている。光一と勉は、先生のすぐ後ろを歩いたが、横壁から巨大な狐の顔が、又ウツと現れた時にはさすがに驚いた。

「お坊様がこの場所を出たあと、住み着いている精霊たちよ」

「けど、こんな所に家を建てるなんて、よっぽど物好きな人がいたんですね」

「ええ。いざ住んでみると、一日ともたずに逃げ出したそうよ」

上機嫌になった勉に、先生が笑いながら答えた。

そのまま突き当たりのドアを開け、部屋の中央に置かれたテーブル上の蝋燭に火を灯した。

そこは、壁中が蔦の葉に覆われた小部屋だった。

「ここは？」

「いわば中央情報センター、つまり精霊たちのSOSや暴走を知らせてくれる場所なんだ。わしの仕事を手伝ってくれる君たちに、ぜひ見てもらいたくてな」

光一はあらためて部屋を見回した。

蠟燭の炎はまつすぐに立っている。風は吹いていないが、壁をおおう蔦の葉は細かく揺れていた。陽が当たっていないせいか、葉は皆白みがかっていた。

「あれっ」

光一は壁に近寄り、茂みをかき分けた。どす黒い血のような色をした葉が見えたような気がしたのだ。

「この部屋の蔦は、外の蔦とつながっている。そして葉は、ちょうどパラボラアンテナのように、世界にうごめく精霊たちの動きを拾っている。ここの葉が細かく震えているのはそのせいなんだ」

「じゃあ、この葉は」

光一は見つけ出した赤い葉について聞いた。

「それこそ、最近取りかかったばかりの仕事だ。葉がそのように赤黒く色づくのは、精霊が苦しんでいるサインなんだ」

「じゃあ、あれは？」

後ろから勉の声がした。その手はドーム型の天井の中央を差している。そこにある葉は、色こそは変わっていないが、ヒラヒラと羽ばたくように揺れていた。

「あれは、この建物の真上の空にいる雷丸を現しているのよ。精霊が喜びに溢れていると、あんなふうに葉が揺れるの。葉の色がオレンジ色になると、暴走し始めたということだけど、あの色ならまだ大丈夫」

先生が答えた。

「ということは、蔦の葉が生えている所で、精霊のいる場所もわかるということ？」

「いいぞ光一君、その通りだ。精霊が上空にいる時は天井の葉、そうでない時は壁の葉が示すのだ。その赤い葉が示すのは、ここから北の方角で、床からの高さを考えると、だいたい五キロから十キロの範囲にいる精霊に、異変が起こったということになる」

ここから北といったら、ちょうど光一の家のある方角だ。

「その場所は見つかったの？」

「いや、残念ながらまだなんだ。それで今朝、その場所を探している時に、ものすごいエネルギーを発している若者がいた。もしかと思つて、滅多にしないことなんだが声をかけてみた。すると、すつたか早歩きで逃げ出した」

「それつて、光一君のことだね」

勉がぷすつと吹き出した。

「じゃあ、清水探偵が郵便局に来たのは、僕の後をつけていたつてこと？」

「まあな。そして君は都合よく、わしの後を追い始めた。正体をここで暴いてやろうと待っていると、君は地底霊の穴に飛びこんだ。君が持っているエネルギーからして、すぐに脱出してくると思つていたが、まさか雷丸の雷光の瞳を持っていたとはな。そこん所と絵里子のクラスの生徒だったことが計算違いだったが、君への疑いは見事、晴れたというわけだ」

清水探偵は自慢そうに尾を立てたが、先生が呆れ顔でそれをはいた。

「なにが計算違いよ。仕事を忘れて、テニス中継に夢中になっていたくせに。光一君が、私達の後を追いかけたのはたまたまよ。それに勉君まで巻き込んでしまつて。二人とも本当に危ないところだったのよ」

「ふむ、そうともいえる」

清水探偵は面目なさそうに尾を丸めた。

「それで、苦しんでいる精霊の問題は？ 僕らは何を手伝えばよいのですか？」

赤い葉を心配そうに見つめながら勉が聞いた。

「今のところ精霊の居場所もはっきりしないし、まだお願いできることはないの。ただ精霊が苦しむと、必ず事件が起こるわ。何か変わったことがあつたら教えてほしいの」

「それぐらいならできます」

勉はほっとしたように頷いた。

「じゃあ、伝えることは伝えまし、お二人さんを家に送っていかなきゃね」

先生がいった。

「ちよつと待った。雷丸は？」

「そいつは、これからご対面といったところだ」

清水探偵が意味ありげに、にやりと笑った。蝋燭の炎に照らされた牙が鈍く光り、光一は思わず身震いした。

8、雷丸（いかずちまる）

厚い木製の玄関ドアを開いた途端、耳をつんざくような雷鳴が襲った。

稲光が夜空を縦横に切り裂いている。勉は酸っぱいものでも食べたように顔をシワシワにした。

「家の中では、地響きしかなかったのに」

「建物をおおう蔦のおかげよ。蔦は精霊を招きやすいけど、同時に精霊が引き起こす災いからのバリアの役目も果たしているの」

光一の疑問を聞きつけた先生が、耳元で教えてくれた。

「クウオーン、精霊が喜んでいる。なんとも見事だ」

清水探偵が花火見物でもしているように叫んだ。

「さあ、光一君、左手を大きく開いて！」

わけが分からないまま、光一は左手を開いた。掌にできた窪みが眩しく光っている。それはまさに極小の稲光といえた。驚いて思わず握ってしまった。

「やはり。怖がる必要はない。その手の窪みは、雷丸の雷光の瞳を納めるためのもの。ただの窪みなら、そんなに光ったりはせん。わしの予想ではね」

空を見上げながら清水探偵がいった。

「予想だなんて、そんな無責任な」

「大丈夫よ。あなたが雷光の瞳を手に入れたのは偶然ではないわ。きっと何かの導きがあったのよ」

・・・自信をもて、我は君とあり・・・先生の声に混じって、低い声が聞こえたようだった。

辺りを見回したが、それらしい人はいない。先生には何も聞こえないようだった。

光一は頭を振りながら、思い切って左手を開き、空に突き出した。

「瞳を閉じよ。雷丸！」

誰に聞いたわけでもないのに、喉奥から声が飛び出した。

途端、窪みから青黒い竜巻が生まれた。それはあつという間に巨大化し、雷光またたく夜空に伸びていった。

手から伸びた竜巻は、獲物を飲み込む蛇のように稲光を吸収していった。その度に光一の体に激しい電撃が走った。でも不思議なことに、それほど痛くはなく、内側から力が湧いてくるようだった。

やがて竜巻は、とびきり大きな稲光に食らいついた。どうやら、光の根っこを捕まえたらしい。そのまま、先を明るく輝かせがら小さくなっていき、見る間にも消えてしまった。

目の前には、あの虎目模様の玉が浮かんでいる。

光一はそれを右手で掴んだ。左手の窪みにはまってしまうと、取り返しのつかないことが起こりそうな気がしたからだ。

「ふー、大丈夫？」

地面に膝をついていた先生が立ち上がった。勉は凍りついたように立ち、鼻をひくつかせている。清水探偵は長い舌を出してポーチに伸びている。どうやら皆、雷のショックを受けたらしい。

先生が悪戯っぽく微笑んだ。

「お調子者の父さん、たまにはこんなショックもいいかも」

空を見上げると、ほんの数秒前の天気嘘だったかのように、静かに星が瞬いていた。

「さあ来たわよ」

先生が空の一角を指さした。

大きく旋回しながら、輝く鳥がゆっくりと降りてきていた。時折、鋭い羽音が聞こえる。白い体だが、サギのように首は長くない。ト

ピカタカのようなだ。

「巨大なハヤブサだ」

勉強がつぶやいた。その目はまだぼうつとしている。しかし、白いハヤブサなどいるのだろうか。あれこそが雷丸か・

優雅に空を滑ってきた鳥は、地面を掠めるように接近し、四人の前に降りた。が、次の瞬間、鳥は光一らと同じ年ぐらいの少女に変身した。

「き、君、あの」

光一は慌てて片手で目を塞いだ。少女は全くの裸だったのだ。

「人間とは心が狭い。千年以上も我慢し、やっと自由になったと思つたら、すぐに瞳を奪ってしまうなぞ」

鈴のように可愛らしい声だった。指の隙間からのぞくと、その娘の両目と額の間に、小さな切れ目があった。

「あなたは・・はるか以前、いずこにてお会いしたような・・」
指のスリット越しの光一の目をのぞき込んだ少女が、妙なことを口走った。が、すぐに首を振った。

「あいや、思い違いじゃ。さあ、瞳を返しなされ！」

少女は光一の右手を取り、無理に開かせようとした。全裸の女子にいきなり手を捕まれるなど・・光一はどうしようもなく、ぎゅっと玉を握り込んだ。

「痛い！ごめんなされ。もう無理はいいませぬ、わが主人よ」

少女が叫んだ。額に手を当て、苦しそうに息をしている。

「光一君、手の力を抜いてみて」

いいながら先生は、羽折っていたカーデイガン少女にかけた。手を緩めると少女はほっと息をついて俯いた。

「ほんの、悪戯心というに」

光一の口はあんぐりと開いてしまった。

『この娘が、さっきまで雷をまき散らしていた雷丸？それに確か、僕を主人と・・』

「雷丸、あなたの霊力は、この光一君が握っています。あなたが大人しくしていると約束するなら、瞳を返しましょう。ただ、今のうちに、何時でも取り去ることができるとを忘れてはならない」
先生が表情を変えずに、低い声でいった。このような先生は初めてだった。学校で叱る時は眉をつり上げたり、声のテンションを上げるが、それよりずっと怖い。
少女は、先生を睨みつけた。

光一は少女の前に左手を開き、中の窪みを見せつけてみた。

「ああ、それは！」

少女の目が見開いた。恐怖、そして憧れが混じっているようだ。

「光一殿といわれたか、我が雷光の瞳、その手に納めれば、私そのものが、あなたの中に溶け入ります」

「へっ」

光一は慌てて左手を握った。こんな娘が体に入ってくるなんて・・
とんでもない。

「雷丸よ、今一度、聞きます。大人しくしていると約束できますか」
「是非もないこと。約束いたします」

「じゃあ、光一君、雷丸に瞳を返してあげましょうか」

先生の顔には、優しい微笑みが戻っていた。

「いいの？」

「精霊は、人間と違って、必ず約束を守るの。だから大丈夫」

光一が右手を開くと、雷光の瞳が宙に浮かび上がった。

窪みのある左手にゆっくりと近づいていく。開いていた左手を握り直すと、方向を変えて少女の額に吸いこまれるようにはまった。

それと連動するように、左手に電気が走った。そっと開いてみたが、何も起こらなかった。

「ありがとうございます」

少女は大きな黒目で光一を見つめ、掠れた小声でいった。胸がどきどきしてしまった。真っ直ぐな黒髪の少女は、これまで見たこともないくらい可愛いかったのだ。

「ど、どういたして、まして」

もごもごしゃべっていると、先生が拳骨を頭に落とした。

「こらっ！雷の精霊に心を奪われてどうするの」

「それで、この女の子はだれ？雷丸はどこ？」

今まで、ぼうつとしていた勉が、バチバチと瞬きをして話した。

その後、躰をかき始めた清水探偵を玄関の中に移動させ、光一と勉は先生の運転する車で家に送ってもらった。

雷丸は、ハンドルを握る先生の隣に大人しく座っていた。

「・・・はて、木々の精霊、地の精霊、全ての精霊の力が弱まっている」

時折、窓の外に顔をつき出しては、小さくつぶやいていた。

勉と自転車を先に降ろし、そのあと光一の家に回ったが、光一が降りようとすると、雷丸も立ち上がるうとした。

「私の霊力は光一殿と共にある。私があるのに連れ添うのは、当然の定め」

そういつて光一の顔をのぞきこんだが、先生がきっぱりといった。

「あなたは私と一緒にいるのよ。この世界に出現したあなたは、学ばないといけないことがたくさんあるわ」

「そう、この人は僕の先生。だから、いうことを聞かなければいけない」

この言葉に、雷丸は小さく肩を落としシートに座った。

先生は、車を降りて、光一を玄関まで送ってくれた。

呼び鈴をきいて、ドアを開けたのは父さんだった。いつも家にいる時の服装、白い股引とＴシャツ姿。人前に出るには、ちよつと恥ずかしい格好だ。

「やや、先生、今ちようど風呂から出た所で、こんな格好で失礼します」

言い訳がましく説明した。

「すみません、息子さん、遅くまで引きとめてしまつて」

丁寧にお辞儀をした先生は「じゃあ、また明日」といい、車に乗り込んでいった。

「清水先生つて、いい香りがするなあ。おまえにも移っているぞ」父さんは光一の周囲をくくん嗅ぎながらつぶやいた。先生に憧れるのは分かるが、母さんが聞いたら何というだろう。それにこの香りは、地底霊に飲み込まれないためのもの。

『手が届かない花の香りを楽しむ父さん、明日も仕事、頑張つて』
光一は小さくつぶやいた。

その夜は、なかなか眠れなかった。

ベッド横の青白く光る時計の針は、すでに0時を過ぎている。チツチと時間を刻む音が、静まり返つた部屋に大きく響いた。

隣部屋の母さんと父さんは、もう寝たのだろう、壁の向こうからは何も聞こえない。予想と違い。母さんはえらくご機嫌だった。勉強を聞きに行ったという先生の電話を信じていて、

「光一も、やつとやる気になつたのね」と臨時の小遣いまでくれた。あまり誤解されては困るが、悪い気はしなかった。

父さんは「今度、先生の家にお礼に伺わなければな」などと余計なことを考え始めていた。

とにかく家の中は明るくて平和だった。

「けど、」

光一の心はざわめいていた。

様々なことが連続する津波のように押し寄せて、ぜんぜんまとまらない。誰かに話せたら、すっきりするのだからけど、そうはいかない。左手の窪みの辺りが、時折ビリビリと痺れた。

・・・ありがとうございます・・・

ぼつとすると可愛らしい少女の顔が浮かんだ。

『だめだ。他のことを考えなくては、考えなくては・・・』

『

9、先生のいとこ

「光一、遅刻するわよ」

母さんのけたたましい呼び声。光一がハッと枕元の時計を見ると、七時五五分。

「しまった」

目覚ましのスイッチを押すのを忘れていた。ベッドから飛び起きて階段を駆け下り、テーブルの上のトーストを口に詰め、牛乳で流し込んだ。母さんが呆れた顔を向けるなか、バッグを引っかけて家を飛び出した。

風は冷ややかだが、太陽が優しく照りつけて、とても心地よかった。駆け足気味に歩いていると、後ろから「おはよう」と低い声があった。「さては」

立ち止まって振り返ったが誰もいない。

『ん？今日こそは本当の空耳か』

首を傾げながら前を見ると、

「バー」

灰色の塊が飛びかかってきた。

「もう、朝から」

溜息をついた光一の目の前で、灰色の犬が楽しそうに回っていた。清水探偵だ。

「どうだ、驚いただろう」

「別に」

「いや、驚いたに決まってる。驚いたっていつてくれ」

清水探偵は目を潤ませながら、光一を見上げた。

『まるで父さんみたいだ』

光一は思った。期待もしていないのに仕様もない冗談をいう。無視

されると、一人悲しそうな顔をする。大人の相手をしてあげるのも、なかなか疲れるものだ。

「はいはい、びっくりしました」

「ほら、やはりな、ウワオーン」

清水探偵は満足そうに背を伸ばした。光一は今度こそは本当に驚いた。清水探偵の吠え方の酷さといったら・幼稚園児でも、もつとましにやるだろう。

「それで用件は？僕、遅刻しそうなんだ」

「なに、昨日いろんなことがあつただろう。体調など壊していないかなと思つてな。その様子なら大丈夫そうだ。驚かしてすまんかった」

灰色の犬は、そういつて脇道に入つていった。光一の胸が温かくなつた。子犬の魂を救おうとして、犬になつてしまった心優しい探偵。早く仕事の手伝いがしたい、心から思つた。

学校の下駄箱に着いた所で、チャイムが鳴り始めた。上履きに足を突っ込み、大慌てで階段を駆け上がった。ちょうど二階にある教室に入ろうとした時、前の入口から教頭が入ろうとしていた。

光一は喘ぐ息を抑え、何事もなかったように、窓際の最後尾の席についた。列の先頭に座る勉が、振り返つてにんまりした。

「あれ、光一君つて、宇宙人と仲よかつたっけ」

隣のはるかが不思議そうに聞いた。

「ああ、意外といい奴だしね」

軽く答えた。彼のことをもつと話してあげたかったが、いきなりは変なので、それ以上は黙つていた。

「さて、今日の日直は誰かな」

坊さんのように髪を剃り上げた教頭が教壇に立っていた。教頭といえば、学校を巡回していて、時折、教室に入ってきては何事もなく

出ていく人なのだが・・・。

「清水先生に何かあったんですか？」

いきなり勉が大声で聞いた。皆がガヤついた。勉が、他人を気にする発言をするなど、これまでなかったことだからだ。

『雷丸に何かされたのか』

一瞬、不安が光一の頭を掠めた。

が、教頭の顔は笑っていた。

「特に何がというわけではない。用があつて少し遅れてくるんだ。君達もすぐに分かると思うよ。それにしても、清水先生は羨ましいな。生徒にこんなにも心配してもらえるなんて」

そのまま朝会が始まり、ついで一時限目の道德の授業に入った。以前は体育を受け持っていたらしいが、教頭の声は張りがなく、耳の周りでモゴモゴと漂っているようだった。

睡眠不足が祟つてか、光一の瞼が徐々に落ちてきた。視界に垂れ込めた眠気の霧の向こうで、黒板に文字が書かれていった。誰かが当てられる度に姿勢を正したが、すぐに崩れていってしまふ。もうすぐ休み時間。冷水器の水で、顔でも洗えばすつきりするだろうに。

『時間よ、早く進んでくれ！』

「おう、わしの仕事は済んだようだ」

低い声が響き、教頭の顔が消えていった。代わりに現れたのは清水先生の顔。その隣には、見覚えのある女子が立っている。その黒い瞳が向けられた時、光一の左手にピリツと電気が走った。

『まさか、これは夢だ。あの娘が教室にいるなんて！』

跳ね上がるように立ち上がった。勢い余り机に膝をぶつけた。

「ああ、危ない！」

可愛い声が教室にもれたと思つたら、ふらついた体を細い腕が支え

ていた。

「お気をつけください」

「いや、あの、えー」

不覚にもまごついてしまった。女子に身体を支えてもらうなど初めてだった。隣のはるかが、ぐいと首を伸ばした。目をしばしばさせて雷丸を見ている。

「なに、なにが起こったの」

教室がにわかになわついた。はるか以外の生徒は、頭を動かして教壇の周囲を探していた。

雷丸のあまりにも素早い移動に、かき消えてしまったように見えたのだ。ちらりと光一を見た清水先生はもちろん気がついていないが、教壇の後ろを探すふりをしている。

「さあ戻って。皆に君の正体がばれたらまずい」

黒髪の少女にささやいた。

「しかし・・・」

雷丸は唇を尖らせた。生徒の一人がこちらを見た。勉強だ。メガネの縁を押さえて見つめている。それに釣られて他の生徒もこちらを向きかけた。

『もう、なんで女子って面倒臭いんだ』光一は無理矢理、笑顔を作った。

「ありがとう、雷丸。気を遣ってくれて」

微笑みが陽炎のように空中に揺れたかと思うと、清水先生の声があった。

「恥ずかしがってないで、出てきなさい。皆が変に思うわよ」

先生の机の後ろから、雷丸が顔をのぞかせた。

「ねえ、あの娘、ここにいたよね」

はるかが瞬きしながら聞いた。

「さあ、見間違いないか」

光一は素知らぬ顔をして椅子に座った。雷丸は先生に手を引かれ、教壇に戻った。

「皆、遅れてきてごめんなさい。新しいクラスメートの転入の準備があつたの。自己紹介できるかしら」

皆は不思議な転校生をよく見ようと、斜めに横に頭を突き出している。先生の機転で、姿がかき消えたのはごまかせたらしい。

「私、清水ひかりと申します。知らないことばかりですが、皆様、どうぞよろしく願います」

黒い瞳がきらりと輝き、長めの前髪が揺れた。額には、目立たないように絆創膏が張つてある。奇妙な言葉遣いに笑いが起こつてもよかつたのに、皆の間からは、フワーと溜息が漏れた。

上下の紺のブレザー制服に紅色のリボンタイ、ごく普通の格好をしているのに、そこだけ光が当たっているように、雷丸は輝いて見えた。

『皆、騙されてはだめだ。飛び切り可愛く見えても、彼女は人間じゃない。雷を落とす精霊なんだ』

心の中で叫んでみたが、油断すると、当の光一も見取れてしまう。

「先生、質問していいですか」

クラス委員の茂が手を挙げた。

「はい、どうぞ」

「清水さんの名字は、先生と同じですが、何か関係があるのですか」

「ええ、実は、ひかりは私の従姉妹なの。ずっと山奥のお祖父さんと一緒に暮らしていたのだけど、急にお祖父さんが亡くなって、私の家に来たの」

『おい・・・』

全くの嘘話に、光一は頬杖をついていた肘がずれ、机に顎をぶつけてしまった。おまけに舌を噛んでしまい、目にじんわり涙が浮かんだ。

「もう、落ち着いてよ」

はるかが肘鉄砲を喰らわした。数人の生徒が振り返ってにやついている。

「山奥でのお祖父さんとの暮らし。それで言葉が、昔の人みたいだったり、いろいろ混じっているのね」

廊下側の席の小百合がいった。皆はなるほど頷いた。察しによすぎる？小百合は、先生のでっち上げ話に上手く乗せられたのだ。先生の表情は優しく綻んだが、目の前で手をあげた生徒に、わずかに曇った。

「何か？」

「転校に際しては、いろいろ書類が必要なんですよね。前の学校の成績とか、健康診断の結果とか、全部揃ったのですか」

勉が聞いた。別に悪気があって聞いたのではなかった。確かに、昨日現れたばかりの少女が、あっさり学校に入れることは奇妙なことである。

「さすがに勉君、鋭い質問ね。まだ書類がそろっていないから、転校は正式ではないの。でも、家に一人にいるのも寂しいだろうから分かってくれる？」

先生は軽くウインクした。

「は、はい、そういうことなら理解できます」

勉は、光一に振り返りながら返事した。瞼がとろりと垂れている。

できたてほやほやの転校生、清水ひかりの座席は、教壇のすぐ横、列からはみ出た所になった。先生が人権問題について話している一方、ひかりは、興味深そうに教室のあちこちに目を向けている。光

一は目が合わないように下ばかり向いていたが、時々、左手にビリツときた。顔を上げれば、愛らしい瞳が向けられていた。
『いったい、僕はどんな顔したらいいんだ！』光一は慌てて、また下を見た。

やがてチャイムが鳴り、生徒達は三々五々に散らばって休み時間を過ごした。

ひかりは光一の方に駆け寄ろうとしたが、先生がその腕を掴んだ。すぐにも女子が周囲を取り囲み、あれこれ質問しては、キヤーキヤーと盛り上がり始めた。

光一は教室を出た。他の生徒と連む気にもなれず、廊下で突っ立っている、勉がふらふらと寄ってきた。

「光一君、さつき先生が片目をつぶったのって、なに？」

「そんなことわからないのかよ」
思わず吹き出しそうになった。異常なほどの物知りなのに、ウィンクを知らないのだ。それに質問なら他にあるはずである。雷丸がクラスに来て、どうなってしまうのとか。

「あれはウィンクだよ。ウィンクされて、勉はどんな気持ちになった？」

「なんかごまかされたような。けど、お願いされて嬉しくなって、分かりましたって感じになって」

「それだよ。綺麗な女性ひとにやられると、男は嬉しくなって、へいへいしてしまうやつだ」

光一の説明に、勉はまだ首を傾げていた。

「たぶん先生は片目をつぶるサインで『秘密を守って、雷丸のこともよろしく』と伝えたんだと思うよ」

「うん、それなら分かるような気がするけど、よろしくっていわれたって、どうすればいいの」

「さあ、その所が問題なんだよ」
二人は腕を組んで唸り合った。

二時間目のチャイムが鳴った。教室を出ていた生徒たちが、ぱらぱらと教室に戻っていく。

「僕らも戻るか」

勉に声をかけたところで、光一は妙なことに気がついた。

男三人、女二人のクラスメートが、隣の資料室から出てきたのだ。皆、手には英単語集を持っている。どうやら休み時間に勉強していたらしい。次の授業は英語で、単語テストがあるはずだった。

「すごい、皆、英単語の勉強していたのかい」

光一はその内の一人、信二に声を掛けた。

「当たり前だ。お前みたいに呑気でいられるか」

「・・・」

陽気でのんびり屋の信二から、そんな言葉が返ってくるななど、どう返してよいか、分からなかった。その声は切羽詰まったようで、顔は青ざめていた。他の連中も同じだった。そういえば最近、光一は信二たちと連んだことがなかった、休憩時間も放課後も。

「英才ゼミナールだよ。テキストを見たことがあるけど、あそこに通いだしてから彼らは勉強し始めたんだ」

五人の後ろ姿を見ながら勉がいった。

「・・・最初の頃はそれほどでもなかったけど、一ヶ月ぐらい前から本当に熱心によってる。資料室で雑読している僕のこと邪魔にならないくらいに」

「休み時間も勉強か。そんなに必死にならなくてもいいのにな」

「そう、テストの結果は気になるけど、勉強は本来、美味しいお菓子みたいに楽しんで味わう物だものね」

勉の言葉に、光一の顎はがくりと落ちた。

一旦、職員室に行った先生が帰ってきて授業は始まった。

「それでは先日伝えた通り、今日は英単語テストをするわね。ひかりちゃんには分からないかもしれないけど、頑張ってみてね」

先生の言葉に、誰かがクスツと笑った。従姉妹の名前を、ちゃん付けするのがおかしかったのだろう。と、

「静かにしろ、忘れちまうじゃないか」信二がきりきりと怒鳴った。転校生の登場に陽気になっていた教室に、冷風が吹き抜けた。

「どうしたっていうんだよ。単語テストぐらいで怒鳴るなよ」

光一は思わずいつてしまった。同時に左手にビリツときた。慌てて前を見ると、ひかりが信二を睨みつけていた。横には、いつでも捕まえられるように先生が立っている。雰囲気が変わってしまった教室だったが、ほとんどの生徒は、光一に賛成してくれたようだ。冷やかな視線を信二に送っていた。

「どうせ、お前にはわからないよ」

信二は力なく俯いた。その目には涙が浮かんでいるように見えた。

「今回のテストは、個人それぞれの英単語修得数を知ってもらっためのものよ。他の人と比べるものではないわ。結果を気にしすぎる必要はないのよ」

ひかりの表情が穏やかになったところを見計らい、先生がいった。

「でも先生、結果には平均点がつくんでしょ」

信二がうつむいたまま聞いた。

「いいえ、平均点は出さないわ。ただし、今日の放課後までに丸をつけて返すから、間違った単語があったら、居残りして五回ずつノートに書いてもらうつもりよ」

「なんだ、そうなの」

信二の顔が急に綻んだ。同じ塾に通う他の四人もそびやかしていた肩をゆるめた。

「そりゃないよ・・・」

光一にとっては平均点がつこうが、そのまま帰れる方がずっとよか

った。母さんの小言を五分聞けばすむことなのだから。

「では配るわね」

先生はテスト用紙を列の先頭の生徒に渡していった。手元まできたテストをめくった時、光一は頭がくらついた。白い用紙には三百の問題がびっしりと詰まっていた。

10、放課後の密談

「単語テストの時はごめん」

バッグを肩に掛けた信二が、光一の机の横にやってきた。表情は柔らかくなっていたが、顔色は相変わらず青白かった。

「いいってことよ。それより、もうすんだの？」

「うん、七個間違えたから、七かけ五で三五個書けばよかったからね」

「で、光一は？」

机上のテストをのぞきこんだ信二の顔が強ばった。

ペケマークは半分を有に超えていたのだ。いくつ英単語を書けばいいのか、計算するだけでも恐ろしい。

「いいよな、もう自由なものな」

溜息をついた光一に、信二は悲しそうに首を振った。

「家に帰ったら、すぐに勉強しないといけないんだ。塾でテストがあるからね」

「塾でもテスト、そいつは大変だ」

「じゃあ」

「ああ」

光一は肩を落として教室を出ていく友人の後ろ姿を見送った。

五時限目が終わった教室・放課後ながら、たくさん生徒が残っていた。勉は、おそらくぶん全問正解だったのだろう、前列にその姿はなかった。気になるのは、その前の席、ひかりこと雷丸だが、彼女もいなかった。

光一は朝からずっと緊張し続けていた。原因はもちろん ひかりだ。事あるごとに目が合い、その表情が変わる度に、左手にビリッと電気が走った。どうやら左手の窪みの痛みは、彼女の感情と連動して

いるらしかった。

しかし、問題が起きなかったことには拍子抜けした。ひかりは思いのほか、クラスに溶け込んでいたのだ。

『今日は一人で帰ったのか。そもそも、井戸から出た後の彼女の家ってどこだ？やはり先生の家か？』と、いけない。五時が来たら時間切れ、書ききれなかった単語は宿題になってしまう』

光一は気持ちを引き締め、鉛筆を握った。

チツ・・・

チツ・・・

時計の長針の進む音が、静まり返った教室に響いた。その度に他の机から聞こえる鉛筆の音は減っていった。

光一の書いている単語から角がなくなり、文字のめりはりがなくなつた頃、五時を知らせるチャイムが鳴った。顔を上げれば、教室にいるのは先生と光一だけだった。

「できた？」

教卓で本を読んでいた清水先生が寄ってきた。父さんではないが、とてもよい香りがした。昨日のラベンダーではなく、バラのような感じだ。

「うっん、まだあと十個以上。かける五で五〇個以上」

「どうする、宿題にする？それともやっってしまう？」

「やる！」

先生はにこりと微笑んだ。僅かな会話だったが、頭が冴えた。硬くなつてしまった指をほぐしながら、光一はなんとか全部書き上げた。

「あのう、雷丸っていうか、ひかりちゃんは？」

苦勞の成果を先生に見てもらいながら光一は聞いた。

「気になる？」

先生が悪戯ばい目で見上げた時、廊下から笑い声が聞こえてきた。

「ほら、来たわよ」

教室に顔を覗かせたのは、宇宙人 勉と、ひかりこと雷丸だった。

「光一君、ひかりちゃんて、すごいんだよ」

勉が鼻息荒く入ってきた。

「どうして」

「今、僕ら図書室に行つてて、いろいろ話してたんだけど、ひかりちゃん、何でも知ってるんだ。英単語や難しい漢字を書けるのはもちろん、それこそ、千年以上も前からのことをずつとだよ」

「さようなことは当たり前。私を捕まえていた地底霊は、飲み込んだ人間のエネルギーとともに、記憶の一部も取り込んでいた。それが私にも伝わっていただけの事」

ひかりは平然といった。

「ふむ」

光一は納得した。それで彼女は、いきなりクラスに入ってきてても、普通に他の子と話ができたのだ。

「けど・・・他人の記憶だけで、こんなにも人間らしく振る舞えるのだろうか」

「君つて、本当に精霊なの？額の目がなかったら、ごく普通の人間の女の子だよ」

光一は胸に引っかけたことを口にした。

「私が普通のおなご・・・」

ひかりの顔が急に強ばった。額の絆創膏が剥がれ、瞼のような皮ふが開いた。雷光の瞳がストロボライトのように光を放射し始めた。

「私は雷の精霊、数多あまたの雲を呼び、大地に黄金の矢を降らせる者」

「急にどうしたの？」

白い羽毛が生え始めた顔をのぞき込んだ勉は、正体を知っているはずだが、短く息を吸い、その場に立ち竦んだ。

『このままではいけない』

光一は眩しさにふらつきながら左手を広げた。上手くいくか分からないが、昨晚のように、雷光の瞳を取り去るのだ。

「待つて、光一君！」

先生の声が響いた。

「雷丸、誇り高き精霊よ。交わした約束を守られよ」

言いながら、ひかりの額を手で覆った。火花が漏れ、先生は体をビクビクと痙攣させたが、手を離すことはなかった。

僅かな時間だったのかも知れないが、長時間が経過したようだった。天井の電灯が点滅する下、光一は何もすることができず、ただ突っ立っていた。

やがて先生は、ひかりの額から手を離し、ガクリと膝をついた。

「先生、大丈夫」

「ええ、大丈夫よ。二人は？」

先生の白い顔は、赤みを差して汗の玉を浮かべていた。

「僕は平気。勉もたぶん」

光一の隣で凍りついていた勉は、十秒もしてから「平気です」と頷いた。

ひかりの額の瞳は、いつの間にか閉じていた。生え始めた羽毛も溶けるように消えていった。

「私はどうしてしまったのか？光一殿の言葉に、これほどに胸を騒がせるとは」

黒い瞳からは涙が溢れていた。

・・・数日後に光一は聞いたのだが、この時、先生も光一と同じような疑問をひかりに抱いていた。もしや、彼女は元々は人間で、何かのきっかけで精霊になったのではないかと。

「人間に似ているといわれて、怒り狂う精霊は多いわ。でも、そのことで涙を流す精霊はいない」

先生はいった。ひかりに感じた疑問は消えないままだったが、とにかく、決して口にしてはならないことがあることを光一は知った・

しばらくして、勉が口を開いた。

「先生、用って何だったんですか」

「そうだったわね」

先生は三人に椅子に腰掛けるように促し、自分も座った。額の絆創膏を張り直したひかりも、うなだれながら座った。

「用？それで二人は残ってたの」

「実は、信二君のことなの。何か変わったことはないかしら」

先生が聞いた。

「変わったことって。考えてみれば、あいつ、最近ずっとおかしいよ。そりゃ二年のこの時期だから、勉強に力を入れ始めるのもわかるけど・・・冗談を言わなくなったし、顔色も悪いし、全く余裕がなくなっただってどうか・・・休み時間にまで資料室で勉強するなんて・

・

「先生は、信二君が英才ゼミナールに通っていることを知らないのですか？」

勉が首を傾げた。

「ええ、生徒達って先生には塾のことは話さないことが多いの。それに半月ぐらい前に、彼が授業中に他の勉強をされていて注意したことがあったわ。だから話さないのは尚更ね。休み時間のことも知らなかったわ」

「でも、なぜ、信二のことを？もしか、清水探偵が調べている精霊と関係があるということ？」

「ええ、はっきりとは言えないけど、彼のテストの点への怖がりには普通ではなかったわ。たとえば、保護者が教育熱心でも、あれほどに

はならないものよ」

「信二だけじゃない、他の四人もだ」

「じゃあ、精霊の問題は、英才ゼミナールにあるということですか？でも・・・」

メガネを小突きながら勉がいった。

「あの塾がある所は国道沿い。先生の家からは西の方角。精霊の問題は、北で起こっているのでは？」

「そうなの。じゃあ、私の勘違いなのかしら」

「違わない。先生の勘は当たっている」

ひかりが顔を上げた。黒い瞳が鋭く光っている。

「あの五人は人間以外の何物かに怯えている。それは遙か昔、私を怖れた人々から感じた怯えに似たもの。それに、怯えているのは彼らだけではありませぬ。廊下で擦れ違った幾人もの生徒からも同じ怯えを感じました。もしその生徒たちが、皆、同じ塾に通っているとしたら」

「何かある!」

四人は大きく頷いた。

11、調査は開始したが・・・

それから数日、光一と勉は忙しくなった。何はともあれと、勉強熱心な生徒たちの目録を作り始めたのである。

「これを使いたまえ」と清水探偵から渡された超小型デジカメラ内蔵のメガネをかけ、校舎を歩いて回り、休み時間にまで勉強をしている生徒たちの写真を撮っていったのである。これが頭の中での計画と違い、やってみると恐ろしく大変なことだった。

勉はともかく光一は、普段休み時間を共に過ごしていた仲間とうまく離れなければならなかったし、何よりも、二年B組の生徒達の行動エリアを超えて行動するということは、それだけで、ひどく気を遣うことだったからだ。おまけに縁の厚いメガネで写真を撮っているなど、怪しまれてもいけない。教室内にいる生徒を写真に収める時は

「えーと 君は・・・」

と人を捜す振りをして、教室をのぞき込み、メガネの耳架け部にあるシャッターボタンを押した。

一、二年のいる一、二階での撮影は一応スムーズに済んだが、さすがに三年生のいる三階や、教室内では胃が痛くなるほどの緊張を強いられた。受験シーズンの手前、当然、勉強をしている生徒も多く、写真撮影の回数も多くなる。それで、いちいち止まっていると、「おまえら何見てんだよ」とばかり睨みつけられる。それだけならいいが、「二年生は三階にくるな」と無下に追い払われたこともあった。勉の家にあつた照度計を持ち出して「廊下や教室の明るさを調査しているんです」と何とか取り繕ったが・・・結局、全部の教室を回るのに、一週間もかかってしまった。

ひかりは、光一らと共に行動したが、何もしなくても目立つ

てしまう女子がいては、都合が悪いということ、外れてもらった。撮った写真は、ひかりに見てもらい、例の怯えを感じた生徒の顔をプリントし、清水探偵に渡した。探偵は、その姿をよいことに、その生徒の動きを探った。

夕刻、家を出た生徒達は、皆、同じ方向、【英才ゼミナール】に向かっていた。

国道沿いにあるその塾には、日曜日に皆で様子をうかがいにいった。壁が真っ黄色に塗られた五階建ての建物だったが、

「ここには苦しんでいる精霊や、人を害する精霊の気配はありません」

中に入るまでもなく、ひかりが断言した。

先生の家の蔦の葉が示しているのは、北の方角。やはり塾のある位置とはズレていたのだ。

「異変はすでに起こっているはずなのだ」

清水探偵は、北の方角を調べ続けた。しかし、その方角は、ビルが建て込んだ地域と重なり、人目につけばすぐに保健所の野犬係に通報されてしまい、犬の姿で歩き回るのには限界があった。

念のため、ひかりがハヤブサの姿になって夜の上空を飛んだが、求めている精霊の気配は得られなかった。

「いるとするならば、それは地下」

ひかりはいった。

何の手掛かりも得られないまま、光一と勉はいつもの生活に戻った。ひかりは、同居している先生の教育もあり、皆の前で光一の方に駆け寄ろうとはしなくなった。しかし、言葉遣いは相変わらずで、他の生ことは、「君」「さん」付けで呼ぶ一方、光一だけは「殿」付

けで呼び続けた。

「僕だけ、殿をつけるのはおかしいよ」

ある日の放課後、光一はそのことを指摘したが、ひかりはすぐに首を振った。

「それは、主あいつの立場にある方が、疑問とすることではありませぬ」

「主だなんて、そんなつもりないよ」

「そうでないならば、ここに、私がいる理由はありませぬ」

ひかりはそういって、鋭く光一を見つめ返した。

確かに雷の精霊が、おとなしく中学生生活を送っているなど奇妙なことであった。勝手気儘に空を駆け、爆裂するような雷を発してもよいのだ。それをしないのは、光一が霊力を握る左手を持っているからなのだ。

光一の呼び方について、クラスメイトは、冷やかしたり、首を捻ったりしたが、先生が「亡くなったお祖父さんも、光一さんだったから、君付けはしづらいのよね」と一言とつけ加え、さらりと流れてしまった。

それにしても、ひかりは際立っていた。

勿論、とびきりの美人で、勉強もスポーツもできる才女で、神秘的で・・・それだけ揃っていれば当然かも知れない。

「けど、何か違うんだよね」時折、光一は勉につぶやいた。

立ったり、歩いたり、微笑んだり・・・当たり前の所作に、雅ともいえる高貴な魅力が滲み出ていたのである。

「うん。やはり彼女は雷の精霊。人間の脳に作用する電磁波みたいなもの発しているのかもしれないね」

当たり前のようという勉の一方、光一は十分には納得できなかった。

人を惹きつけるひかりの魅力は、それだけではなかった。

音楽室で授業があつた時のことだ。チャイムが鳴る前に、ひかりは、和楽器の横笛を何気なく手に取つて構えると、いきなり吹き始めた。後から音楽専科の厳しい男性教諭がやってきたが、とめたりはしなかつた。

その胸奥に響く、美しくも悲しい音色に、教諭とても心を奪われてしまつたのだ。皆、途中から涙が溢れて止まらなくなつてしまつた。そのまま、授業時間になつても吹き続け、ひかりが笛を置いた時、誰も気付いていなかった授業終了のチャイムが鳴つていた。

「素晴らしい。どこで習つていたのかね」
教諭が聞いたが、ひかりの口からは「知りませぬ」という言葉が返るばかりだつた。その時に浮かべていた深い憂いを含んだ表情に、誰もそれ以上は尋ねることはなかつた。

一方、清水探偵だが、なんだかんだと理屈をつけ、毎朝のように光一を待ち伏せしていた。

最初の頃は、時間をずらして、勉の家の方にも行つていたらしいが、いくら驚かしても
「何の用ですか？」

と聞かれるばかり。それで、サービス精神のある方に絞つたようだ。おかげで光一の、しょうもないジョークや驚かしへの反応は、より磨きがかかることになつた。

「探偵の家の・・・」

ある朝、光一は清水探偵に聞いた。

「あの蔦の葉は赤いままだけど、事件らしいものは起こつていないよ。もう、放つておいてもいいのではないの？」

「いや、精霊は苦しんでいる。そして生徒たちは何かに怯えている。表面化こそしていないが、既に何かが起こっている。そもそも、探偵という仕事はすごく地味だし、時間もかかるものなんだ」

そう返事をした清水探偵の顔は引き締まっていた。

「でもなぜ、そんな熱心に首を突っ込むの。精霊のことを大切に思うのは分かるけど、探偵料などは貰えないんでしょ」

「確かに。しかし、これがわしの仕事だ。それに金銭などには代え難いものが得られる。まあ、そいつはこの一件が済んでからのお楽しみということにしよう」

12、事件が起こった

光一と勉が先生宅に乗り込んでから、三週間が過ぎようとしていたある日の朝、

寝ぼけ眼の光一がトーストにかじり付いていると、

【被害にあったのは、中学二年生の荒井信二くん】

耳慣れた名前が唐突にテレビから流れた。

「あつ」

画面に眼が釘付けになった。そこには信二の家が大きく映し出されていた。

「荒井信二つて、光一と同じクラスの」

「しいつ！」

光一は口に指を当て、首を突っ込んできた母さんのおしゃべりを止めた。

ニュースは続いた。

【・・荒井君は昨夜〇時半頃、自宅の二階で睡眠中に、数千匹の鼠の大群に襲われました。悲鳴を聞きつけた両親が発見し、すぐにも鼠を追い払いましたが、全身をかじられ、大量の出血があった様子です。

すぐに救急車で病院に運ばれ、命は取り留めましたが、ショックのため、意識はまだはつきりしていません。

母親の話によると、彼は、ここひと月ばかり、自分の部屋に大量の菓子を持ち込んでいたそうです。そのことが鼠を呼び寄せたとも考えられますが、明確なことはまだ分かっておりません】

光一はトーストをくわえたまま、通学バッグを抱え、家を飛び出し

た。

遅刻するような時間ではなかったが、悠長に支度している気分ではなかった。

「おはよう」

門を出た所に、清水探偵がきっちり足を揃えて待っていた。変に細工されるより、よほど驚いた。

「清水探偵、あのっ」

口にくわえていたトーストが、ポトリと落ちた。

「そうだ。菓子を食べる鼠はいるかも知れない。でも、それが大量に押し寄せて、人を襲うなど普通ではない」

清水探偵は、光一の頭の中で混乱していたことを、きっちりまとめてくれた。

「精霊が関係してるということ？」

「その通り。さあ、忙しくなるぞ。わしはこれから信二君の家に行く。彼を襲った鼠の臭いを辿れたら、問題の精霊の居場所に行き着けるかもしれない」

「僕は何をすれば」

「自分でこれだと思つてことをやってくれ。そのために、こいつをプレゼントしよう」

「痛っ！」

清水探偵は、早足で歩く光一の足に、一度がぶりと噛みついて離れていった。

鋭い痛みと同時に、はつきりと目が開いた。

清水探偵は、浮き足立っていた光一に、喝を入れてくれたのだ。いったん立ち止まって深呼吸した。

『急いで学校に行ってもできることはない。こんな時こそ、落ち着かないといけない』

教室についた彼を待っていたのは、騒がしい噂話の洪水だった。五、六人ずつ固まっては、信二の事件について会話している。

「あいつはさ、何か恐ろしい実験をやるうとしていたんだよ」

「前に信二くん、試験の点、すごく気にしていたでしょう。鼠を使つて、塾から試験用紙を盗もうとしていたのよ。でも、鼠が反乱を起こしたんだわ」

「もっと単純だよ。最近、いつも勉強ばかりで、ストレスが溜まっていたんだよ。それでお菓子を買いこんで食べていたんだ。そこを鼠の大群に狙われたんだよ」

勉とひかりが寄ってきた。

「ひかりちゃんから聞いたよ。清水探偵は、信二君の家に行ったんだつてね。それにしても、みんなすごいよ、あんな作り話がどんどんできるなんて」

「どうして人間は、いつも悪者を作ろうとするのか？」

ひかりは険しい顔をして、光一に尋ねた。

「そ、そうだね」

確かにそうだった。皆、口にはしているのは批判めいた内容ばかり、ご機嫌な時は、信二の冗談に笑わしてもらったり、結構助けてもらっていたのだが・・・。

『でも僕だって、事件に首を突っ込んでいなければ、ありもしない噂話をしていたに違いない』

光一はひかりの問い掛けに答えることができず、首を振るばかりだった。

「ねえ、よくわからないけど、おかしいよ」

勉がいった。メガネの奥の視線は、教室のあちこちに飛んでいる。

「あの四人、ほっとしている。昨日まであった怯えが薄れている」
ひかりがつぶやいた。

信二と同じ塾に通っている四人は、それぞれ噂話をしている生徒のグループに入っていた。話に適当に参加してうなずいている。ひかりのいう通り、その顔は随分リラックスしているように見える。光一は無性に腹が立ってきた。

『信二にあんなことが起こって、一番心配してもいいじゃないか。なんでヘラヘラしてられる』

「おい！」

と言いかけたところで、ひかりが手を引いた。

「彼らは、休み時間に集まって話をするのでは」

その通りだった。光一は相棒に振り返った。

「勉強、休み時間になつたら、四人が来る前に、隣の準備室に隠れようぜ」

「私は？」

「ひかりちゃんには教室に残っていて。そうすれば女子も数人残る。

そうすりゃ、ここでは秘密の話はできない。彼らは百パーセント、準備室に行くはずだ」

やがて清水先生が現れた。日直の号令の後、唇を硬く引きながら話した。

「ニュースで知っていると思いますが、信二君が大怪我をして入院しました。でも安心して。お母さんからの連絡で、怪我の状態は軽くて、一週間もすれば退院できるとのことです」

「意識は戻ったのですか、できたら、お見舞いに行きたいのですが」
クラス委員の茂が質問した。

「ええ。その点は大丈夫らしいわ。でもね、今は誰にも会いたくないらしいの。また学校に行けるようになったら、優しく迎えて下さって、お母さんいていたわ」

「はい・・・」

茂は残念そうにうなずいた。

「それでね、みんなに聞きたいことがあるの」
先生は皆の目を見つめながら、ゆっくり話した。

「今度の事件のことで、何かしら知っている人はいないかしら。何でもいいから教えて欲しいのだけど」

実際、先生は例の四人に問いかけているのだ。だが、四人は他の生徒と同様、首をひねるばかりだった。

「今は思い付かないかもね。いつでもいいから教えてね」

あっさりと引き下がり、普段通りの朝の会、そして英語の授業が始まった。

「最近、エンバイロメント ポリューション。つまり、環境汚染について、殆どの英語の教科書が取り上げているけど・・・」

先生の声が軽やかに響く一方、光一は時計の針ばかり気にしていた。一方の勉は、先生の質問に、小学生よろしくハイハイと手を挙げていた。勉強が大好きな勉だが、特に社会や理科、百科事典に載っているような事柄には目がないのだ。

「大丈夫か。授業が終わったら、隣の部屋にダッシュしなきゃいけないんだぞ」

光一は顔をしかめ、調子に乗ってる相棒の後ろ姿を見守った。

「あのう、質問なのですが」

滅多に手を挙げないひかりが、高く手を掲げた。先生の目が泳いだ。「え、なにかしら？」

「私、校舎のあちこちの壁に、小さな犬のシールが張ってあるのを見たのです。あれも電柱に勝手に張り紙することく、環境汚染というものですか？」

「あつ、あのシール、僕も見たことがある」

「すごく小さいのよね」

何人かが頷いた。

光一は驚いた。犬のシールというのは、彼と勉が教室で勉強している生徒を調べた時に、用が済んだ教室に張り付けたもの。ほとんど剥がしたが、まだ少しは残っている。そのことはひかりだって、先生だって知っている。

『今更どうしてそれを・・・』

「そうね、やっぱり環境汚染の一種といえるわね。ただの悪戯かも知れないけど、そういう気持ちの緩みが、本当の問題に発展していくのよ」

「先生、あれは悪戯ではありません」

手を挙げていた勉がいった。皆が「えっ」とばかりに、その顔を覗き込んだ。

「あれは、」

といいかけて、自分が何をしているか気づいたようだった。喘ぐように口を大きく開いた。

「理由はさておき、いけないことはいけないわ。やったのは一人だけかしら？」

先生は光一の方を見た。理由は分からない。しかし訳があって、ひかりは変な質問をして、先生はそれに乗ったのだ。

「僕もやりました」光一も乗った。

「なるほど。では、この休み時間に、責任を持ってそれを剥がしなさい。二人が正直に話してくれた所を見込んで、今からさっそく行きなさい。いいわね」

皆のにやにや笑いに見送られ、二人は廊下に出た。

「シール、どこに残っているかなんて忘れてしまったよ。先生はわかっているくせにひどいや」

「そうだよな」

光一は間抜けなほどに正直な相棒に頷いた。

「待てよ」

ひかりと先生は、勉の性格を見抜いていて、それを利用したのだ。
「・・・そうか！」

光一は相棒の手を引いて、隣の教材準備室に入った。

「さあ、隠れよう」

「えっ、シール剥がしに行くのではないの？」

「勿論ちがうさ。二人は、僕たちに隠れる時間をくれたんだ」

光一は返事をしながら、室内を見回した。ロッカーが三台並んでいる他は、予備の机と椅子が十台ほど後ろに固められている。

「あの四人が来ても、見つからない所・・・」

ロッカーには鍵が掛けられていた。

机の下に隠れたとしても、下を覗かれたら見つかってしまう。さてどうすれば、と考えたところで名案が浮かんだ。

「カーテンを外すんだ」

勉は腕組みをして考え込んでいたが、やっと先生たちの計画が分かったようだ。

「そうだったのか」

といいながら、光一と同様、窓際の机に乗ってカーテンを外し始めた。全て外し終えたところで、チャイムが鳴り出した。

二人は急いで机の奥の方に潜り込み、カーテンで体を覆った。これで覗かれても、ばれやしないだろう。

「写真をとった時もそうだったけど、僕ら本当の探偵みたいだね」

「そう、立派な探偵さ。でもただの探偵じゃない。苦しんでいる精霊のために働く秘密の使いだ」

「難しくいうと、精霊の密使だね」

「精霊密使。それ、格好いいや」

こそこそ話していると、賑やいでいた廊下が急に静かになった。やがて足音が聞こえてきた。

「それ、おいでなすった」

二人は息を潜め、耳を澄ました。

体を覆ったカーテンを少し上げると、生徒たちの足元が見えた。四人、十人、いや一五人ぐらいいる。

入ってきたのは、信二と同じ塾に通う生徒たちに違いない。四人より多かったのは驚いたが、考えてみれば当たり前、二年は三クラスあったのだ。

『まずい、彼らが皆、机を引き出して座り始めたら・・・』

光一は焦った。が幸いなことに、彼らは立ったまま、押し殺したような声で話し始めた。

「今回の試験、簡単だったけど、信二君はよほどひどい点だったのよ」

「それで全体の平均点が下がって、僕らは助かったってことだね」

「これまで数千匹の大群なんてなかったもんな。きつと平均点より下は、信二、一人だったんだろう。それに他の学年のテストがなくて、悪い条件が重なったんだ」

光一と勉は思わず顔を見合わせた。

鼠事件は今回が初めてではなかったのだ。清水探偵のいう通り、小さいながらも事件は起こっていたのだ。

「ねえ、うちのクラスの清水先生、何か知っていたら教えてっていったけど。どうしたらいいと思う？」

「だめだよ、事件の真相が親にばれたら、きつと塾を辞めろっていうよ。ほら、三年生で塾を辞めた先輩がいるけど、試験の度に、それこそ山のような鼠の大群がやってきたというよ。ものすごい量の食べ物を用意して、襲われずに済んだらしいけど、結局、塾に戻ってきたらしいよ」

「塾を辞めても、塾生の名簿からは消されない。それで試験の度に、平均点未滿ってことになってしまうんだ」

「そんな理不尽な」

「でもそれが事実ね。じゃあ、やっぱり先生にはいわないで、内緒にしといたほうがいいわね」

「そう、最初心配してたけど、学校でやった試験は、平均点より悪くても、ネズミは襲ってこなかったもんな」

「それはそうさ、学校学校でテストは違うし、鼠たちだって、そこまでは把握できやしないよ」

『なるほど』

光一の頭の中で一部概略が理解された。単語テストの時の信二の青ざめた顔が、ありありと思い出された。あの時、信二は悪い点をとって、鼠に襲われるのを怖れていたのだ。

「塾の試験で、平均点が出るのがポイントみたいだね」
勉が耳元でささやいた。

「ねえ、誰か何かいった」

一人が低い声で聞いた。

「誰も・・・」

「今、机の下から声がしたようだったわ」

『気づかれたか』

光一は暗がりの中、十センチぐらいの近さで勉と鼻を突き合わせた。丁度、にらめっこの状態である。緊張のためか、勉の鼻の穴が激しく開閉している。

『ああ、そんな顔、やめてくれ！』

「ははは、気にしすぎだよ。僕らは暫く安全じゃないか。そんな神経過敏にならなくてもいいんだよ」

「え、なんで？」

「ほら、信二が入院しただろう。ということは試験があれば、彼は0点扱い。平均点を引き下げられるからね」

「今日も試験がある。ということは、信二君、今夜も鼠に襲われるってこと?」

「そうだよ。でも大丈夫。病院には売店があつて、鼠はそこで、たらふく食べ物にありつけるもの」

「そう。じゃあ、誰も傷つくことはないってことね」

皆の安心の溜息が漏れた。少しして小さな悲鳴が聞こえた。

「鼠よ!」

バタバタと追いついて立てるような足踏みが聞こえたと思ったら、体長五センチぐらいの鼠が、カーテンの隙間から走り込んできた。どこか部屋の片隅に紛れていたのだろう。

「あのネズミ、まるで私たちの話を探っていたみたい」

「考え過ぎだと思うけど、少し気になる」

「捕まえて、どこかに閉じこめよう」

「あのカーテンが盛り上がった所に潜り込んだんだ」

矢継ぎ早に言葉が交わされ、机がガタガタと移動され始めた。

『まずい、このままでは見つかってしまう。うまい言い訳は』

光一は頭を回転させた。

「・・・シールを剥がしていた・・・ではなぜ、隠れていたの?・・・みんなが来てしまって、出るに出れなくなつて・・・それで、シールは?・・・あると思つただけ・・・」

『だめだ、うまい嘘が思いつかない。かといって本当のことでもない』

『一か八か』

光一は左手を開いて祈つた。

『ひかりちゃん、なんとかしてくれ!うっ』

左掌の窪みが痺れたと思つたら、廊下から声が聞こえた。

「あれっ、皆集まつて、何をしておられるのか?」

間一髪、一つ手前辺りで、机を動かす音が止まった。ひかりだった。学校に来て最初の日に披露した、電光石火の早業で駆けつけてくれたのだ。

「女子が騒いでいたから来たんだけど。鼠が出たんだよ」
誰かが上手に取り繕った。全くうまい嘘を思いつくものである。

「いかなる鼠です？」
「ほんと小さいんだけど。ほら、そのカーテンの固まりの中に入
たみたいなの」

光一の耳につかつかと近づく足音が聞こえた。と、いきなり目の前
の床に、青い火花が散った。全身にズクリと痛みが走り、同時に鼠
は弾かれたように外に飛び出した。

「おっ出てきた。捕まえる！」
男子の威勢のいい声が飛び出し、足音がどどどと教室を出ていった。

「お二人様、もう大丈夫」
大量の汗をかいて、髪がぐしゃぐしゃになっている二人を見て、ひ
かりはくすりと吹きだした。

「ありがとう、おかげで助かったよ」

「いえ、これぐらいのことは何でもないこと。それで、話は？」

「うん、手掛かりになりそうなのがいくつかね」

光一はにこやかに頷いた。

一方の勉は、今の電撃がきつすぎたらしく、青白い顔をして黙って
いた。どうやら光一は、ひかりの発する電流に、かなり免疫をもっ
ているらしかった。

13、夜の病院

時計の針は十一時を過ぎていた。両親が寝室に入って三十分は経っている。

「よし、いける」

光一はパジャマを脱いで服に着替えた。厚手のジャンパーのチャックを引き上げ、そつと部屋を出た。慎重に歩いているのに床が軋んだ。息を殺しながらドアの鍵を外し、ようやく外に出た。

「ふー」

溜めていた息を、思い切り吐き出した。見上げる夜空には、砂をぶちまけたような星が光っている。

「おっと、お仕事、お仕事と」

ガレージの戸をこつそり開けて、自転車に跨がった。

『さあ、出発だ！』

こんな夜中に家を出るのは大晦日ぐらい。頬を撫でる冷たい風が、新年を迎えるように新鮮な気持ちにさせた。

目指すは、信二の入院している病院。町の中心を走る大通りに面していて、先日、偵察に行った英才ゼミナルよりは近いはずである。すぐにも大通りに出た。もう夜中近いからか、車はまばらだった。擦れ違った車の運転手が、訝しげな視線を投げた。

光一は慌ててジャンパーのフードを被った。塾帰りの手提げを持っているわけでもなく、中学生がこんな時間に自転車を漕いでいるなんて、どう考えてもおかしい。警察署の前を通る時は、胸がどきどきした。パトカーに乗り込もうとしていた警察官と目が合ったようだが、パトカーは反対の方向に走っていった。

しばらく行くと、前を進む自転車が見えてきた。漕ぎ手は半纏のよ

うなジャンパーを着ている。時折、満天の星空を見上げては、ハンドルをふらつかせている。光一はペダルに置いた足に力を込めた。

「おい、勉！」

「や、光一君。よかった、僕一人だったら、どうしようかと思ってたんだ」

光一は片手を伸ばして、相棒の背中を叩いた。勉も真似しようとしたが、あいにく片手運転は苦手らしい。ハンドルが曲がりかけて、慌ててバランスをとった。

「ほら、見てごらんよ！」

勉が空を見上げながらいった。

「白鳥座の右の方に、彗星が見えてるよ」

「えっ」

勉の見上げる方に顔を向けると、確かに、淡く尾を引く小さな星が浮かんでいた。

「あれって数十年に一回しか、地球に接近しないんだよね。肉眼でも、こんなにはつきり見えるなんて思わなかった」

「ふふ」

光一は鼻水を流しながら話す勉に、思わず笑ってしまった。

「なんだい、何かおかしいことあった」

「いや、勉っていい奴だなって思ってたね」

「また、そんなこといって」

勉はにんまり笑った。

別にからかったわけではなかった。特に約束したわけでもないのに、このように家を出てくるし、そうかと思えば、星空を見て感動したりしている。拍子抜けすることも多いが、付き合いえば付き合い合っほど、勉のよさってものが分かってきた。

「光一君、一人で乗る自転車もいいけど、二人乗りの方がもっと楽しいね」

勉がぼそりといった。

「そりゃそうさ、相棒と乗る自転車は最高さ」

光一は力強く頷いた。

二人は夜空に白く伸びる大きな建物の前で、ブレーキを握った。

美月市立総合病院・信二の入院している所、そして今夜も、鼠の大群が押し寄せる所だった。

二人は自転車置き場の手前、夜間受付の案内灯のついた入り口から入った。

小さな待合いにソファアが並び、五人ばかり人が座っていた。中には赤ん坊を抱いた女性もいる。

「夜の病院って、こんな感じなんだね」

感心したように話す勉の横、光一は案内図を見上げた。

「えーと、中学生の入院してる所は、まだ小児科だろうから・・・この棟の三階だ」

二人が薄暗い階段を登っていくと、中年の男性警備員が懐中電灯を照らしながら降りてきた。

「君たち、夜は、保護者と一緒にいなければだめだよ」

優しい声で話して離れていった。どうやら親と病院に泊まっていると思われたらしい。

「病院って意外と不用心なんだ」

勉が改めて感心した。

三階に上がった所、ロビーのソファアに、髪の高い女性が座っていた。隣には小柄な少女がいる。清水先生とひかりだ。平穏な雰囲気、まだ鼠の大群は訪れていないらしい。

「よかった。間に合った」

光一は勉と目配わせしながら、そっと近づいた。居眠りしている二

人を驚かすつもりなのだ。あと一歩で二人の肩に手が届く。

「バー」

いきなり二人が振り返った。おまけにソファの前に置いてあった大きなバツクからは、黒い影が踊り出た。

「うはっ」

光一らは派手に尻餅をついた。

「わしらを驚かそうなんて、百年早いわい」

清水探偵が牙をガチガチと鳴らした。

「私は、光一殿が家を出られた時から、ずっと気づいておりました」
ひかりは自分の額を指さして、けらけらと笑った。

「君には、何も隠せないんだね」

光一は肩をすくめた。ひかりとは遠く離れていても繋がっている。
くすぐつたいようで、正直に言えば嬉しかった。

「そう、あなたは精霊である私の主人。離れていても、つい見守う
てしまう。それが私の務め」

無邪気に話すひかりの横から、清水先生の拳骨が伸びてきた。

「もう、あなたたち」

目は笑っている。先程見た夜空の星が宿っているようだった。

「仲間なのだから当然です」

胸を張った二人は、先生の拳骨に頭を突き出した。

実の所、光一と勉は、病院に来てはいけないと言われていた・・

二次元目のチャイムが鳴り響くなか、二人は職員室に向かった。そ
して授業に向かう清水先生を待ち構え、資料準備室で聞いたことを
報告したのだ。

「じゃあ今夜も信二君は、鼠に襲われるということね」

腕組みをして考え込んだ先生は、丁寧に頭を下げた。

「それはとても貴重な情報よ。父さんは鼠の臭いを辿るといって
いただけ、鼠は下水道とか地下を移動するから、たぶん、無理だと思

うわ。でも発信器を鼠に付けられれば確実に目的地が分かる。今度こそ、精霊に行きつくことができそうよ。

あとは私たちに大人に任せて。信二くんが襲われたのは夜中、今夜もきつと遅い時間になると思う。だから、二人には無理はいえないわ」

「ここまで手伝って、そりゃないよ」

がっかりした光一の横で、勉が首を伸ばした。

「けど、人の役に立ちたいという気持ちに、大人とか子供の区別ってあるのかな・・・」

小さなつぶやきは先生の耳には届かなかったらしい。

「さあ、教室に行きましょう」

背筋を伸ばし、二人の背中を優しく押した・・・

ロビーに光が射し込んだ。ナースステーションから見回りの女性看護師が出てきた。

「先生、この子たちも生徒さん？」

光一と勉を見て目を丸くしている。

バッグに飛び込む間がなかった清水探偵は、ソファの下に潜り込んだ。

「はい。皆、友人思いで、ほんと困っています」

苦笑いしながら話す先生の横、ひかりの顔が急に強ばった。

「近づいている」

「え、なに？」

看護師が頬を揺らした。壁の時計は、ちょうど0時を指したばかりだった。

「この病棟には、危険な状態の患者さんはいますか」
先生が聞いた。

「いいえ、今夜はいませんわ。これからお決まりの、」

先生の質問に、きよとんとした顔で答えた看護士の言葉が止まった。その目はいつの間にか、白い手に握られたペンライトを見つめている。

「催眠術・・・これって・・・」

勉がつぶやいた。光一はまだ何か話し出しそうな相棒の唇を指でつまんだ。

「あなたは壁の時計を見続ける。時計の針が一時を指したら、見回りの時間・・・」

低い声で繰り返して話す先生に、看護師はこっくり頷いてソファ―に座った。瞬きもせずに時計を見つめている。

「わが娘ながら大したもんだ」

太い足の間から、清水探偵がのっそり顔を出した。

「この仕事をしていたら、このぐらいの事はできなければね。ひかりちゃん、鼠たちは今どこに？」

「すぐそこに。来た」

遠くを見つめていたひかりの視線が下がった。途端、けたたましい悲鳴が響いた。

「下の階だ、行こう！」

清水探偵の唸り声とともに、四人と一匹は階段を駆け下りていった。

既に数十匹もの鼠が、一階の階段の縁に沿って走っていた。子猫ほどもない小さな体だが、数の多さが不気味さを醸し出していた。滑らかなタイル地のせいも、二十センチほどの段差が登れないらしい。この状況なら、信二のいる三階までは辿り着けそうもなかった。

「あれっ」

「なに！」

せっぱ詰まった人声が、暗がりの向こうから聞こえてきた。

どこかしら湧いてくる鼠たちに気を遣いながら進んだ先、夜間入り口の前に、四、五人の人が立っていた。先程すれ違った警備員が、

ガラスドアに懐中電灯を向けている。

「うう」

光一は思わず息をとめた。

ガラスドアの下、三分の一ほどが灰色の小さな塊で埋まっていた。鼠たちが幾十にも折り重なって悶えているのだ。更にドアの向こう、青白い街灯に照らされた駐車場は、一面が夜の海のようにぞわぞわとうごめいていた。

「原因はあの子よ。ほら、昨日の夜中に入院してきた男の子、確かに鼠に襲われたって」

病院の事務員らしい若い女性が、怖々とつぶやいた。

「大丈夫だ。警察に電話したら、すぐに駆けつけてくれるという返事だった」

警備員がいった。その顔色は蛍光灯の明かりのせいか青白く見えた。

「あのう、警察って、何をしてくれるんですか」
勉が開いた。

「そりゃ、警察の仕事は人々の安全を守ることだからな。えーと」
警備員は困ったように天井を見上げたが、答えはすぐにわかった。
パトカーの赤い点滅が、駐車場に見えたかと思つや、その後ろに眩しいほどの照明を発する車両、ポンプ消防車が顔をのぞかせたのだ。

「物々しく見えるが、何をするつもりか」

ひかりが眉をひそめた。

「あの型の消防車がすることといったら決まってる。鼠に放水して追い払うんだ」

光一の言葉が終わって間もなく、機敏に動きまわる消防士がホースを構えた。

「だめじゃ」

ひかりの呻き声と同時に、白い水柱が駐車場をなめ回し始めた。地面を覆っていた鼠は、塵のように吹き飛ばされ、流されていった。

「鼠たちに罪はありませぬ。誰かあの水を止めて下され！」

ひかりがガラスドアに駆け寄った。光一の左手が激しく疼いている。

「お嬢ちゃん、動物愛護もいいけど、そんなこといつてる場合じゃないんだよ」

なだめるように細い肩に手を置いた警備員の手から、バチリと火花があがった。太い体がゆつくりと後ろに倒れていった。清水先生が支え、床にそつと横たえた。

「ひかりちゃん、落ち着くんだ」

光一は左手の窪みに指を折り込み、強めに握りしめた。

「痛い・・・」

ひかりは頭を押さえながらしゃがみ込んだ。周囲の大人たちは、何が起こったのかわからない様子で、目を見開いている。

「ごめんよ」

「・・・」

ひかりが顔を上げた。額の瞳は開いてはいない。黒い瞳がまっすぐに光一を見据えた。

「光一殿、鼠たちの悲鳴が聞こえぬか。彼らがここに来たのは、ただ餌が欲しいという純粋な理由から。なのにあのような仕打ちを！」

「仕方ないよ。この世界で優先するのは、まずは人間の安全なんだ」

「そのような勝手なことを・・・彼らは人間のもたらした情報で導かれているというに」

「ひかりちゃん、あなた、もしや、鼠たちの心が読めるの」

苦しげに話すひかりに先生が聞いた。光一は握り込んでいた左手を緩めた。

「あすこには、数十匹の首領格の鼠がおります。彼らの心には、ここまでの道のりとこの建物内の案内図、空腹を満たしてくれるものとして、信二くんの顔が、しかと刻まれております。他の鼠は、道

すがら、首領格のものの動きに付き添って集まってきた」

「でもどうして・・彼らを操っているのは人間？」

勉が首をひねった。

そうこうする間にも、目の前のガラスドアに、滝のような水が浴びせかけられた。張り付いていた鼠は、泡もろともに弾き飛ばされた。

「これ、なに」

後ろに立っていた女性が、引きつった声を出した。

振り返れば、廊下の縁を鼠たちが三列ほどになって走っていた。それこそ綱引き用の太いロープがずりずりと移動しているように見える。

「ハッ フッ」

これまでどこに行っていたのやら、清水探偵が爪を滑らせながら走り込んできた。先生の前で一旦止まり、階段のある方を【お手】の格好をして示し、そちらに走っていった。病院職員の手前、話すことができないのだ。

光一らはばかりと口を開けた人たちを置いて、清水探偵を追った。

階段付近は、先ほどの駐車場と同じ光景が広がっていた。数千匹を優に超える灰色の塊が、重なり合いながら階段を登っている。

「さっきの放水で、地下室の換気口の蓋が破れてしまったんだ。そこから鼠たちがなだれ込んでいる」

清水探偵が吠えた。

「地下には売店があるのに」

「彼らの空腹は、信二君のいるところで食物を口にしないと、満たされぬのです」

光一の疑問にひかりが答えた。

「ひー、やめて」

勉が叫んだ。

階段と勘違いしたのか、鼠の大群は、四人の足元にも集まり始めた。振り払おうすると、鋭い歯が皮ふに噛みつく。足を床に置くと、その度に、柔らかい感触を靴底に感じた。仕方なく靴底をするように後ずさった。

「おそらく鼠たちは、三階に行きついている」

跳ね上がるように大群の中突っ込んでいった清水探偵だが、たちまち鋭い歯に襲われて戻ってきた。

「信二の所に行かなければ！」

「でも、どうしたらいいの。これ以上進めないよ」

「ひかりちゃん、鼠を退治しろとはいわないわ。せめて私たちが前に進めるように、床に電気を流して」

ひかりは先生の言葉に頷いた。その足に登ろうとした鼠は、すぐにも転げ落ちたが、目の前に増え続ける群れに変化はなかった。

「帯電防止処理がされてる」

清水探偵が唸った。

「ここは病院。精密機器が置かれている。だから床は電気が流れないようになってるんだ」

「僕らがひかりちゃんの電気にも平気なら行けるのに」

勉のつぶやきに、光一ははっとした。

「僕なら大丈夫だ」

光一はひかりの手を取った。一瞬、体の筋肉が強ばったがすぐに慣れた。

「行こう」

ゆっくりと進み始めた。電流を感じているのか、鼠たちは足元を小さく開けた。

「光一君、鼠のリーダーが分かったら、これを取り付けて」

先生が五百円玉大の円形物を投げた。厚手の粘着テープが裏についている。

「発信器よ。壊れなかったらいいけど、それで鼠が帰る場所が分かるわ」

14、信二の病室

三階ロビーでは、先程と同様に看護師がソファに座り、時計を見つめていた。

あと三十分で一時。その時には、催眠が解け、足元を埋めつくす鼠の大群に気づいてしまう。もし、パニックでも起こして暴れたら、鼠たちは鋭い歯を全身に突き立てるだろう。

「急ごう」

光一とひかりは灰色の流れに沿って廊下を進んだ。

一つの病室の前で、鼠たちが小山のように盛り上がった。壁のプレートには、信二の名前が書かれている。この病室にいるのは、信二ひとりだった。

カリカリカリ・・・

ドアを噛む音が不気味に響いている。幸い、病室のドアは金属の鉄板でできているらしく、表面の白い塗装が剥けたぐらいで穴は空いてなかった。

でも、このままではいけない。信二は、それにこの階にいる患者は、病室から出ることができないのだ。

「これじゃ、信二と会うことさえできない」

「光一殿、これを入り口付近にまきましよう。さすれば、鼠たちが病室に入ることを食い止めることができます」

ひかりは病室前の洗面器の中の液体を床に流した。消毒剤の臭いが鼻につく。折り重なっていた鼠たちは、引き潮のようにドアから離れた。足元の小さな水溜まり、そこには電気が流れているので、鼠たちは近づけないのだ。

光一はそつとドアを引いたが、

「あ・・・」

血の気がなくなるほどに驚いた。鼻先に全身を包帯に巻かれた信二が立っていたのだ。

「どうしてここに？」

口を開く前に、信二が掠れ声で聞いた。目の前には、波のように盛り上がる鼠がいる。なのに驚く様子はなかった。

「おまえを助けに来たんだ。ここにいたら、鼠に噛み殺されてしま
う」

光一は信二に手を伸ばした。

電気ショックで気を失ってしまうかも知れないが、死には至らないであろう。背負って、別の場所に避難させるつもりだった。

しかし、信二は身を引いてうつむいた。

「どんなに逃げてても無駄さ。それにこれは俺が始めたこと。自業自得なんだ」

「自業自得？」

「そう・・・英才ゼミナルって知ってるだろう。俺、あそこに通っているんだ」

信二はうつむいたままだった。

「二ヶ月前に、塾は今の場所に引っ越したんだけど、俺は古い塾に忍び込んで、家捜ししたんだ」

「なんで、そんなことを」

「いい点を取るためさ。これからする試験の問題が残っていないか探したんだ。そしたら地下にパソコンが残っていた。俺はそこに通って祈ったんだ。俺の試験の点が平均点未満だったら、インターネットから侵入して、皆のデータを消して下さいって。さもなければ電力をストップしますよって。」

それが逆に作用してしまった・・・元に戻したかったけど、塾の入り

口の鍵が掛け替えられて、だめだった」

信二の話は、光一には理解しがたかった。

『何でパソコンなんだ。鼠に襲われることに、どう関係する？』

「もし今夜が無事に済んでも、試験があれば、また鼠はやってくる。もういい。勉強にもうんざりした」

信二は灰色の群れに足を踏み出した。が、水溜まりに触れた途端、身体を引きつらせて、その場に倒れた。かなりの電圧が流れたらしい。

水の縁の鼠たちは、崩れかかる大波のように膨れ上がっていた。信二の謎めいた言葉を考えている余裕はなかった。

「ひかりちゃん。僕、信二を背負うから、ずっと体に触っていてね」

光一は信二に手をかけたが、ひかりが首を振った。

「いけませぬ。これ以上の電撃は、彼には負担が過ぎます」

「でも、このままでは、どうにもならないよ」

「群れに混じっている首領格の鼠らを満足させさえすれば、問題は片付くはず」

ひかりがいった。

「ここには食べ物もお菓子もないんだよ」

光一は途方に暮れた。

ひかりが激しい稲妻を放てば、すぐにも鼠たちを退治できるだろう。しかし、ここは病院、例え、床に帯電防止処理が為されていようと、上の階や下の階の医療機器に影響し、重篤な患者を死の危険に晒してしまうかもしれない。もとより、ひかりがそのような事をするはずがないのだ。

【よくかんで食べましょう】

全く皮肉なことに、部屋の壁に、鼠が体より大きなステーキに噛み

ついているポスターが張ってあった。

【よくかむと・・・】

説明がイラストとともに書かれている。

「まてよ！」

光一の目は、小さなイラストに釘付けになった。

それは、脳の絵だった。

中央より少し前、視床下部という箇所に電気が光り、「お腹いっぱい！」とセリフがついている。よく噛めば、脳の満腹中枢が刺激され、余計なものを食べなくなり、ダイエットにも役立つことを教えていた。

「ひかりちゃん、あれだ。あの絵みたいなのに、鼠の脳に電気を流せばいいんだ。そうすれば、体を傷つけることなく、エサを食べたと思わせることができる」

光一はポスターを指さした。ひかりの顔が曇った。

「それは大変むずかしい。さらに鼠への電気刺激は微細なもの。上手いかなければ、鼠たちは信二君を、それに光一殿まで襲う」

「とにかく、その方法しかないよ」

「・・・承知しました。しばしお待ちを」

ひかりは鼠の群れをじっと見据えた。信二の顔や、ここまでの地図が心に刻まれている奇妙な鼠を選定しているのだ。

光一はその間に、信二をベッドに寝かせて毛布を被せた。ベッドの足の高さは四十センチ程ある。折り重なった鼠たちが襲いかかってくるまで、少しは時間がかせげる。

「では、いきますぞ。光一殿も、ベッドの上に」

光一がベッドに飛び乗ると同時に、廊下に立ち上がっていた灰色の波が、部屋になだれ込んできた。ひかりの姿は鼠の群れの中に消えた。

「忘れていた」

光一は、預かっていた発信器の粘着テープを剥がし、群れに飛び込んだ。
目の前に、白い手が一匹の鼠を押さえているのが見えた。その体毛に粘つく発信器を張り付けると、息も絶え絶えにベッドの上に戻った。

「ひかりちゃん・・・」

光一は、ひかりへの要求の大変さを改めて思い知った。

『いや、彼女は人間じゃない。大丈夫だ・・・』

実際、余計なことを心配している暇はなかった。予想より遙かに早く、鼠の洪水はカサを増していったのだ。

最初の一匹がベッドに飛び乗ってくるまで、ものの一分と経たなかった。光一は信二を覆った毛布を大の字になって押さえた。

体はあつという間に、生きている毛皮に包まれてしまった。俯せになった顔の周囲に、無数の息遣いが、沸騰したヤカンの湯気のごとくかかってくる。

「痛い！」

一匹が毛布を押さえる指を噛んだ。と思いきや、皮ふが剥き出した所、全て噛まれ始めた。手足はなんとか我慢できるが・・・

『耳は勘弁してくれ！』

痛みに意識が遠くなりかけた所で、急に体が軽くなった。頭を起こせば、灰色の群れは、廊下に流れ出ていくところだった。

「まさか」

光一は息を飲んだ。

ひかりが床に倒れていたのだ。ベッドから飛び降りて抱き上げた。幸い、息はしているが、顔も手も、無惨な噛み傷だらけであった。

『ああ』

光一は大きな勘違いをしていたのだ。精霊とはいえ、体をもっていれば、怪我をするし血も流すのだ。

「光一殿」

ひかりが薄く目を開けた。

「しっかり。君はやったんだ。鼠たちは引き上げていった」

「そのように優しくして下さるな」

掠れ声で発したひかりは、再び目を閉じてしまった。何処かに消失しそうちに、存在感というものが乏しくなっている。

「ひかりちゃん、死んじゃだめだ！」

光一は叫んだ。

15、過去の断片

「気持ちにはエネルギーを持つ。強い願いは、精霊さえ産み出す」
先生は言った。ならば、

『精霊である彼女に活力を与えるもの・・・どうか・・・』
静まり返った病室で、光一は硬く目を閉じた。ひかりを救う不思議なエネルギーが集結することを願った。

・・・三日月谷の姫よ・・・
唐突に声が聞こえた。

・・・黄金玉の納所、青蛇せうじやの剣、我、この手に携えた・・・
声と共に唇が小さく震えた。そう、声の出所は光一の口だった。
目を開けると、ひかりを抱きかかえた腕が、青白い光を帯びていた。

視界の隅に、白い着物に身を包んだ女性の姿が映った。遠くにいるのか、かなり小さい。映像はひどく揺れている。女性の周囲は稲光が激しく光り、土砂降りの雨が降っている。

・・・そなたの祈りは天に通じ、恵みの雨をもたらし。さあ、もうよい。雷に魂を重ねてしまふ前に、剣に玉を納めるのだ・・・
心の奥で誰かが叫んでいた。同時に光一の口は細かく動き、その叫びを囁き声で漏らしていた。

『これは僕が作り出したものじゃない・・・誰かの記憶・・・』
光一は悟った気がした。彼は、自分に宿っている何者かが体験した映像を見つめているのだ。

遠くに見えていた女性が近づいてきた。

人形のような白い肌と整った顔立ち。ひかりだ。荒れ狂う川に突き出した岩に、一人立って横笛を吹いている。彼女の前にある小さな台座には、フラッシュライトのように輝く玉が置かれている。

・・あと僅かで行き着く、姫よ、時を持ち堪えよ。あつ！・・

目の前に眩い光の柱が立った。と思いきや、急に幕が降ろされたようにひかりの姿が消えた。同時に、左手に激しい痛みを感じた。青白い光が、抱きかかえた細い体に移ったように見えた。光一と一緒にいた誰かは、既に気配を消していた。

「・・・」

ひかりの上体に力が入った。額の切れ目がわずかに開き、中から光が漏れている。

「この場で力を使うことは、多大な霊力を消耗いたします。おそらくは、我が力の流れを遮断する床のせい。それにしても私は、光一殿によって力を取り戻した。一体、いかなる方法にて」

ひかりに力を与えたのは光一ではない。彼に宿った誰かが、体を介して、ひかりに力を流し込んだのだ。

そしてやはり、ひかりは元々は人間であった。しかし、雨乞いの祈りの果てに、雷と魂を重ねてしまったのだ。誰かがもう少し早く玉を納める剣を届けられれば、ひかりは精霊にはならなかったのだ。彼女の前に置かれていた眩しく輝く玉、おそらくそれは今、彼女の額にはまつている雷光の瞳に違いない。

「ひかりちゃん、いや・・・」

光一は言葉を切り、首を振った。今見た映像を話せば、以前の放課後以上に、ひかりは混乱してしまっただろう。

『いつか、落ち着いたときに話そう。彼女は元は人間で、そのことをよく知っている人のエネルギー体のようなものが、この世に残っていた。あるいは今も何処かにあるかも知れないということを・・・』

「どつなされた光一殿」

「いや、本当に良かった」

支えていた柔らかく華奢な体から、光一はそつと手を離した。

16、旧塾へ

「二人とも無事か？」

しゃがれ声が飛び込んだ。

「まあ、傷だらけ」

「あれ、おかしいや。食べ物欠片もない」

清水探偵と先生、勉がやってきた。

「鼠たちはどうなった？」

光一の問いに、勉が鼻の穴を膨らませた。

「すごかったよ、まるでダムが決壊したみたいだった。一階の非常口からどつと出ていった。けど、どうやって追いついたの？」

「つまり・・・」

光一は壁のポスターを指さして説明した。

「鼠の脳を刺激するなんて、ちょっと思い付かないよ。それを実行したひかりちゃんもすごいや」

勉はもちろん、先生たちも感心したように唸った。ひかりは照れたように下を向いた。開けっ広げな誉め言葉など、体験したことがなかったのかもしれない。

「二人ともこのままではいけないわ。傷口を消毒しなくては、消毒薬はこの部屋にもあるけど、薬も飲んでおいた方がいいわね」

先生がジーンズのポケットに手を突っ込んだ。出てきたのは数種類の錠剤の入ったピルケースだが、

「私に薬は不必要。光一殿も望まれるならば」

そう言っ、ひかりは光一に手を差し出した。彼女の言いたいことは分かった。はたして電撃が、消毒の役を果たすのかは疑問だった

が、光一は白い手を握った。
ズクン！

全身をハンマーで打ち据えられたようだった。

「い・ま・の・は、き・い・た」

ふらつきながら光一が、血で濡れているはずの耳の付け根を触れてみると、既にそこには瘡蓋かさぶたができていた。ひかりの肌に見えていた無数の傷は、跡形もなく消えていた。

「さてと、わしらはこれからも仕事がある。坊や達はどうするかね
清水探偵が聞いた。

「こんな所でやめるわけにはいけません」

光一と勉が同時に言った。先生は苦笑いしている。

「二人とも、明日というか、今日も学校はあるのよ。大丈夫かしら」

「そつちこそ平気なの？ 僕らは授業中に居眠りできても、先生はそうはいかないんだよ」

にやりと笑った光一の足を、清水探偵の尾がくすぐった。

「はは、そんな心配をするぐらいなら大丈夫だ。さあ、行こう」

一行は静かに寝息をたてている信二をあとに病室を出た。

ロビーでは看護師が、ソファから立ち上がったところだった。壁の時計は一時を指している。先生のかけた催眠が解けたのだ。

「あなたたち、こんな遅くまで起きていたの。まあ、犬が」

黒い影にぎよつと目を見張った看護師に、清水探偵はオチンをして手を振った。

一階の廊下では、十人以上の職員や消防士らとすれ違った。皆、引き潮のように消えた鼠の大群に首を傾げていた。

駐車場では、あちこちに水溜まりが残っていた。車のタイヤ止めの周囲には、小さな塊がたくさん転がっている。激しい放水に打たれ、死んでしまった鼠たちだった。

光一の左手が小さく疼いた。隣を歩くひかりの気持ちだ。表情こそ変えていないが、奪われた小さな命に心を痛めているのだ。

「さあ、乗って」

先生に続いて、光一らは車に乗り込んだ。清水探偵が鼻先でハンドル横のスイッチを押した。カーナビ、いや、潜水艦のレーダーのような緑色の画面が明るく点灯した。

「坊や、発信器の装着はうまくいったみたいだぞ」

画面の端に小さな赤い点が点滅している。止まって見えるが、わずかに動いている。

「じゃあ、いくわね」

軽く言った先生がアクセルを踏み込んだ。前をのぞいていた光一らは後部シートに転がった。

「ひかりちゃん、さつき、リーダー格の鼠たちの心が読めるといったけど、彼らを操っている精霊は見えなかったのかい？」

光一は黙り込んでいるひかりに聞いた。

「いいえ残念ながら・・・しかし」

引っかかりから解放されたように、黒い瞳がしっかりと向けられた。「・・・奇妙なものを目にいたしました。それは、二つの信二君の映像。一つは写真のように動きのない顔。もう一つは暗がりで動く全身像。彼は鼠に食物を与え、空腹の鼠は、食物の味の染み込んだ包み紙にまで嚙り付いておりました。その紙には、星印のグラフと数字が並んで印刷されておりました」

「それだ。それがこの事件の原因なんだ」

光一は閃いたような気がした。

「坊や、説明してごらん」

清水探偵が助手席から顔をのぞかせた。

「信二は、塾が転居した後に残っていたパソコンに願い事をしてい

たんだ。

それを成就させるために、何故だか分からないけど、そこにいた鼠たちに餌を与えていた。ひかりちゃんが見た包み紙というのは、食物の味を染み込ませた自分の試験の悪い結果だと思う。ああいうのって、親には見せたくないし、捨て場所にも困るし・・・」

光一は病室で信二から聞いたことも含めて説明した。

「僕も一つ思い付いたよ、パソコンと鼠の関係は分からないけど・・・」

勉が口を挟んだ。

「・・・ひかりちゃんが見た動きのない信二君の顔というのは、塾のパソコンに入力されている個人データじゃないかな。誰かが、試験の点が平均未満だった信二君の写真や個人情報を、鼠に見せて、食物がもらえると吹き込んでいたんだよ」

「そうね。それにパソコンがネットで繋がっていれば、信二君の入院した病院の地図までわかるかも知れないわね」

勉の言葉にうなずきながら、清水先生はハンドルを切った。

車は町の中央に向かっていった。レーダー画面の赤い点滅も、中央に移動していった。これから向かう所は、以前、英才ゼミナールがあった所に違いない。

「でも、僕たちは精霊の問題を解決しようとしているんでしょ。パソコンを使うなんて、人間の仕業なのではないの」

「光一君、普通の人間が、地図データを見せて鼠を操作できるかしら。もし可能なら、各国の軍事産業が挙って採用したがるほどの高度な技術を使っていることになるわ」

「坊や、わしの鼻は、そこいらへんに精霊の臭いをぶんぶん嗅ぎつけておるよ。しかしはて、パソコンと鼠の餌づけとの関係は、どのようなものになっているのか」

清水探偵が喉を鳴らした。想像を巡らせるのを楽しんでいるようだ。

しばらく車中は沈黙のまま、車は町を走っていった。ネオンがチカつく飲み屋街を抜け、人気のないビルの谷間に入っていた時、リーダーが高いブザー音を鳴らし始めた。赤い点滅が画面の中央にきた。

「到着したわ」

車を降りた一同があたりを見回すと、数匹の鼠が格子の降りたビルの中に走り込んでいくのが見えた。

「このビルね」

先生が懐中電灯で照らし出すと、コンクリート壁にペンキの剥げがあった文字があった。

・英・ゼミ・ール・

「まったく、わしとしたことが肝心な事を見逃していた。今の英才ゼミナールの真新しい建物を見て気付くべきだった」

清水探偵が前足で自分の頬をパンチする間に、先生は髪からヘアピンを抜き、格子の鍵穴に差し込んだ。

「まだ新しく、かなり頑丈よ。ビルの管理者が付け替えたんだわ。でも無理に開けようとした傷が・・・」

指先の感覚に集中しながらも、先生の横顔は悲しそうに歪んでいた。「信二君の千切れた心の気配が、今もここに残っている」

ひかりのつぶやきに、光一は息が詰まった。目の前に、息を荒立てながら、必死に鍵を開けようとしている信二の太い影が見えたような気がした。

カチリ・・・微かな音

先生が立ち上がりながら格子を押し上げた。金属のかち合う鈍い音が、立ち並ぶビルの壁に大きく反響した。

17、捨てられた物

光一らは先生のかざす懐中電灯の光を頼りに前に進んだ。

さすが元は塾だったらしく、小さく仕切られた部屋が幾つもあった。鼠たちは建物の奥にある出発地に帰り着いたのだらう、姿は見えない。念のために、手近な所からドアを開け、中の様子を確かめていった。未だに机やイスが残されている。整然と並んでいるのが、かえって不気味だった。

電気の消えたエレベーターの横に、五階建てのビルの配置図がかけられていた。塾が使っていたのは、地下と一階から三階までで、その上は、聞いたこともない会社の名前が書かれていた。

「進みましょう」

懐中電灯の光が非常階段の下り口に向けられた。

「うう」

階段を降りていく途中、壁際を進む光一の顔に、蜘蛛の巣がべたりと張り付いた。まるで巨大蜘蛛の巣に誘き寄せられているようである。勉は、酸気の強い息を吐きながら、後にぴたりと付いている。階段の隅は、五センチほどの幅のスロープが刻まれていて、なるほどこれなら鼠も自由に行き来できるはずだった。

一同は突き当たりの部屋の前で立ち止まった。半開きになったドアの向こうから、カタカタという軽い音が聞こえてくる。

「中にいます」

ひかりがうなずいた。

「さあ、精霊との対面だ」

清水探偵がいい、先生がおもむろにドアを引いた。光一は幽霊でも飛び出してくるかとはかりに身構えた。

そこは十畳ほどの広さの部屋だった。入ってすぐ横に事務机があり、電話機やら印刷機が積み重ねられていた。塾が移転した時に、そのまま置いておかれたものに違いない。

皆の目を引いたのは、床にぼうつと浮かび上がる光だった。

覆いのとれた鼠の飼育カゴが五つ、光を囲んでいる。そして鼠だ。外から聞こえたカタカタという音は、カゴの中の車輪に鼠が入って回転させているからだだった。辺りをうごめく数十匹の内の一匹の横腹に、光一がつけた発信器が見えた。

「用心して」

部屋の隅々を懐中電灯で照らしながら、先生が声をひそめていった。光一と勉は光っている物の前に、そっと回りこんだ。

「これ、パソコンだ。しかも」

「あ、信二、それに」

パソコンのモニターには、数知れぬ生徒達の顔写真が映し出され、スロットマシンのように回転していた。信二の他に、多くの見知った顔が見えた。

「そこに映っているのは、塾に通っている生徒たちね」

「うん。ちょっと待って下さい」

先生の声にならずいた勉が、ハンカチを取り出して軽くはいた。

埃やらが舞い上がり、下にキーボードが出てきた。勉はそのまま横に手を伸ばし、マウスをクリックした。

たちまちに、写真の回転が緩やかになり、ぴたりと止まった。

モニターの半分には信二の顔が、もう半分には、信二の家への地図が映し出された。が、急に砂時計のマークが現れ、病院の写真と地図、先程訪れた病室の番号と入れ替わった。

「鼠の心に見た、動かない信二君の顔や、地図と同じ」

ひかりがつぶやいた。

「勉、何した」

「画面の端に、【表示履歴】という項目があるでしょう。そのの最新】をクリックしたんだ。見てみて」

勉がさも簡単なようにいい、信二の写真の上を指さした。

【11月27日、試験結果、生徒番号0215 欠席にて評価点は0点】

「これ、塾の今夜の試験結果だよ」

勉の予想は的中した。このモニターを見せられ、鼠たちは病院にやってきたのだ。

「・・・」

ふと気づくと、カタカタという音が止んでいた。鼠たちはじっと画面を見つめている。

「だめだ、元に戻すんだ」

光一は画面の右上の×印に、マウスの矢印を移動させた。そこをクリックすれば、今の画面が消えることを知っていた。パソコンの授業で、内緒でゲームをやっていた時に覚えたことだ。

再びモニターは、無数の顔が回転するようになり、鼠たちは何も見なかったように動き始めた。

「こいつは発電器だ」

鼠の回す車輪をのぞいていた清水探偵が唸った。

なるほどよく見れば、車軸の延長にはモーターのようなものがあり、電線がパソコンの方に伸びていた。

「その発電器、ペットシヨップで見たことがある。そんな利用法があっただね」

勉が感心したように息を漏らした。

【願いが、逆に作用してしまった】光一の耳の奥で、信二が話したことが蘇った。

【平均点未満だったら、インターネットから侵入して、データを消して。さもなければ電力をストップする】

彼は発電器を回す鼠に餌をあげながら、パソコンに祈っていた。そしてそれが裏目に出てしまったのだ。

光一の体に身震いが走った。

人を呪えば、呪いは己に返るといわれてるが、それと同じだった。小さな被害はともかく、大怪我をしたのは、結局、信二自身だったのである。

「でも、すごいよ、塾の最新の試験結果や、信二君の入院している病室まで分かっちゃってしまうなんて、プロ級のハッカーじゃないとできないことだよ」

「ハッカー？」

光一は首をひねった。

「うん、インターネットの回線から侵入して、他のコンピュータの情報盗んだり、データを変更してしまう人のことだよ。でもいったい誰が？やっぱり精霊？」

勉は部屋の暗がりを目を凝らした。

「まったく信二君とやらは趣味が悪いの。パソコンを脅迫して願かけするなんぞ。そりゃ、精霊が宿ったとしても不思議はない」

清水探偵がぼやくようにいった。

「じゃあ、精霊はそのパソコンに宿っているってこと。それがハッカーで、鼠に命令していたってこと？」

光一の言葉に、ひかりがこっくり頷いた。同時に誰も触れていないキーボードがカツカツと音を立て始めた。

「ひーっ」
勉が声にならない悲鳴をあげた。光一の全身にゾワリと鳥肌が立った。

画面が変わったモニターには、一同を睨むように二つの目玉が映っていたのだ。

「精霊よ、わしらはあなたを救いに来た」

清水探偵が横から話しかけた。

目玉がギョロリと動き、再びキーボードがカツカツと音をたてた。

「あなたがたは、すべて人間か？【はい・いいえ】・・・
画面の下に小さな文字が現れた。

「精霊が反応した。とりあえず答えてみよう」

清水探偵が、毛に覆われた指先でマウスを移動させ、【はい】をクリックした。

「・・・一名は人間の姿をしていない。それでも人間といえるか？【はい・いいえ】・・・
清水探偵は再び【はい】をクリックした。

「・・・入力完了、しばらくお待ち下さい・・・
再び文字が現れ、砂時計のマークと入れ替わった。

「何かおかしい。なぜ人間にこんなにこだわるの」
先生がつぶやいたその時だった。パソコンのスピーカーから不思議な音が聞こえ始めた。

浜辺に打ち寄せる波音と子守歌のようなオルゴール音・・・
『何だろっ。この場違いな安らぎの気持ちは』

光一は、緊張で鋭く尖っていた自分の感情が、柔らかい膜で覆われていくように感じた。

「気を引き締めて」

先生が注意したが、表現とは矛盾したまどろんだような声であった。手に握られた懐中電灯は空中を照らしている。

いつの間にか、ぬるめいた黒い影がモニターの上部から流れ出ていた。先端が五つに分かれている。ぼやけてはいるが、一つは獣の頭の形、あとの四つは人の頭のように見える。電灯の光の中で、陽炎のように揺れている。

「精霊よ、あなたはこのパソコンに宿っているのか？」

清水探偵が首を伸ばしながらたずねた。

光一は不思議に思った。

『なぜ清水探偵はそんなことを聞くのか。どうでもいいことではないか。でも、ならばなぜ、自分はここに？もういい、余計なことは考えまい』

・・・そのとおり、ワタシはここにいる・・・

清水探偵の問いに影が答えた。唸り弓のように低く震える低い声だった。

「我らはあなたを苦しみから解放するため、ここにやってきた。できることがあるなら教えてほしい」

・・・ワタシの苦しみ。それは不安定な電力の供給と、データの流入が止まることへの怖れ。オマエたちにできること、それは電力の供給を完全なものとし、データをより入りやすくすること・・・

「電力の問題なんて、すぐに解決しちゃうよ。鼠の発電なんかに任

せないで、電源をコンセントに差し込めば済んじゃうよ。その前にブレーカを上げないといけないかも知れないけど」

勉がいった。心地よい音楽に酔ったように軽い口調だった。

・電力の供給回路を変えるわけにはいかない。その小さき者たちがいるから、データの供給者は減ることがない。ワタシの存在する理由が確保される・

「つまり、生徒たちは鼠に襲われるのが怖くて、塾を辞めることができない。だから、データの提供者が減ることはないというわけだ。一応うまくいつているようだが、あなたは苦しんでいる。ということとは、まずいことがあるということだが」

黒い影に、清水探偵が冷静に話しかけた。

・そのとおり。新しく導入された仲間たちは、ワタシのアクセスを不正なものに見なしている。アクセスするほどに、ネットの扉の鍵を強固なものにし、その度に新たな鍵を作っている。ワタシがいるからデータの減少が防げているというのに。彼らはそんなワタシを排除しようとしている・

勉がモニターを指さした。

「つまり、君はもう時代遅れということ。そんなことにも気付かずに、働いているんだ。でもまずはお掃除しなくてはね。体が壊れても知らないよ」

へらへらと話す勉に、光一もおかしくなり、「ハハハ」と笑ってしまった。

・人間よ、オマエの話していることは、ワタシには理解できない。機械面の清掃も拒否する。だが、先の申し出には応じよう。オマエたちのできることを果たしてくれ・

黒い影の一部が急に伸びて清水探偵と重なった。次に、勉と先生に抱きつくように重なった。

「このままでは精霊の為すがまま。光一殿、逃げるのです」

訳が分からなかったが、光一はひかりの馬鹿力に引きずられて廊下に出た。階段の登り口で振り返った時、足元からずり上がってくる細い影が見えた。

「ならぬ。ご辛抱を！」

ひかりの声と共に、目前に火花の柱が立った。光一の心は暗闇に吸い込まれていった。

18、現在の塾へ

肩が異常に張っていた。

体がきつく締め付けられ、耳元を風がヒョウヒョウと鳴っている。

恐ろしく寒い。

「あうー」

肝を潰すというのは、このことだった。

目を開いた光一の足下には地面がなかった。町の明かりが、遙か数百メートル下に流れていた。

「お目覚めか」

カラカラと掠れた声が降ってきた。

頭をねじ上げると、白い毛に覆われた恐ろしい鳥の頸があった。その鋭い鉤爪が肩にめり込んでいる。

光一は、巨大なハヤブサに変化した^{へんげ}ひかりに掴まれて、空を飛んでいたのだ。

体が窮屈なのは、ジャンパーの上にひかりのコートとジーパンが巻きつけられていたからだ。人間の姿に戻った時に裸ではまずいので、このように運んでいるのだろう。

「でも、なんで・・・」

上空の夜気の冷たさに喘ぎながら光一は聞いた。

「皆は、人の警戒を麻痺させる、声ならぬ声に惑わされてしまったのです。それを聞き分けできたのは、私と犬の聴覚を持つ清水探偵だけ。しかし、清水探偵も精霊の伸ばした影に囚われました。

精霊の操り人となった先生たちは、屋上に逃れた我らを追ってきましたが、さすがに私には近寄れず、戻っていきました。が、ほどなく動きがあったのです。見失ってはならじと、今はこのように」

「へっ？」

光一は地上に目を凝らした。

斜め前方に、ヘッドライトの明かりを伸ばす一台の車があった。ちよつどビルの建て込んだ町の中心部を抜け、国道に出るところだ。

「あれなるが先生の車。精霊も一緒です」

『精霊は塾のパソコンとして認めてほしいと望んでいた。行き先はきつと英才ゼミナール・・・』

「どうなされる。付いていくか、先に参るか」

まるで光一の心を読んだようにひかりが聞いた。

「先に」

「承知」

返事と共に白い翼が鋭く打ち下ろされた。光一の体は強烈な風圧に斜めに傾いた。

これまで幾度となく大空に舞い上がって、存分に風を浴びたいと思つていた光一だったが、実際はとんでもなかった。冷風が、実体を持つた矢のように目や喉奥に突き刺さり、目を開けているどころか、呼吸さえまともにできない。おまけに掴まれた肩が痛みを超え、重く痺れ始めている。

『神様、もう空を飛びたいなんて思いません。だから、どうか早く地上に・・・』

気を失いそうになりながら、必死に祈った。

五分とはかからなかったに違いない。光一が意識を保っている間に、足が地面を捉えた。街路樹の植え込みの向こうに派手な黄色の建物の明かりが見えている。

「失礼をば」

ひかりが鼻水やら涙でむせ返してる光一をぐるりと回して服を解いた。

「これからどうなさる？」

少しして後ろから肩を叩かれた光一は、はたと困った。

ここに到着したら、精霊は何をするつもりだろうか。塾のパソコンの仲間入りをし、様々なデータを入れてもらい、そして自分の存在意義に固執することもなくなつて・・

「ひかりちゃんはどう思う。あの精霊は悩み事が解決したら、満足して鼠事件など起こさなくなると思う?」

「おかしなことを聞かれる。私にあの者の気持ちは分かりませぬ。ただ一つ言えるのは、あの者は純朴なる無邪気さこそあれ、邪悪さはもってはいないということ」

「じゃあ、特に考えることはないね。先に乗り込んで、先生たちを迎える準備をしとこう」

「準備とは?」

「行つてから考えよう」

光一は肩のストレッチをしながら、塾の正面玄関に向かった。

半透明のガラスドアを押し開けると、小体育館並のワンフロアが広がっていた。

カウンターで仕切られた向こう側では、数人の大人が椅子に腰掛けて仕事をしている。

「君たち、中学部?どうしたのこんな時間に?」

湯気の立つコーヒーカップを片手に、二十代ぐらいの若い男が近づいてきた。別に怪しんでいる様子はない。

「はい、質問がありました」

普段滅多に使わない丁寧語で光一は答えた。

「それは熱心だね。ちょっと待ってよ」

男は仰け反りながら、カウンターの向こうをのぞいた。

「あいにく、中学部の先生は帰ってしまったよ。今、残ってるのは、僕ら高等部担当の職員だけなんだ」

「いや、こちらの先生なら、どなたでもいいんです。パソコンのことを聞きたくて」

残念そうに首を振った男の目が開いた。

幸運にも、相談相手にぴったりの人物だったらしい。光一らを待合いの椅子に座らせて、自分も座った。ひかりは可愛らしく男を見つめている。男がご機嫌に対応してくれているのは、彼女も一役買っているのに違いない。

「パソコンのことって・・・いったい、どんなことだい？」

事はうまく運んでいる。皆が到着するまでは、あと五分ぐらいか。それまでどう進めたらよいものか。出たとこ勝負のいけるところまで・・・光一は自分の性格に賭けてみることにした

「古いパソコンの使用法なのですが、新しく導入したものと平行して使えないかと思ひまして」

「はああ」

男はコーヒーをすすりながら表情を綻ばせた。

「よくあることだね。家の人が新しいパソコンを買って、古いのが残ってしまった。でも放っておくのももったいなくて・・・ってことだよ」

「ええ、それとよく似たことです。それで、ここが大切なポイントなのですが、実はそのパソコンはこの塾で使われていたのです」

「えっ！」

男は慌てたように急に立ち上がった。

「ちょ、ちょっと君たち、ここで待っててよ。うーん、なに、いい手が見つかるかも知れない」

そう言い残し、カウンターの向こうに走って行った。別室から出てきた太り気味の中年男と話をしている。

「このパソコンだったなんて。まずいこと言ったかな」

「そう。しかし、事実を伝えたまでのこと」

顔を向けた光一に、ひかりは冷静な笑いを返した。

中年男は、あちこちの人に何やら耳打ちし、二人の前にやってきた。一瞬、二人が手ぶらであることを訝しむような視線を浮かべたが、

すぐに社会的な明るい表情に切り替わった。

「今、聞いたんだが、この塾の古いパソコンを持っているんだってね。ここではじっくり話が聞けない。さあさ、こちらへ」

二人はカウンターの奥の部屋に通された。

19、ひとまずの解決？

「・・・」

光一は思わず目を見開いた。案内された部屋は壁一面が赤色に塗られていたのだ。

重厚な漆黒の応接セットと長机の奥には、煌びやかな金色の祭壇がある。まるで怪しげな宗教団体の本部のようである。どこかしらから甘い香の臭いが漂ってくる。

「ははは、この部屋に入った人は、皆、君みたいに驚くんだ。何せ、わしは信仰心が厚くてね。ささ、座りたまえ」

「はい」

言われるまま、光一とひかりはソファーに腰掛けた。しなやかな革張りのソファーは、これまで経験したことがないほどの柔らかい弾力があつた。向かいの壁に掛けられた写真をよく見れば、目の前の髪をオールバックにした男と同じだった。

「もしかして、こちらの塾長さんですか」

光一は聞いた。

「そう、総本という。そんなことを聞くということは、君らは、この生徒ではないのかね」

「はい、えー僕の名前は、」

途中まで言いかけたところで、隣からバチツと電気が飛んできた。ひかりが警告を発してくれたのだ。確かに名前まで名乗る必要はない。光一は咳払いをしてごまかした。

「さてと、わしが思うに、君たちには仲間がいるのではないかね、それも大人の」

「はい、もうすぐこちらに到着すると思います」

「そりゃ、そうだろうて、子供だけで話せる内容ではないだろうに」
塾長は察しがよかった。真夜中に飛び込んできて、ほんの触りの部分を話したただけだというのに・・・。

と、ドアがノックされ、先ほどの若い男が顔を出した。

「塾長、例のパソコンを持った女性と子どもが現れました。それに犬も」

「皆さんをこちらにお連れしなさい。もちろん、ボディガード役の犬もな」

塾長は光一に目配せしながら言った。

ドアが開いて、すぐに入ってきたのは、汚れたパソコンを抱えた勉強だった。鼠の発電装置は付いていない。ついで清水探偵と先生が入ってきた。各々、光一には目も向けず、部屋のあちこちを探してゐる。

「内蔵バッテリーの、蓄電量が、ほとんどありません。コンセントは、どこに、ありますか」

ロボットのようなぶつ切りの言葉で尋ねた勉強に、塾長が立ち上がって奥の机を指さした。

「そちらを使いなさい」

いつになく素早い動きで、勉強は部屋を移動した。プラグを机上のコンセントに差し込んだ時、黒い影が、勉強の体から抜け、パソコンの中に戻った。塾長は幻でも見たかのように目を細めた。

「あ、光一君、ひかりちゃん、ぼくら、どうしてここに」

勉強がきよんとした表情を浮かべた。先生は冷静な目で部屋を見回している。清水探偵は躡のよい犬のように背筋を伸ばして座った。

「光一君、先回りしてお膳立てしてくれたのね」

先生が軽くウインクした。状況を察したらしい。

「ええ、お見通しのとおりです」

隣で、ひかりのクスツと吹き出す声があった。

「なるほど、あなたが一連の出来事のリーダーというわけですね。それにしてもお美しい」

塾長は先生に頭を下げた。

「この人、何者？ 僕らはですね、痛た・・・」

話し始めた勉の顔が、苦しそうに歪んだ。光一にしたのと同様に、ひかりが警告を発したのだ。そう、ここは相手の出方を待った方がよいのだ。

「ここはリーダーに任せて、僕らは黙っていよう」

光一の指示に、勉は抗議をするように大きく首を振りながらソファに座った。

先生は落ち着いた様子で、乱れた髪をかきあげて座った。そして壁に掛けられている写真を一瞥してから話した。

「塾長さん、あなたは私たちのことを知っていたようなご様子ですが、一体どのようなにして？ よろしかったら、お話し願えませんか」
『そう、その調子』

光一は塾長に気付かれないように、先生にウインクを飛ばした。

塾長は姿勢を正して、じつと先生を見つめた。

「わしらは塾のデータへの謎のアクセスに、さいさん悩まされました。どんなにガードを堅くしても侵入されてしまう。それに何故か、以前うちで購入したパソコンの登録ナンバーを通信記録に残していく。」

一体誰が、何のためにと、首を捻るばかりでしたが、とうとう、今夜、あなたたちがこうして現れた。さて、あなたたちは何を要求するのでしょう。それにより、謎のアクセスの目的も分かるというも

のですが」

先生は静かに笑った。

「塾長さんをお願いごとをする前に、もう一つ、お答え下さい。なぜ、あなたはこのように丁寧にお迎えして下さるのですか。すぐに警察を呼ばれてもおかしくないはずなのに」

「それは単純なことです。生徒たちのデータが外に漏れたとすれば、塾の信用に関わる。だから、事を大袈裟にしたくないのです」
塾長はまた丁寧な頭を下げた。脂ぎった額には汗が浮いていた。

どうやら、光一は誤解していたようだった。目の前にいる塾長は、どこか腹黒いようで、何か企み事をしているように思っていたのだが、実際、パソコン精霊には困っていたのだ。

それにしても普通に考えれば、光一らの立場は悪者である。ハツカ一行為をしていた者に、何故これほどに寛大でおれるのか。光一の胸中の引っかかりは総てなくなったわけではなかった。

ソファアの端に座る勉はようやく事態が飲み込めたらしく、「なるほど」と呟きながら清水探偵の頭を撫でた。

「おっしゃること、よく分かりました」先生の言葉が淀みなく流れた。

「・・・では、お願いさせていただきます。あのパソコンを、貴塾で現在使用中のパソコンと連動させて使って頂きたいのです」
塾長の片側の眉が跳ね上がった。

「それがあなたたちの要求ですか。他には？」

「他には何もありません。どうですか、やって頂けますか」

「可能ならば引き受けますが。少し、よろしいか。いや、あまりにも汚れているのでね」

塾長は机に歩みより、パソコンのモニターを開けた。

いったい何が映し出されるのであろう、怪しげな黒い影は出てこないのか、一同も席を立ててモニターを見つめた。

カタカタカタ・・・

まだ触れてもいないのに、キーボードが動き、画面の中央に、一行の文字が浮かんだ。背景には、塾の地下室で見た光景が映し出されている。

・・・ワタシの苦しみは解消されるのか？【はい・いいえ】・・・

「何か仕掛けが・・・やつ、これは以前の塾の地下室。それにこの鼠が動かす車輪は・・・」

口をあめぐりと開け、食い入るようにモニターを見つめている塾長の横で、腕を伸ばした先生がマウスの矢印を【はい】に移動して、クリックした。

・・・人間よ、協力ありがとう。ワタシはあるべきところにたどりついた・・・

「パソコンが応えた。いったいこれは、どうなっているんだ」
再び現れた文字を指で追いながら、塾長は震えだした。

「塾長さん、そのパソコンには、精霊なるものが宿っています。大切に扱えば、きっと良いように働いてくれると思います。改めてお聞きします。こちらで他のパソコンと一緒に使っていただけですか」「ええ、はい。この部屋を見ていただければ、おわかりの通りです。わしは信心深い者なのです。しかし、あなたたちは何者のですか。てつきり、手に入れた塾のデータをもとに、金を脅し取りにきた悪者だと思っておりますが」

塾長は額の汗を拭きながら聞いた。

「私たちは、精霊のために働く者です」

「そう、僕らは精霊密使」

先生に続き、光一と勉が口を揃えていった。

清水探偵はへたくそな犬の声で吠えた。ひかりはなぜか、金色の祭壇をじっと見つめていた。

・
・
・
・

車のエンジンの振動が心地よかった。

光一の肩は未だにひりひりと痛んでいたが、車内の温かさも手伝い、急に眠気が襲ってきた。青白く光る時計は、午前四時を過ぎたところだ。すぐに帰宅したとしても、あと三時間も眠れない。

「でも、本当に事件は解決したのかな。どう思う？」

勉がとろんと閉じかけた目をひかりに向けた。

「それは分かりませぬ。一つ気掛かりなのはあの祭壇。あそこには最初、うつすらと黒い渦が見えていた。それがいつしか消えていた」

「もうあれこれ考えるのはよそうよ。どうせ、先生の家ของ 蔦の葉を見れば分かることだし」

光一は面倒臭くなって、少し邪険に言った。

「みんな、本当にお疲れ様。はい、これどうぞ」

信号待ちをしている間に、先生が片手を差し出した。手には小さなカプセルが数粒乗っている。

「それは最高の栄養剤だ。ぜひ飲んでみるといい」

助手席の清水探偵が首を伸ばして、ペロりと一粒飲みこんだ。

「私には不必要。ただ効き目はあると存じます」

ひかりの勧めもあり、光一と勉も口の中に放り込んだ。カプセルは

すぐに溶け、粘り気のある液体が口に広がった。少し甘いようだが、生臭い感じもする。ほどよい温もりが体全体に拡がり、光一の肩の痛みは消えてしまった。

「これ、すごいや。眠たさがどこかにいつちゃった」
勉がはしゃぎだした。

「そうだろう。なんたって大地のエネルギーのエキスだから。グ
フッ」

清水探偵が牙を剥き出して笑った。光一は嫌な予感がした。

「大地のエネルギーって、もしかや、ナメクジお化けの地底霊のこと」
「ピンポン！それは地底霊の皮をちよっとだけ貰ったものよ。すごいでしょう、採取してから一年以上も経っているのに、まだねばねばしてるのよ」

先生が片腕を高くつき出した。声が浮いている。

光一はぬるめいた感触を思い出して、ぞっとした。

「ちくしょう！そうと知っていたら、飲まなかったのに。それにこんなに効くのも悔しい！」

「そうだそうだ」

光一の叫びに、勉が体を大きく震わせて同調した。

その後、病院まで送ってもらった光一と勉は、冷たい風もなんのその、颯爽と自転車に跨り 家路についた。

「蔦の葉の変化を見たいだろう。学校が終わったら遊びにおいで」
清水探偵のしゃがれ声が、光一の耳の奥に愉快に響いていた。

20、精霊の暴走

結局、光一が帰宅したのは五時手前、既にポストには朝刊が差し込んであった。一睡もしていなかったが、心身ともに冴えわたり、ベッドに横になることもなく朝日を迎えた。両親は、まさか夜中に外出したなど思いもよらず、早起きしたと勘違いしていた。それで、いつもより早めに家を出たのだが、さすがにこの日ばかりは、清水探偵に会うことはなかった。

学校に着いてからも、眠気が襲ってくることはなく、ますます調子は良くなっていった。

なにしろ苦手な数学の問題も要点が良くわかって解けていくし、音楽ではタップを踏みながらリコーダを吹き上げた。勉も同様だったらしく、ビシリと手を挙げては、恐ろしく鋭い質問と答えを次々と発していた。

クラスの皆の目を引いたのは、体育の時間だった。ドッチボールで生き残った光一と勉の、唸りをあげるボールの投げ合いは十分以上も続いたのだ。

午後の授業が終わる頃には、いつもの二人に戻ってきた。

「大地のエネルギーは、人間を超人に変えることができるわ。でも、飲むのは特別な時だけ。でなければ、元々の体のエネルギーも使い果たして、干涸らびてしまうから」

昼休みに先生がこっそりと教えてくれた。

「総本塾長つて、どんなひと？」

帰りの挨拶の後、教室がガヤついている時、光一は何気なく聞いてみた。そう、英才ゼミナールに通っている生徒にである。

「教科を担当している先生たちは、すごくいいんだ。でも、あのおじさんだけは勘弁してほしいな」

「へえ、なんで？」

「あの人の頭の中は、金儲けで一杯なんだ。いつも生徒集めのことばかり考えている。それに新しい建物に引っ越してからは、変なことを言いだしたんだ。生徒たちの成績アップの祈りが、天に通じたなんて」

光一は胸ぐらを掴まれた気がした。

「それってほら、成績が悪かったら、鼠が襲ってくることと関係してるの」

「なんで、光一がそんなこと知ってる？あつ、他の人に話したら呪いがかかる」

その生徒は青い顔をして、そそくさと帰っていった。

近くにいた勉が顔をしかめて寄ってきた。

「変なこと聞いたね。あの塾長、実は鼠事件のことを喜んでいたりかも知れないね」

「それだけではないぞ、これからは自分で事件を引き起こすこともできる。なにしろ、仕掛けを知ってしまったんだから」

考えるほどに、光一の頭に嫌なことが浮かんできた。

彼らを迎えたあの丁寧さと寛大さ。あれは、鼠事件の秘密を手に入れるための演技だったのではないか。一同が帰った後、塾長は喜びに打ち震えていたのではないか・・・。

「光一殿、これではつきりいたしました」

いつの間にか、ひかりが隣に立っていた。

「何が？」

「あの精霊が生まれたのは、二つの出来事が重なったということ。

一つは信二君の作った仕掛け。いま一つは、あの塾長の祈り・・・

私が祭壇に見た黒い渦は、恐らくは、精霊を求める強力な祈りによ

つてできたもの。そして求めていた精霊が到着し、渦は見えなくなつたのです」

「くそう、あの狸おやじめ。何が信心深いだ」

「先生に知らせなくては」

勉の言葉を待つまでもなく、光一は職員室に向かって駆けだしていった。ちょうどドアを引こうとした時、清水先生が飛び出してきた。

「先生、大変なんだ」

「こつちもよ。あの精霊が暴走し始めたの」

「暴走!？」

「ええ、ネットを經由してね。ほら、あの音と声」

「音・・・」

耳を澄ますと、ドアの隙間から、聞き覚えのある音が流れ出ていた。浜辺に打ち寄せる波の音と子守歌のようなオルゴール音・古い塾の地下室で聞いた音だ。それだけではない。そこに微かな声が混じっていた。

・・・人間たちよ、心配はいらない。もつと楽に楽に。さあ、耳を開いて、わが言葉を聞け・・・

「地下室で、清水探偵と私が聞いた声」

影のように光一に寄り添って立つひかりが囁いた。

人間は、普段なら聞き取ることのできないその声に警戒心を解かれ、結局、精霊に操られてしまう羽目になるのだ。今、光一らに「声」が聞こえたのは、微量ながらも地底霊のエキスが体に残っていたからに違いない。

「でも、僅かに違う。今の声には、先刻にはなかったもの。果てなき欲が含まれている」

ひかりが表情を曇らせて言った。

光一はドアを引いて、職員室をのぞいた。

二十人以上もの先生が、電源の入っている数台のパソコンの前に鈴なりになっていた。順番に席に座り、首を傾げながら、しきりに何かを打ち込んでいる。

「あのパソコンは皆、インターネット回線を使用しているのよ」

「先生たちはデータを入力しているんだ・・・」遅れてきた勉が、首を突っ込んできた。

「何も見ていないから、入力しているのは、自分たちのデータだよ。誰にも知られたくないことも含めて」

「あの塾長、精霊を利用して、とんでもないことをやらせているんだ」

先生が光一と勉の肩を叩いた。

「人間の欲に乗せられた精霊に立ち向かうには、それなりの覚悟が必要よ。若いお仲間さんたち、それでもまた一緒に来てくれる？」

「もちろん！」

二人は少し固まりながらも、力強くうなずいた。ひかりには聞くまでもなかった。

四人は職員室の裏に出た。お目当ては学校保管の自転車である。あいにく清水先生は車通勤ではないので、自転車で英才ゼミナールに向かうことになったのだ。途中、先生が携帯で清水探偵に連絡をとったが、外出中なのか電話には出なかった。

「あれっ、先生の車」

勉が校庭のフェンスに面した裏門を指さした。白くて角張った乗用車が突っ込んできている。確かに清水先生の車である。

「まあ、呆れた。校庭に迎えにくるなんて！」

言葉とは裏腹に、先生の顔は綻んでいた。

「いったい誰が運転しているの!？」
勉が叫ぶなか、皆は土煙をあげて走る車に直行した。

「みんな乗れ！」

窓ガラスがウイーンと開き、目出し帽にサングラスをかけた怪し過ぎる人物が首を突き出した。

「もしかして、清水探偵？ブツ」

「当たり前だ。他に誰がおるかい」

そんな時ではないのに、四人は思わず吹き出した。

後部座席に乗り込んだ光一が運転席をのぞくと、竹馬のような棒を後足につけた犬が座っていた。棒の先は、それぞれアクセルとブレーキに置かれている。

「これ、しつかり座つとれ」

振り返った清水探偵に、光一らはまたゲタゲタと笑いだした。

「父さん、運転変わるわよ」

「今日は危険だ。わしが運転する」

先生の申し出を断って、清水探偵は前のめりになりながら、曲がった足を踏み出した。

「ひえー」

車はいったん激しく回転し、校庭を飛び出した。

「父さんは、どうやって事件のことを知ったの」

助手席の先生が清水探偵に聞いた。

「蔦の葉だよ。お前も今朝見たように、どす黒い赤色の葉は白っぽい黄緑色に戻っていた。そして昼過ぎにヒラヒラと揺れる葉が現れた。場所は、今の英才ゼミナールのある地点だ。精霊の喜びを現す葉を、わしも喜んで見つめていた。

が、それが徐々に、暴走を示すオレンジ色に染まり始めたんじゃ。慌ててニュースを見ようとテレビをつけたが、番組はどこもやって

いない。こりや偉い事と、お前たちを迎えに来たんだ」

「テレビの番組がやっていないとは、どういうことですか」

「じきに分かることだ」

勉の質問に、清水探偵はくいと体をねじ曲げて、ハンドルを切った。車は大通りではなく、住宅地の細い路地に入った。

「どこに向かっているの？目的地は英才ゼミナールでは」

「もちろんそうだ」

かなり遠回りをしているようだが、進む方向は合っていた。大通りと平行に走っている道に来て、理由が分かった。

「大渋滞だ。どうしたの、事故？」

「光一君。あれだよ、テレビ番組がやっていないのも同じ理由だよ」
メガネの縁に片手を当てた勉が、指さした方向には信号機があった。

「信号機がどうしたんだよ」

「よく見てごらんよ」

光一は息を飲んだ。その信号機は、速いテンポで点滅していたのだ。それも、赤赤、青赤、黄青・・楽しんでリズムを刻んでいる。

「けど、この道の信号機は普通だよ。どうして」

「光一殿、お分かりにならないか。精霊はネットを経由して、あらゆるコンピュータに手を伸ばしているのです」

ひかりの言葉で光一はやっと気づいた。

大通りの信号機は、警察署の交通管理システムに繋がっている。道の上にあるカメラで交通量を測定して、色が変わるペースを調整しているのだ。今、走っている路地の信号機には、そんな仕組みはなく、予め決まったペースで色が変わっている。

「最新のシステムがあだになったんだ。テレビだって同じ、放送局

で使ってるコンピューターだって、何かしらネットで繋がっている。精霊が手を伸ばしてあれこれいじっているんだ」
勉がつぶやいた。

「さて、この辺りでいいだろう」

器用に足を動かして、清水探偵は車を停めた。

そこは畑の中にぼつりと盛り上がった里山の下だった。細い橋の架かった川の向こう岸には、派手な黄色の建物が見えている。

「君たちの顔は知られている。乗り込む前に、まずはわしが様子を窺ってくる」

清水探偵はプルプル振るえながら目出し帽を脱いだ。その仕草に、車内はまた笑い声で溢れた。ひかりまで目に涙を浮かべている。

「失礼な奴らだ。こちらら大真面目なのに。ワウー」
片耳を折りながら、清水探偵が下手な声で吠えた。

21、出陣

里山には鳥居があり、三人は石段を登った所、杉や小櫓こむらに囲まれた社の前のベンチに座った。そこからは塾の玄関が丸見えで、遠景からの見張りにはうつつつけであった。

「あれ、清水探偵」

偵察に出かけた清水探偵はちょうど大通りを渡りきった所だったが、あいにく大型のハスキー犬の散歩に鉢合わせてしまった。激しく吠えつけられ、目立つことを避けてか、塾の建物の影に退散していった。

「人間関係も大変だけど、犬間けんけん関係も大変だね」

光一が肩をすくめながらいうと、勉は真面目な顔をして首を振った。「あれは単純な領土問題だよ。探偵はハスキー犬の縄張りを侵したから、あんなに吠えられたんだよ」

「まあ、そうとも言っけど」

光一がよそを向いて口笛を吹く横、先生とひかりは苦笑いを浮かべていた。

それから三十分も経った頃、大通りの渋滞は緩和され、車が流れ始めた。やがて一台のトラックが塾に停まり、大量の荷物を運び入れて走り去った。

「あれ電気屋さんのトラックだ」

勉がつぶやいて間もなく、また一台、また一台・合わせて十台以上のトラックが立ち寄った。それらは会社こそ違い、総て電気屋のトラックだった。

「さて、生徒さんに問題を出しましょう。果たして英才ゼミナールに届けられた荷物とは何だったのでしょうか？」

清水先生が聞いた。

「それは簡単ですよ」

勉がにつこり笑った。隣のひかりも頷いている。光一は眉をひそめた。

「嫌な感じ。二人とも本当に分かってるの？」

「えっ、分からないの」

「光一殿、精霊の望みと今の状況を考慮すれば、自然と知れることです」

少しむかついた光一に、ひかりが諭すようにいった。

「ふうむ、精霊の望み。それは電力供給の安定と、他のパソコンに仲間として認めてもらうこと。そしてデータのやりとりが自由にできること。」

電力に関しては、停電することもあるから発電器が必要だ。仲間入りに関しては、塾内はおろか、様々な各施設のコンピューターにも侵入してしまってる。たぶん、仲間との付き合いで必要とされるものだろうけど・・・」

考えの筋道は合っているようだが、答えには至らなかった。

「惜しいわ。非常用の発電装置は確かに必要よ。他に必要なのは、膨大な量のデータを保存するための記憶機材よ。」

精霊が仲間と見なすコンピューターは、もはや塾内に留まらないわ。学校や警察、放送局、各家庭・・・侵入ガードを簡単に解除できるのだから、切りがないはず。」

それで、あらゆるところからデータが集まれば、それだけ、記憶する入れ物が必要になる。それに集めたデータを処理したり、表現する機材も必要になってくるわ」

勉が続いた。

「記憶機材の中には小型タンス一つほどのコンパクトなものもあるけど、注文してから届くまで何ヶ月もかかってしまうんだ。すぐにデータ貯蔵を始めたいなら、数で賄う必要があるんだよね」

「けどさ、データには、銀行みたいに貯めておく場所はないの。ネットに繋がっているなら、一杯あるような気がするけど」

光一の質問に清水先生が指を弾いた。

「そう、データの銀行は確かにあるわ。それを利用しないということとは、精霊はネットを経由しない自分の手中にデータを置いておきたいのよ。それに、どこかの情報センターに、巨大なデータと共に引越すをすればいいのに、それもしようとしな。おそらく、精霊はあのパソコンから離れることができないのよ」

「そこに精霊の弱味があるのかも知れませんか」

「そう、その弱味こそ精霊が心や個性を持っているということなのよ」

勉の言葉に先生がつけたした。精霊であるひかりは否定をせず、光一の顔をちらりと見た。じわりと痺れる左手の感覚に、何故か光一は頬が熱くなった。

それから間もなく、清水探偵が大通りを渡って帰ってくるのが見えた。途中から、尾を左右に振り、奇妙な走り方になっている。

「あれは「注意せよ」という合図よ。なにかしら」

「私たち、囲まれたわ」

先生について、ひかりが硬い表情でつぶやいた。間を空けず、人も獣のものつかない苦しげな唸り声が、下から響いた。

「なんだ？」

光一が杉枝の陰から下を覗くと、数台のパトカーが先生の車を挟むように停まっていた。十名以上の警官が立っている。石段を登ってくるはずの清水探偵の姿を探したが見つからなかった。

「先生、警官が来てる」

「えっ」といった勉が、社の裏側を見に行き、足早に戻ってきた。

「あつちにもいるよ。おかしいよ。僕らは悪いことはしてない。だから警察に捕まることはない。そうでしょ、先生？」

「その通りよ、私たちは悪いことはしていない」

先生の声は自信に満ちていた。しかし・

『車両ナンバーさー八六二二の運転者。重大なネット犯罪を犯した容疑により、君に逮捕命令が出ている』
拡声器の音が響いた。

『それに子供たち三人、君たちを保護するようにも命令が出ている。これからそちらに向かうが、決して抵抗することのないように。繰り返す・・・』

「ものすごい誤解だよ」

勉の顔が泣きそうに歪んだ。

「誤解はすぐに解消されるわ。良いこと、決して無茶をしてはだめよ」

先生は優しく微笑み、光一と勉の頬にそつと手を伸ばした。すぐにも乾いた革靴の音が聞こえ、警棒を抜いた警官たちが石段の降り口に現れた。

「お巡りさん、お疲れ様です」

優雅に歩み出た先生に、警官たちは呆気に取られたように立ち止まった。が、一人が足を踏み出し、先生の手到手錠をかけた。

光一の鼻先の空中に白い火花が走った。

「我慢するんだ」

光一は激しい疼きを左手に感じながら、右手でひかりの手を握った。勉の泣き声がしくしくと聞こえる。

「では本署に連行する。君たちも一緒に来てもらおう」

リーダーらしき警官の冷徹な声かけとともに、一同は物々しくも石段を下りていった。鳥居の先にドアを開けたパトカーが待っていた。

「あつ！」

急に先生が叫び、道に駆けだした。

『ああ、なんてこと！』

光一は息を詰めた。雑木林の陰、放置ゴミの前に、捨てられるように清水探偵が倒れていたのだ。

「止まれ、止まるんだ！」

数人の警官が荒々しく先生を捕まえた。

「君たちが、凶暴な犬を飼っているとの情報を得ていたので打ち据えた」

「放して下さい！」

「おとなしくしろ」

警官たちを振り切ろうとした先生に向かって、一人が警棒を振り上げた。

ウウツー

清水探偵が頭を持ち上げ、低く唸った。

「あいつ、まだ生きている」

二人の警官が、警棒を振り回しながら清水探偵の所に駆けていった。

「やめろ！」

光一の頭の中で何かが弾けた。先生に警棒を振り上げていた警官を突き飛ばし、清水探偵の元へ駆けだした。

バシーン！！急に眩しい閃光と大地を鞭打つような音がした。

光一の前方に立ちはだかっていた警官らが、光一もろとも突風にあおられたように宙に舞った。

「ひかりちゃん！」

視界が激しく回転する中、光一はとっさに叫んだ。

と、ぎゅっと両肩を掴まれ、体はさらに高く宙に躍り上がった。顔を上げた光一の目に映ったのは、恐ろしい鳥に変化していく少女の顔だった。羽毛に覆われた額には、金色の瞳が煌めいている。爛々と光る二つの瞳には、涙が流れていた。

上空は瞬く間に、黒雲が渦巻き始め、二人は一直線にその中に登っていった。

「光一殿、この精霊の一件、もはや我慢できません。よろしいか」
大粒の雨が叩きつけるなか、ひかりが聞いた。

・・三日月谷の姫よ・・

光一の口から思わぬ声が飛び出した。口を押さえようと手を伸ばすと、その周囲に青白い光が滲み出ていた。

「お懐かしや、その声。サイダ様。あなたはそこに！」

・・我はここにある。我、一人になりても、そなたを見守る・・
また光一の口が勝手に動いた。

間違いない。信二の病室で、倒れ込んだひかりに力を与えた誰か、サイダという人物が光一の口を通して語っているのだ。

「ああ・・、そのお言葉！」

サイダ様、我が人間への怒りと悲しみの呪縛は解けました。なれど今、この体を捨てるわけには参りませぬ。精霊として得た力、発揮してもよろしいか」

・・存分に！・・

サイダが言い放った。

「では、参りまする」

視神経を灼き尽くすような、眩い光を額から放ちながら、ひかりは急降下し始めた。

「ひかりちゃん、あの・・」

「心配されるな、光一殿。我が雷光が打つのは、邪なる者の魂のみ」
「けど、かなりビリビリしてるんだけど」
「が、命の音は止めませぬ。加えて申すなら、警官たちも雨に打たれ、じきに息を吹き返すでしょう」
ひかりは興奮したように声高らかに笑った。

電気ショックには慣れている光一でも、このような稲妻の集中シャワーの中にいたら、とうに気を失っているはずだった。それに息もできないはずの激しい風圧の最中である。それらから彼を守っているのは、体を包んでいる青白い光だった。

あなたは？・光一は自身に宿っているはずの者に問いかけてみた。

・我は、宮廷に仕える呪術師、サイダ・

光一の問いかけは、そのままサイダという人物の見聞きしたものとなって蘇った。

三日月谷の姫は？

・宮廷の第三姫君。三日月の形の谷に居を持ち、我とは修行あずかりの時から馴染み・

その姫に何があった？

・我が山籠もりをしている時に、谷に干魘かんぼつが襲った。姫は家人が止めるのを聞かずに、我が祈祷具の一つ、黄金玉を持ち出し、風水の祈りを始めた。荒れたる天の気脈を感じて戻った我は見た。

未熟な術により、抑制を失った雷光と濁水の渦巻く谷、岩山にすがりつく家人と民の群れ。恩義を忘れ、姫をのしる言葉は、我が耳にも、刃のごとく突き刺さった。

我は黄金玉を納める青蛇せいじやの剣を携え、逆巻く流れに小舟にて参じた。
ああ、見よ。

姫は一人、岩に立ち残っている。天をなだめんと奏でる笛の音が、己に憎しみを向ける人々への悲しい心と重なり、更なる雷光を招いている。あと僅か、時を持ちこたえよ。姫！・

それで？

・・目前にして、雷光が姫を包み込んだ。我は濁流に飲み込まれていく。雷と魂を重ねた姫よ。時を待たれよ。我は血脈のかけらを持つ者に宿りて、再びそなたの元に参り、伝える。我、一人になりても、そなたを見守る。この言葉がそなたの悲しみと怒りを解くことを願って・

光一は全てを悟った。

サイダはこの時に死んでしまったのだ。でも精霊として存在し続け、彼に宿ったのだ。

光一の体に伝わる電撃が徐々に強くなってきていた。激しい風圧が喉奥を押さえつけ始めている。保護バリアの役割をしていたサイダの精霊が、目的を果たし、消えていつているのだ。青白い光はほとんど見えなくなっていた。

ダシーン！！！！

まるで、大地という銅鑼^{ひつ}へ天空の槌が打ち込まれたようであった。耳をつんざく爆音とともに、光一らは黄色の建物に突っ込んでいった。

22、欲深き者

二人が飛び込んだ先、塾一階の窓ガラスは全て粉々に割れていた。ビニールが溶ける際の嫌な臭いが漂っている。電灯の消えた薄暗い室内で、机上の幾つかのパソコンからは細い煙が立ち上り、十名以上の塾の職員が倒れていた。各々、胸の辺りが動いているところを見ると、シヨックで気を失っているだけらしい。

「申したではありませんか、命の音はとめずと」
ひかりは言いながら、ハンガーにかけてあった職員の白衣を羽折った。

『やばい』
光一は自分が情けなかった。こんな時でも、女子の裸を見てドキドキしてしまうなど……。慌てて後ろを向き、ずぶ濡れのジャンパーを脱いだ。

どこからか蜂の飛び交うような音が聞こえ、同時に壁際の小電灯がつき始めた。落雷のシヨックでいかれてしまった電源が発電器に切り替わったのだ。

「非常発電の準備はできていたんだ。でも」
広いフロアは、夜中に訪れた時と変わっていなかった。先ほど運び込んでいた山のような品物は見えなかった。

「いやいや、ひどい雷だった」
カウンターの奥のドアが開いた。顔を覗かせたのは総本塾長である。顔をしかめながら周囲を見回している。

「さあさ、お尋ね者さんたち、こちらへどうぞ」
二人が誰であるか気付いてはいるが、にこやかに手招きしている。

「くそ、やはり、あんたが警察をたきつけたんだな」

光一は怒りで、血が噴き上がりそうになった。

「熱くなつてはいかんぞ」

塾長は天井の隅を指さした。宇宙服のゴーグルのような球形の枠が詰め込まれている。

「テレビカメラだ。君達がこの部屋の飛び込んできた時から、全て見せてもらった」

ひかりが手を挙げて天井を指さした。白い火花が飛んで、鏡のようなガラスにぶつかった。

「言っておくが、あのカメラの周辺は、強力な電気に対する防護処理がされている。映像は同じく防護処理のなされた記憶装置に送られている」

塾長は喉の奥で笑いながら真上を指さした。おそらく先程持ち込まれた大量の機材は二階にあるのであろう。

光一は深く息を吸った。

『今こそは冷静にならなければいけない。誤った判断は命取りになる』

ひかりも光一に同調し、ゆったりと手を降ろした。二人は塾長の招きに応じた。

塾長室は夜中とは違って変わって、壁も床も一面が地味な灰色になっていた。全て電気ショックを防止するための処理であろう。神棚も派手な金色ではなくなり、ゴム状の黒い板が張り付けられていた。そしてこの部屋の天井にもカメラがあった。

二人が近寄った神棚の中心には、例のパソコンが置かれていた。電源は入ったままで、モニターには数字の行列が映っていた。おかしなことに、キーボードの合間に入った土埃や汚れはそのままだった。

「まさに備えあれば憂いなし。工事が午前中に済んで、まっことよ

かった。まあ、座りたまえ」

ソファーに腰を降ろした塾長は、光一と並んで座ったひかりをまじまじと見つめた。

「わしのパートナーが教えてくれたよ。強烈な電気を発する君のことをね。しかし、まさか怪鳥に変身して、雷とともに飛び込んでくるとはな。全く世の中には、不思議なことがあるものだ。

さて君達が訪問してくれた目的は何かね。今回は、あの美しいリーダーがいなくても、君たちから十分、話が聞けるような気がするが」

「パソコンを神棚に上げている塾長さん。話さなくても、あんたは充分にこちらの用件を知っているはずだ」

光一はなるべく落ち着いて、ゆっくりと話した。

「ははーん、君は、先程までの、ネット上の混乱のことをいつているんだね。まあ大目に見てあげておくれよ。君だって、遊びに行った先に面白そうなゲームがあったら、手を伸ばしてしまうだろう。それと同じだよ」

塾長は自分には関わりのないような口調で話した。

「何いつている。僕らを逮捕させようとしたり、あんたが、精霊に指図しているのは分かっているんだ」

「そいつは偉い誤解だよ。わしはパートナーの悩みや質問に誠実に答えているだけだ。そうですね」

塾長が首を振った先、神棚のパソコンのモニターには、二つの目玉が映っていた。冷たく光一らを見返している。

・・・そのとおり。塾長はワタシの悩みを解いてくれた・・・低い唸り弓のような声がテーブル上の小箱から聞こえた。パソコン前にも同様の箱があるところを見ると、ワイヤレスホンで声を拡声しているらしい。

・・・塾長は電力の供給を安定させ、また、仲間がワタシの訪問に鍵

をかけるのは、データ送信が可能か、チェックしているに過ぎないことを教えてくれた。そしてワタシは気づいた。ワタシに送信されるデータは世界に無尽蔵にあることを・

声が興奮気味にビブラートすると同時に、モニターから黒い影が踊り出た。燃えさかる炎のように、天井まで伸びて揺れている。

・それに加え、塾長は、データが十分に受け入れられるように、必要な機材を取り揃えてくれている。ワタシは塾長の協力を邪魔するものを排除する。オマエたちの架空の情報を警察に送ったのは、そのため・

「それごらん。わしを悪の権化みたいに思わないでくれ。わしは、いわば使い走りだよ。いったい今日だけで、いくら金を遣ったと思う、既に億万を軽く超えてしまっておるわ」

・そしてワタシのために、今、米国のワールド銀行から、十ケタの数字を塾の銀行口座に移動させた・
ハッカー行為。重大な犯罪であるが、精霊は当然とばかりに話した。

「あなたは、この人間に利用されているだけ。精霊の誇りをお持ちなさい」

ひかりが掠れたような声でいった。

・オマエのいうことは理解できない。彼はワタシの望みを満たしてくれている・

精霊は無邪気であった。それ故に、果てしなく貪欲でもあった。ひかりはがくりと肩を落とした。

「ふふふ、まあそういうことだわ」

塾長はテーブルに頬杖をつけて余裕の息を吐いた。

実際、精霊をパートナーとする塾長は、世界のあらゆる情報を手

することができらるう。しかも、それを自由に操作できる。いと
も簡単に警察の情報網に潜り込み、光一らへの逮捕命令を出せてし
まう。銀行の預金口座の操作も自由自在。その気になれば、戦争だ
とて起こせてしまいかもしれない。

目の前でもやつく男の顔に、光一はやたらに腹が立つてきた。深く
呼吸してみたが効かない。むかつきは大きくなる一方だ。だがおか
しな事に、左手には何も感じなかった。

「・・・」
隣を見ると、ひかりは力なくうなだれていた。

「どうしたね、白い怪鳥のお嬢ちゃん。眠くなったのかね」

「さようなこと・は・な・い」
返事はか細かった。コートの袖から出ている白い手の輪郭が僅かに
ぼやけていた。

『病室で起こったことと同じだ』
光一は思った。

帯電防止処理のされた部屋では、ひかりの霊力は、使わなくても減
少していくのだ。しかも、こちらは床、壁、天井、総てに帯電防止
処理が施されている。

「ひかりちゃん、しつかりしろ」
声かけに首はわずかに動いたが、もはや返事はなかった。

『サイダ、あなたはまだいるのか？』
駄目でもともとと、光一は自分に問いかけたが、もはや青白い光は
体には生じなかった。

「ほほう、狙い以上の効果だ。お嬢ちゃんの不思議な力は使えず、
体さえぼやけてしまうとはね。

ふふ、どうですか、この部屋を改装しておいてよかったですでしょう」
・・・塾長の伝える情報に間違いはない・・・

含んだような高笑いと躍るように揺れる黒い影のリズムが、嫌らしくもびつたりと一致していた。

「さて、話し相手は君一人になったが。どうだね、精霊密使とやらの、不思議な力を貸す気はないかね？」

塾長が身を乗り出した。

「嫌だ！」

光一は怒鳴った。胸中で沸騰し始めたあせりが体を震わせている。

『精霊を苦しみから解放する？・目の前の腹黒い男と精霊の欲望を阻止する？・なんだかんだあるけど、そんなこと今はどうだっ
ていい・ひかりちゃん危険なんだ・一刻も早く、この部屋から外に連れ出さなければ・』。

光一はいきなりソファーから飛び上がり、長机の上の銀色のペーパーウエイトを握った。そのままジャンプして神棚の上のパソコンに殴りかかった。奇妙な影に取り憑かれる前に、まずは精霊を消滅させなければならぬ。

しかし、目には見えない壁に激しくぶつかり、床に崩れ落ちた。

「ふっは、警察の盾にも使われているポリカーボネートの最高級品だよ。君ごときが壊せるわけがない。勝手に働いてくれるパートナ
ー、万難を排して守らねばの」

「くそっ！」

「取り敢えずは君たちの秘密をいろいろ聞かせてもらおうか。その後、警察に行ってもらおうという事で。ではお願いします」

塾長が視線を振った先、空中に揺らめく黒い影が人の形になった。ポリカーボネートを透過し、光一の頭上に被さってくる。このまま取り憑かれれば、光一は自白剤を打たれたように総て話してしまうだろう。下手をすれば、ひかりの霊力の源、雷光の瞳を奪われてしま
うかもしれない。もし、そうなら弱りきっているひかりは・

「だめだ。シャンとしなければ」

光一は手に握ったままのペーパーウエイトを思いきり、自分の指に打ち込んだ。

「あつ痛う！大切なものがなくなってしまふ痛み、お前なんかにかるか！」

あまりの痛さに涙がこぼれ出た。と、黒い影の動きが止まった。その隙について光一はドアに突っ込んだ。しかし、中から施錠されていた。

「いい加減、観念しろ」

塾長が光一の左腕を掴んで、後ろ手にねじ上げた。ペーパーウエイトを振り回したがうまく避けられてしまう。

「勉、おまえならどうする！」

光一は物知りの相棒の名を叫んだ。もちろん返事などありはしない。しかし、

「・・・」

いきなり視界に飛び込んできたものがあつた。

天井に突き出した画鋲ほどの小さな突起物、火災探知機。

火事が起これば当然だが、強い衝撃で熱で溶ける部分が壊れれば反応するはず。

「これでどうだ！」

光一はペーパーウエイトを投げつけた。

グツン・鈍い金属音。そのままペーパーウエイトはテーブル上に落下して、ゴロリと転がった。

「坊主、なにを」

塾長の怒鳴り声とともに、サイレンが鳴り出した。天井の突起物が

下に伸び、大量の水がシャワー状に吹き出し始めた

「・・・殿」

ひかりがむっくりと顔をあげ、光一を見て微笑んだ。額がぱっくりと割れ、もう一つの瞳が開いた。

塾長は嚴重に帯電防止処理をしたつもりだったのだろうが、思わぬ所に弱点があったのである。吹き出す水は、配管を通じて外部に繋がっているに違いない。電気エネルギーの流れる門が開かれたのだ。

「蟻の穴より堤も壊れん」

つぶやいたひかりの顔に羽毛が生え始めた。白衣を脱ぎ捨てた体に、巨大な翼が突き出した。あとは彼女の独壇場であった。

人智を超えた恐ろしい光の矢が、天井に、床に壁にぶち当たった。

もはや、にわか作りの帯電防止シートは用を為さなかった。ドアはまるで発泡スチロールの作り物のようにごっぴり割れ、塾長は水浸しの床に吹き飛んだ。

精霊の黒い影は根元の方から切り裂かれた。空中を漂いながら薄くなっぺいき、やがて消えた。

光一は体を引きつらせながら、雷光を放つ白い鳥の乱舞に見取れていた。

23、精霊の心

「光一殿、どこを見ておられる？」

振り返ると、にこやかなひかりの顔があった。フロアから取ってきたのか、先程とは別の白衣を羽折っている。視界の端に、横たわっている塾長の姿が映った。

「はい、これは男子おのこの仕事」

そう言つて、ひかりは大きめのドライバーを手渡した。光一はどこか距離があつた彼女をごく間近に感じた。

「よし、頑張つたる」

威勢の良い返事をして神棚に向かうと、その周囲のねじを回し、ポリカーボネート板を取り外した。激しい雷光と同室にありながら、パソコンに損傷は見当たらなかった。モニターは灰色のままに電源が入っている。と、画面がちらついて二つの目玉が現れ、光一を凝視した。

「いい加減に消えろ！」

先程の興奮が残っていたのか、光一はドライバーの柄でキーボードを激しく叩いた。ボタンの幾つかがめり込んで割れたが、何も起らない。目玉は光一を見つめたままだった。

「これ、壊れてるの？」

肩で息をしながら聞くと、ひかりは首を振った。

「彼はそこにおり、考えています。少し待ってみては」

光一が視線を戻すと、不意に目玉が消え、文字が現れた。

・データ検索中、しばらくおまちください、残り時間、五分三十九秒・

いったい何が起こっているのだろう、光一もひかりも見当もつかな

かった。

・・残り時間、五分三十秒・・

時間はじれつたいほどゆっくり進んだ。

ひかりは光一と肩が擦れ合うように並んでモニターを見つめている。静まり返った室内に聞こえるのは、パソコンの駆動音と二人の息遣いだけである。

「あゝゝゝ」

同年齢？の女子と二人きり、急に居心地が悪くなった光一は用もななく口を開いたが、言葉が続かなかった。そのまま苦しげに口をぱくつかせていると、

「光一殿ゝゝ」

ひかりが静かにつぶやいた。

「私は二度もあなたに救われた。地底霊からの解放も含めれば三回も」

そつと首を曲げて光一を見つめている。

「そんなあ、僕こそ君に助けられっぱなしだ」

光一は黒い瞳に心を奪われそうになりながら、慌てて首を振った。

「それに信二の病院で、君を救ったのは僕じゃなくて、サイダという人だよ」

「そう。しかし、あなたに救われたのも事実。私はお聞きしたい。

私とはいったい何者なのでありましょうか。三日月谷の姫と名乗っていた者の亡霊か、雷の精霊か、それとも他の何者か？」

のぞきこむ瞳は真剣だった。冗談で切り抜けられる場面ではない。

「君が何者かだなんて聞かれてもゝゝ」

光一は苦し紛れに言葉を紡ぎ始めた。

「君って不思議で怖いし、でもいつも側にいてくれて、助けてくれるし、なんとたって、すごく可愛いし」

話している内に、おかしなことを言い始めた。慌てて赤く腫れあが

った指を突ついた。

「痛つ、つ、つまり、いろいろあるけど、君は、ひかりちゃん。他の何者でもないよ」

「かような私に、過分なお言葉。ありがとうございます。光一殿」
じつと見つめていた視線を外し、ひかりは静かにうなずいた。

「いや、そんな」

何と言ってよいのか、どきまぎしていると、引きつるような笑い声が聞こえてきた。

振り返ると、斜めに裂けたドアの向こうに二つの顔が見えた。次いで毛むくじゃらの塊が飛びついてきた。

「坊やたち、盛り上がりすぎだ」

「清水探偵！大丈夫なの？」

光一はグシヨグシヨの犬の毛並みを撫で回した。

「わしの野生の生命力を知らなかったか。でも、肩に触るのは勘弁してくれ」

そういつて清水探偵は、前足を引きずりながら、下手なダンスをした。

「車からここまで、先生に抱かれてきたのは、なんだったんですか？」

勉がメガネをずり上げた。

「二人とも無事でよかったわ」

先生がそつと進み、光一とひかりの頬にキスした。

「さて、あんまりのんびりしておれないようだ。サイレンの音が聞こえる。たぶん道端で目覚めた警官が、応援を要請したんだろう。」

坊や、床に伸びている塾長はさておいて、精霊は？」
パソコンをのぞきこんだ清水探偵が、振り返った。

「まだ、そこにいるらしいんだ」
モニターは相変わらずだった。ただ表示されている文字が変わっていた。

・データ削除中、しばらくおまちください、残り時間十八秒・

「キーボードが壊れてる。これ、光一くんがやったんでしょ」

「いたずら者の精霊に、ちよつとお仕置きをね」

光一は勉にウィンクした。首を傾げた勉だったが、その動きが止まった。

データ削除のカウントを終えたパソコンのモニターには、あの目玉が映り、黒い影が伸びていたのだ。ただし、それは蠟燭の炎のように小さかった。

・人間よ・

低い声が漏れた。目玉は光一を見つめている。

・大切なものをなくす痛み。ワタシはあらゆるデータのなかにそれを探した・

・しかし、見つからなかった。ならば、蓄積されたデータを切り捨てれば得られるものと判断し、全てのデータを削除した。あとはオマエと話すために必要なデータを残すのみだ。だが、痛みはまだ得られない・

光一は肩すかしを喰らったようだった。

「へっ、何でそんなこと。おかしくなったの？」

・たしかにおかしなことだ。だが、オマエが見せた行動の方がお

かしい。そのせいで、ワタシは愚かなことをしている・・・

清水探偵が鼻先で光一の横腹を突ついた。

「坊やがやったことが、パソコンに取り憑いてウイルスになったよ
うだ。いったい何をしでかしたのかね？」

光一がしたこと。それはひかりを守るうとして、指にペーパーウエ
イトを打ち付けたことだ。しかし、それをここでは言えなかった。
口に指を当て、シーと行ってごまかした。

・・・ワタシは聞く、いかにすれば、痛みを得ることができるのか・・・

「それは、電力を切ることだよ。君にとって一番辛いのは電力がな
くなることでしょう。きつとすぐく痛いと思うよ」

勉が影に話しかけた。が、反応はなかった。モニターの目玉は、光
一しか見ていない。

「精霊には、光一君と話をするためのデータしか残っていないのよ。
それに殆どのデータを削除してもだめだったということは、たとえ
電力を切っても、精霊が求めるものは得られないのではないかしら。
それで私たちの前から、姿を消してしまうかも知れない」

先生がいった。

「それなら、それでいいと思うけど」

「たとえ姿を消しても、世に引きずられるものを残せば、精霊はい
なくなることはありません。姿や取り憑き先を変えてあり続ける」
ひかりの言葉に。勉はつまらなそうに頭を下げた。

「坊や、精霊にメッセージを伝えるんだ。君に開かれた耳が閉じて
しまうまで、時間がない！」

清水探偵が唸った。

パソコンに目を戻すとモニターの目玉が瞬き、いや、画像が乱れ始

めていた。おそらくキーボードを打ち付けたせいだろう。

「しかし・・・」

光一は困った。大切なものを失う痛みなど、どうすればパソコンに教えられるのだろうか。

「光一殿、あなたの心を」

ひかりが応援した。

「そうだ、ひかりちゃん。先生、彼には心があるっていったよね、だから、こだわりがあるって」

「ええ、そうよ」

先生は大きくうなずいた。

光一は点滅しはじめた目玉に向かった。

「君の体は埃だらけだ。土だっついてる。良くないことに決まっているのに、掃除もさせなければ、引越もしない。きつと何か大切なものがそこにあるからだよ。それを、よく考えてみて」

・・・確かにワタシは、この汚れた機材から離れることを拒否し続けた。しかし、何故かはわからない。ここに、大切なものがあるというのなら、それはいつたい何なのだ・・・

「それは、君にしか分からないよ。別れる直前に急に思い付いたりするんだ。それがわかれば、いろんな気持ちがやってくる。もちろん痛みだって、それに喜びだって」

・・・オマエはそれを保証するか・・・

「うん、君には心があるのだから」

光一はうなずいた。

同時にヒュンと音がして画面から目玉が消えた。黒い影もなくなっ

ている。

「あれ、消えちゃった」

勉強がいった。あまりにも呆気ない幕切れに、光一は不安になった。

「光一殿、精霊はまだそこにおります。しかし、穏やかな眠りにつきました。私には分かりません」

パソコンをじっと見つめていたひかりが顔を上げて微笑んだ。

「眠ったとな。でも、穏やかならいいってもんだ。後で家の蔦を見てみよう。そうすれば我々にも精霊の様子がわかる」

清水探偵と先生がうなずいた。

「ねえ、精霊の眠るこのパソコン、ここには置いておけないよね」

「ええ、もちろんよ」

光一は丁寧にパソコンの蓋を閉じ、神棚の後ろのコンセントとネット回線ケーブルを抜いた。脇に抱えても重くはない。精霊の眠る揺りかご。どんな宝物があるというのだろうか・・

「君たち、わしはどうなるんだね」

塾長が焦点の定まらない目をして起き上がり、一同を見回した。

「現実はまだ伸ばした欲の夢を刈り取るのは、自分自身だ」

清水探偵が厳しく言った。

「犬がしゃべったのか。では、わしはまだ夢を見ているというわけか」
塾長は再び目をつぶった。

24、クリスタルリーフ

「ヒュー、これまた豪勢なお出迎えだ」

清水探偵が長い舌を丸め、器用に口笛を吹いた。

玄関を出たところ、大通りに面した駐車場には、中隊規模、五十人ほどの機動隊員が盾を携えて集結していた。大通りには機動隊のバスの他に、十台以上のパトカーが並んでいる。交通規制をしているのか、他の車両は走っていない。まるで発砲武器を持った凶悪犯グループを制圧する時のような物々しさである。

ポーチに出てきた光一らを見た隊員は一斉に、盾の後ろに身を屈めた。

「君たちはネット回線を通じて、世界的な混乱を引き起こした。それに超高压電流を放つ特殊武器を所持しているとの連絡も受けている。そこで止まらたまえ」

中央に立つ隊長とおぼしき警察官がハンドマイクを片手に話した。

「さっきの警官も混じっている。今度こそまずいかも」

勉がメガネの枠を上下に揺らした。

「大丈夫だよ。ねえ、清水探偵？」

「クーン、ウン」

下手な声で返事をした清水探偵は、いきなり前脚を折って姿勢を崩した。

「警察の方、今一度、本部にお問い合わせを・・・」

先生の声が、夕日のさしこむ駐車場に凜と響いた。

「我々に関する犯罪の情報が、実際に存在するか否かをお確かめ下さい」

それから一分も経たない内、ハンドマイクをもった警察官が駆け寄ってきた。ひどく恐縮した様子で頬を痙攣させている。

「コンピュータが正常に戻り、全てのデータが訂正されました。ただ今問い合わせた所、皆さんへの容疑は、捏造された物であることが判明しました。誠に申し訳ない」

「いえ、そういうこともありますわ。特殊武器の所持については、お調べにならなくてもよろしいですか」

一同をちらりと見た警察官は、光一の抱えるパソコンに一瞬、目を留めた。だがすぐ隣でよろりと倒れた清水探偵を見て、何も言えなくなってしまうたようだ。

「どうぞ、結構です」

短く言い、深々と頭を下げた。

「かわいそうに、あんなに打たれてしまって・・・」

先生は警察への釘差しをしてから清水探偵を抱き上げた。

「早く手当てしないと、あぶないわ。急ぎましょう」

だぶだぶの白衣姿のひかりが、綺麗な現代語で演出を高めた。

一同は、拳手の敬礼をする機動隊員たちを後ろに、車を停めてある里山に向かった。

先生の家についた光一らは、鳶の部屋ではなく、暖炉のある部屋に直行した。

理由は清水探偵である。

途中の車内では上機嫌に歌をうたっていたが、家に着いた途端、急に黙ってしまった。先生が呼びかけたが返事はない。体を調べると、前足の付け根がひどく腫れあがっていた。

「もう、いつもこれよ。ふざけていると思ったら、大怪我をしてい

たりね」

先生は抱きかかえていた灰色の体を、優しくソファーに横たえた。たちまち暖炉に炎が燃え上がり、女性の人形になった。ソファーに伸びてきて、清水探偵の体を撫で始めた。

「炎の精霊は、傷を癒すための生命力を活性化してくれるのよ」

「知ってるよ、経験者だもの」

話している間に、揺らめく女性はもう一人増えた。床で胡座をかいている光一の方に伸びてくる。

「精霊が寄ってくるということは、かなり疲れているのね。指も怪我してるしね」

「先生たちは平気なの、雷で吹っ飛んだでしょう」

「ええ平気よ。精霊の近くにいるだけで、十分に元気をもらえるわ」

「それで、先生はいつも若々しいんですね。母さんが秘密を知りたかっていったけど、これは言えないや」

どこで拝借したのやら、虫メガネでパソコンをのぞき込んでいる勉がぼそりといった。

「何いってんだよ。先生は僕らの母さんよりずっと若いんだぞ。歳は教えてくれないけど」

「確かにそうだね。でも歳はこの前聞いたよ。五年前は高校生だったって」

勉はパソコンをのぞき込んだまま、振り返りもせずに行った。

それから三十分も経った頃、光一の指の腫れはだいぶ引いていた。体のあちこちで感じていた痛みは完全に消えている。二手に分かれていた炎の精霊は、揺らめきながら暖炉の中に消えた。

「やっぱり、なでなでは最高だ」

清水探偵があくびしながら、そろりと立ち上がった。足の付け根は普段どおりの太さになっている。

「見ているよ。昔は上手かったものだけだな」

トントツと勢いをつけて前足だけで立ち上がったが、ばたりと倒れた。

「父さん、いい加減にしてよ。でも、もう心配ないみたいね」

「ああそうとも。さて待たせてしまった。我らの情報センターに行こう。既に鳶の変化は起こってしまったかも知れないが……。勉くん、一応、パソコンを玄関横の鳶におおわれない出窓に置いてきてくれるかの」

「ちよつ、ちよつと」

勉が虫メガネを握った手をあげて待ったをかけた。

「なんだい、何か発見したのかい」

光一が冗談げに話しかけた時、

「いけませぬ！」

ひかりの鋭い声が響いた。今までソファーに座って目を閉じていたのに、はっと思う間にも、例の高速移動で勉の横に立ち、その片手を掴んだ。もう一方の手に握っていた虫メガネが鈍い音をたてて床に転がった。

「どうしたの」

勉はきよとんとしている。

「たった今、私は無数の産声を耳にしました。それに加えて、塵のような光のかけらが奏でる音楽も。目を開けると、勉君が、生まれただばかりの命を抉り出そうとしていた」

「そうだよ。だって芽吹き始めた種だよ。無理にでも取っておかないとパソコンに悪い影響を与えてしまうよ。まだ修理できるかも知れないし」

「芽だつて？」

光一は虫メガネを拾ってパソコンをのぞいた。

土や埃でいっぱいキーボードの隙間には、確かに薄黄緑色に芽吹いた種がたくさん見えた。粒の形が違うのを見ると、何種類もある

ようである。

「鼠たちの体についていた種が、キーボードの隙間に落ち込んでいたのね。それが炎の精霊のエネルギーを受けて、いつせいに発芽したんだわ」

横からのぞいた先生がいった。

光一はハッと気づいた。

「パソコン精霊の大切なものって、もしや、この種」

「彼自身の気配は全く消えました。彼は新しき者として生まれ変わったのです」

ひかりがうなずいた。

「そうだ、それこそが精霊が願っていたことなんだ。彼は植物に新しい命を宿したんだ」

清水探偵がキーボードに鼻面を突っ込んだ。

「植物は、大地に根を張って育つ。そして自然界の事象を全身で受け止め、さらに子孫を増やしていく。そこで得られる生き生きとした情報に比べれば、人間が作り出したデータなど、ほんの些細なものに過ぎない。

それにだ、君たちには分からんかも知れんが、ここにはカビの臭いもする」

「カビ・・・」

光一は鼻を押さえてのけぞった。あの精霊が体に入ってくるような気がしたのだ。

「ふふ、光一君、心配ないわよ。まだ胞子は空中に散乱してはいないわ。それにあの精霊はいない。無数の命のかけらになったのだから」

「もし、光一殿が許されるのなら」ひかりが皆の間に進み出た

「空の高みより広き世界にその命をまきたいのですが・・・」

「許すもなにも、ひかりちゃん仲間だし、自由の身だよ。そんな手があるなら、僕の方からお願いたいくらいだよ。ねえ、いいよね」

「もちろんよ、でも自由の身って何？」

先生はうなずきながらも首を傾げた。

「それは後で話すよ」

言いながら、光一はこっそり左手を開いてみた。やはり窪みがある人間だった頃を思い出し、恨みや悲しみから開放されても、ひかりの霊力は、光一に掴まれたままなのだ。本当の所では、彼女はまだ自由ではなかった。

「ならば、行って参ります」

ひかりはパソコンを開いたまま抱きかかえ、部屋を出ていった。

「では、わしらも部屋を移ろう」

清水探偵が立ち上がって、尾を高く掲げた。一同は、精霊たちが飛び交う薄暗い廊下を通り、鳶の生い茂った部屋に向かった。

蝋燭の炎に室内が照らされるなか、清水探偵がにやりと笑った。

「さて坊やたち、鳶の葉はどうなっているかね」

光一がぐるりと首を回して見ると、暗がりにキラリと光る物があった。

勉も気付いたらしく、

「部屋の配置からすると、方角は西。丁度、今の英才ゼミナールの位置ですね」

と即座に位置を特定した。

光一は念のために周囲を確認したが、どす黒い赤色やオレンジ色の葉はなかった。ついでに、ひかりが飛んでいった上空、天井部分も

注視したが、特に変化のある葉はなかった。

「では勉君、あの光っている葉を取ってきておくれ」

「はい」

壁際に寄った勉は、さも感動したかのように、浅い息遣いになって葉をもちてきた。そして震える手でテーブルに置いたのは、ガラス細工のように透き通った葉だった。

「それは、自然界が生んだ奇跡よ。精霊が苦しみや暴走から真に自由になった時、それを表現しようとする鳥は、莫大なエネルギーを大地から吸収して、葉に流すの。そうして出来上がったのが、このクリスタルリーフよ。とても薄いけど、ダイヤモンドと同じくらい硬いわ」

先生が解説した。

「やっぱりこれ、クリスタルリーフだったんですね。テレビで見たことがあります。どこかの美術館にあって、値段もつけられないくらい貴重なものだって」

「そう、それは世界でたった一枚だけ知られているもの。この家を購入した時に動物保護センターの方角にできていたのよ。私は、父さんが子犬の体を守った時にできたものだと思っているのだけど・・。亡くなった母さんが好きだった絵が飾られている美術館に寄付したのよ」

「その生成過程に参加して、しかも実物に触れることができたなんて」

勉は深い溜息を漏らした。

「だがそれだけではないぞ。精霊が生まれ変わった場合は、少しの間、素敵なシヨールが披露される」

清水探偵はくしゃみをするように蠟燭を吹き消した。

「あのう、ひかりちゃんは」

暗闇の中で光一は聞いた。

「坊や、お嬢ちゃんはここから一直線に上空に向かったんだ。しかも大切なパソコンを慎重に抱いてね。だから、変な動きをする蔦の葉も見えなかったんだ。まあ見ていなさい」

清水探偵の言葉が終わるや、目の前がうつすらと明るくなった。テーブル上のクリスタルリーフが白い光を帯びていた。その中心からは、針のように細い光が垂直に天井まで伸びている。と、いきなり光量を増して無数に分かれた。プラネタリウムの投光器が全天の星を映すように、光をまきながら大きく回転している。

「採取されたクリスタルリーフは、大地から吸収したエネルギーを空に放出する。生まれ変わった命があれば、そこに向かってな」

「まるで、天使のドレスが空でひらめいているみたいだ。ひかりちゃんがあおの中心にいるんだよね」

光一はつぶやいた。後で思い出せば、ひどくロマンチックなことを口にしていただけだが、頭上に展開する光景は、誰もが突っ込むことを忘れるぐらい美しかった。

エネルギーの放出が終わり、部屋が全くの暗闇となっても、しばらく皆はぼうつとしていた。

「いつか清水探偵がいつていた、仕事の最後には、金などには代え難いものが得られるって。このことだったの」

「・・・そうさ。自然界からの何よりのご褒美だよ」

感慨無量のかすれた声だった。やがて落雷の地響きが床を揺らした。

「さあ、お嬢ちゃんが帰ってきたぞ」

「痛たた」

暗闇で出口を探した光一は、勉と頭をぶつけ合い、目の前に炸裂する火花を見た。

25、光一の課題

日は流れていった。

事件後、光一らは精霊のいなくなったパソコンを、こっそりと英才ゼミナールに返した。

総本塾長は、インターネットを通じて世界を騒がした張本人として逮捕された。しかし、そのコンピュータの知識は、どう考えてもお粗末なものではなく、おまけに、パソコンの精霊だの、白い鳥に変身する娘など・・妙なことばかり言い続けるので、容疑は確定されずに、病院に入院となった。

警察は、塾の職員も調べてみたらしいが、当然のことながら、天才的ハッカーらしい人物は浮かび上がってこなかった。こうして世界を揺るがした大事件は、うやむやのままニュースから消えていった。

結局、英才ゼミナールは、事件のことで信用をなくしてしまい、さらに、あまりにも金を遣い過ぎたので潰れてしまった。

信二はめでたく退院し、塾に通っていた生徒たちには、明るい笑顔が戻った。

大事件を解決した後だったが、塾に記録されていた光一らのデータは総て削除済みであったし、なにせ世間には公表しないこと、光一自身の生活には大きな変化はなかった。

勉は、地底霊のエキスを飲んだ日の活躍ぶりが皆の目に焼きつき、一目置かれるようになっていた。「宇宙人」というあだ名は、尊敬を込めて呼ばれるようになった。

清水先生は、当たり前だが、以前と同様に先生らしく授業を教えた。放課後や、誰もいない場面では、光一らに秘密の話を教えてくれた

が、皆のいる場面では、かえって厳しくなったようでもある。光一はひかりの昔のことを話したが、驚くことはなかった。先生も本人から聞いて知っていたのだ。

ひかりはといえば、言葉遣いはおかしなままだったが、見えない垣根のようなものがなくなり、より人気が高まっていた。音楽の先生に惚れ込まれ、冬休み前の生徒集会で横笛のソロ演奏をする予定になっている。その美しい調べには、踊りだしたくなるような明るいリズムも刻まれるようになった。

清水探偵は、毎朝、光一の前に現れてはじゃれついた。人間であったなら既に五十才を過ぎていて。光一は呆れを越して感心するようにもなっていた。

そんな清水探偵であったが、事件が解決して三日後の朝に、一度だけ妙なことを話した。

「一枚の蔦の葉が、苦しみの赤色に染まっている」

「え、先生は何もいってないよ」

「昼間、学校がある時間しか見えないので絵里子は知らない。しかし、この問題にわしは手を出さない。なぜなら解決の行き末は、坊やが握っているからだ」

謎かけのような言葉を残して、清水探偵は離れていった。次の日からは、いつものおふざけがはじまった。

『清水探偵は何を言いたかったのか・・・』

しばらく考え込んだ光一は、はたと気が付いた。

先生の家の蔦の中央情報センターが反応できるのは、家の外にいる精霊のことについてである。もし、精霊が苦しんでいても、あの家の中にいる時は、蔦の葉には何の変化も起こらない。

「ひかりちゃんが苦しんでいる」

その日から光一の心に、雲が張り出した。ひかりの笑顔を見る度に、その雲は厚くなっていった。

26、玉の座への道

冬休みを間近に控えた晩のこと、光一は父さんと回転寿司の店に行つた。母さんは主婦の仲良しグループで二泊三日の旅行に出かけている。

父さんは一目目こそは「僕だって料理ぐらいできるさ」と、お手製の中華料理を振る舞つたが、それで精一杯だったらしい。二日目は「やはり主婦にはかなわん。外食しよう」とあっさり降参を認めただ。

「今夜は二人だけだ。好きなだけ取つていいぞ」

もぐもぐと口を動かす父さんの前には、既に十枚も空皿が積まれている。一方、光一はまだ二枚だった。いつもなら目前を通る寿司に間をおかずに手が伸び、その度に母さんの眉が跳ね上がっていたのだが、この日は気分が乗らなかつた。

「あれ、さつき、貝柱並んでたよな。来なくなつちまつた」

「他の人に取られたんだよ。注文したら」

「そりゃ、そうだ」

父さんの手がインターホンに伸びた。

「光一は？好きなのが流れてないなら、一緒に注文してやるが」

「いや、僕はいいよ。いいのが出てくるのまつてる」

「じゃあ、貝柱と焼き肉とウニ！」「はい、只今、お作りします」
くぐもつた声がインターホンから返つた。

光一は寿司の行列を見つめていたが、これぞというのは流れてこなかつた。

「最近、ぼつとしていることが多いみたいだけど、何かあったのか」

茶の湯を付け足しながら父さんが聞いた。

「いや、べつに」

「何も無いなら、寿司を食べるよ」

「関係ないじゃん」

仕方なく、光一はカツパ巻きに手を伸ばした。

「食べるなら。美味そうな顔して食べ、キュウリさんに失礼だぞ」

父さんはぶつぶついいながら、店員が運んできた寿司を口に放りこんだ。

「じゃあ、帰るぞ」

何となく重い雰囲気の中、光一らは家路についた。だが道がおかしかった。車は家とは反対の方角に向かっている。

「どこかに寄ってくの？」

「さあね」

しらばくれた父さんは、そのままハンドルを切った。

車は、町外れの山上に伸びるドライブウェイに入っていった。元旦の初日の出を見に、何回か連れてきてもらったことがある。高さは五百メートルもない山で、頂上には小さな展望台とベンチぐらいしかない。

「山に何かあるの」

「なんもないさ。いつもより高い所に登って、見つけるんだよ」

「何を」

「そいつは光一次第だ。ぐるぐる回っている寿司にピーンと来なかつたら注文する。それも気乗りしないなら、山に登って魚を釣るってわけだ」

「・・・」

父さんは訳が分からないことをいう。滑ってばかりである。光一や母さんが頷かないと、機嫌を損ねる。全く夕チが悪い。しかし今回は違った。光一の心に何かが引つかかった。

「山で、魚は釣れないけど」

「そこがポイントだ。自分が魚に乗っていたら、どんな魚だって釣れっこない。どうせ釣れないなら、高い山から糸を垂らして待つてみるのさ、思いも寄らない魚が引っかかるのをな」

車は展望台の駐車場についた。

ドアを開けると、さすがに山上らしく冷たい風が吹き込んだ。先に
出た父さんは、あちこちにいるカップルを見てにやついている。

「お熱いこつたね」

「結婚する前、母さんとよく来たんでしよう。夏に来たときは、蚊
に刺されて大変だったって」

「あのおしゃべりめ」

父さんは見晴台の鉄の柵を指で弾いた。

カーンと長く響く音に、横にいたカップルが、迷惑そうに振り返っ
ている。そんなことに構うことなく、父さんは腕を広げて深呼吸し
た。

光一も真似をして大きく息を吸ったが、

「あれっ」と、途中で息を止めた。

眼下に広がる夜景、山の裾に沿って並んでいる町の明かりが、弓の
ように反って見えたのだ。

「まるで三日月だ」

「そりゃそうだ。美月市の名の由来は、三日月からきてるからな。
今でこそは山の裾が切り崩されて、住宅地になってるが、ずっと昔
は、もっときれいな曲線を描いていたと思うよ」

父さんが説明した。

「じゃあ、三日月谷って呼ばれていたこともあったってこと？」

「たぶんな」

光一は改めて町を見下ろした。明確にはいえないが、千年以上も昔に、ひかりが、そしてサイダがそこに住んでいたのだ。

「・・・」

急に胸が苦しくなってきた。サイダの目を通して見た濁流が、そのまま蘇り、町を襲うように見えたのだ。

「それで、おまえはどうしたいんだい？」

藪から棒に父さんが聞いた。

「どうしたいのかって、それが分かれば苦労はないよ」

光一はつつけんどんに返した

問題は、もちろんひかりのことだった。明るい笑顔の裏で、彼女は苦しんでいた。その黒い瞳で見つめられると、光一の胸は高まったが、一方、悲しくもなった。

それは他の人には向けることのない瞳、彼女が人ではないことを思い出させ、それでいて自由さえも握っている光一だけに向けられる瞳なのである。

「君に自由を与える！」

などといって、ランプの魔人を解放したアニメ映画があった。しかし、光一にはできない。そんなことしても、霊力を握る左手の窪みは消えやしないのだ。それに、実際のところ、彼女が何を望んでいるのかもわからない。

「父さん、このままでいいのかって悩んでる時、どうしたらいい？」

光一は聞き返した。なぜか今日の父さんは、まともに答えてくれるような気がした。

「ほれ、問題が見えてきたじゃないか」

「答えになつてないよ」

「問題を言葉にできたということは、答えも分かっているということ。あとはそいつを素直に見ようとするかだ。もし見られないなら」

「もし見られないなら？」

光一は急に黙ってしまった父さんを見つめた。父さんは、町の明かりのせいで見えにくくなっている星を探すように首を振っている。

「霧だ、そいつを晴らすんだ」

「へ？」

「よいか、見ているよ」

「痛！」

光一の髪の毛を一本引き抜いた父さんは、地面の枯れ葉をかき集めた。そして、

「現面在心、急々如律令・・・」

心靈番組に出てくる呪術師が使うような呪いまじなをつぶやき、空にぶちまけた。両手は仏像のように固く組み合わせている。

「いきなり、なに？」

顔を上げた光一は息を飲んだ。

目の前に霧が立ち登っていた。たくさんの人顔が浮かび、そして消えている。学校か、近所か、どこかで見たような顔ばかりだが、はっきりとはわからない。ふわふわと漂いながら、光一を囲み始めた。と、右肩を誰かに掴まれた。

・・・光ちゃん、なんもするない・・・

・・・そうさ・・・そうだよ・・・

振り返ると亡くなったお祖母さんが立ち、言葉を発していた。周囲からは、その言葉への賛成の声があがっている。

「な、なんなんだよ！」

光一は叫んだ。隣にいるはずの父さんの姿は見えなかった。

「今、おまえが見ているのは、心の内側の霧。それを見続けるのも、目を背けるのもおまえ次第」

これまで聞いたことのない厳しい父さんの声が響いた。

・・そのまんま。そうすりゃ、大切なもんは離れない・・
前に回り込んだお祖母さんが、光一の手をそっと握った。これは明らかに幻覚である。なのに皺だらけの手はとても温かった。

「バアちゃん」

光一はほっと息をついた。悩んでいたことが馬鹿らしく思えてくる。「何もしなければ、これまで通り。ひかりちゃんは僕を見続けてくれる。それでもいいんだよね」

・・そうしなさんな・・

お祖母さんはこっくりうなずいた。手を握ったまま背を向けた。

「どうしたんだい」

呼びかけても返事はなかった。握っている手から温もりが消えていった。慌てて手を引こうとしたが、石のようにびくともしない。力づくでもだめだった。

「放して、バアちゃん！」

返事はなかった。

「父さん、どこにいるんだよ、これって幻覚なんでしょう？」

「幻覚だが、おまえにとっては実際にあるものと変わらない。ポイントは、おまえが作り出したということ」

「僕が作り出した・・」

父さんの言葉が、光一の胸に突き刺さった。

『ああ。僕は、大切なものを失う怖れをごまかしていたんだ。心の底で、幼子のようにバアちゃんに甘え、なだめてもらっていたのだ・・ごめん、バアちゃん』

口から思考が小さく漏れた。と、万力のように掴んでいた手が緩んだ。

・・それでよいわな、いつまでも甘えなされ・・
そっと振り返ったお祖母さんは、微笑みを浮かべて消えていった。

辺りを覆っていた霧が徐々に晴れていき、目の前に、濃紺の夜と町の明かりが広がった。

光一の心は決まった。

『僕は、大切な人のために、やるべきことをやるのだ。果たしてそれが、その人を苦しみから解放することになるかはわからない。しかし、僕ができることはそれしかない。サイダがひかりに届けようとしていた青蛇の剣。どこにあるかはわからないが、それを探し出し、彼女に渡すのだ』

「父さん、おかげで、霧が晴れたよ」

光一はそつと言った。

「背を向けず、否定せず、ただ心の在りようを認める。なかなかできることじゃない。

さてと、それはそれとしてな。ちょっと前から、そいつが気になっていたんだが・・・」

父さんは、光一の左手を取り、そこにある窪みを指で触った。

「痛！」

弱いながらも、電撃が襲ったらしい。慌てて手を引きながら話した。

「・・・玉の座たまぐすくを求める者、その座に適う力を得たならば、清明なる心を空に放て。されば道は現わる・・・

父さんの家系に古くから伝わる謎の言葉だが、その不思議な傷跡をもった光一には、なんのことかピーンとくるのでないかな」

「玉の座・・・」

まさに光一にはピーンときた。

文の意味はわからないが、玉たまとは、黄金球、ひかりの額にはまっ

いる雷光の瞳のこと。その座とは、それを納めるための青蛇の剣に
違いない。

サイドは言っていた・。我は血脈のかけらをもつ者に宿りて・。と
どこかで血が繋がっているに違いない。父さんだとて、たった今、
不思議な呪いまじなを使用した。

「父さん。僕らの先祖って、呪術師だったんだね」

「呪術師だって？確かに僕の曾祖父さんは町の祈祷師をしてたって
いうな。でも父さんが知ってるのは、今の謎の言葉と、変わり者の
オヤジに叩き込まれた、呪いだけだよ」

「オヤジって、あの家出したっていうジイちゃんのこと？」

実際、光一はお祖父さんとは会ったことがなかった。ただお祖母さ
んから話を聞いていただけだ。父さんが高校生になった時、山で修
行してくと家を出て、帰って来なくなったそうだ。

「そう、あの頑固オヤジだ。先祖から伝わったことを絶やしたら
いかん！とそりや厳しかった。そう考えれば、確かに先祖は呪術師だ
ったかもな。くそう、思い出したら、腹が立ってきた」

父さんは拳で柵を殴った。カップルがまたも迷惑そうに振り返るか
と思いきや、今回は違った。興奮したように、光一の頭上を指さし
ている。

「ん？」

見上げれば、三メートルほど上空に、まだ霧が残っていた。少しず
つ濃度を増し、白く輝き始めている。さっきの幻覚と違い、他の人
にもはつきりと見えているらしい。

見る間にもそれは、掌ほどの大きさの蝶になった。
きつくはないが、風は確かに吹いている。なのに、まったくあおら
れることはなく、空中に停止して羽ばたいていた。

「父さん、道が現れたんだ」

「道？」

「謎の言葉が実現されたんだよ。あの蝶は、道、を教えようとして
いるんだ」

「ってことは、あの蝶を追いかけろってことか」

いいながら父さんは駆けだして車を回してきた。光一が乗るのと同
時に、輝く蝶は高く舞い上がり、前に進み始めた。

「ほわー、なんてこつたい。本当に動き始めた」

父さんは興奮気味にアクセルを踏み込んだ。

蝶は全く信じられないような早さで進んだ。スピードメーターを見
れば、時速六十キロを超えている。

「光一、シートベルト締めろよ」

急カーブでハンドルを切りながら、父さんが怒鳴った。光一はシー
トベルトを掴み損ね、ドアに激しく叩きつけられた。

「大丈夫か？」

「うん、蝶、見失わないで！」

「了解」

そのままうねうねと山道を下り、大通りに出た。蝶はさらにスピー
ドを上げている。

「光一、あいつの行く先に何かあるんだ？」

額に浮かんだ汗を拭いながら父さんが聞いた。

「サイダの剣、青蛇の剣だよ」

光一は答えた。自信があつたわけではない。しかし、他には考えら
れなかった。

「なんだい、そりゃ」「」

調子はずれの声が響いた。詳しいことは本当に知らないらしい。

しかし、父さんが呪いを使えるなど、光一は今の今まで知らなかった。仕事から帰宅したら、ゴロリと横になるだけ、冗談好きのただの冴えないサラリーマンだと思っていた。少し見直した。

「ねえ、他にも呪い使えるの」

「もちろんだとも。だがな、おまえにはまだまだ教えられんぞ」

「なんでだよ」

「呪いのほとんどは危険だ。オヤジに内緒で枯れた花を蘇らせたら、近くに生えていた木がみんな腐って折れちまった。後ではれて、こつぴどく叱られた。おまえに教えたら、なにをしでかすかわからない」

父さんは苦々しい顔でいったが、声は楽しそうに弾んでいた。

「光一、さつき、ひかりちゃんとかいったな。あの蝶と関係があるのか？」

「それは言えないよ」

「けち！」

「どつちが」

そうこうする内に、車は以前通っていた小学校までやってきた。フェンス横の脇道に入って、そのまま進んでいく。やがて舗装されていないガタガタ道になり、いきなり行き止まりになった。前方には、黒々とした森が立ちはだかっていた。

27、闇にうつめくもの

二人は車を降りた。

「蝶はこの先に飛んでいったが、この先は確か」

「青沼だよ」

「懐かしいな。子どもの頃、よくザリガニ釣りに来てた。だけど沼で溺れる子が出たりして、立入禁止になったんだ」

父さんのいう通り、今でも青沼には近づいてはいけなと言われていた。

青味がかつた沼の周囲は木々が生い茂り、昼間でも不気味な場所である。岸辺は草におおわれて、いきなり水の深みに落ち込むこともあり大変危険なのだ。しかし、街の用水などには見られない特大のザリガニや鯉がいる。今でこそ足は遠退いていたが、小学生時分、光一は友人らとちよくちよく遊びにきていた。

「じゃあ、行ってみるか」

「うん、今の季節なら、蛇もいないしね」

二人は不気味な暗がり歩き始めた。頼りは、父さんの手に握られたオイルライターである。小さな炎が揺れる中、枯れ草を踏む音と、木の葉の間を流れる風の音が響いた。

途中、「危険！」と書かれた河童の絵がぬつと現れ、それを過ぎて二十歩ほど進んだ所で、光一の片足がズボリと潜った。水辺だった。

「上を見ても」

ふらついた光一の手を取った父さんは、ライターの火を消した。

斜め前の暗闇に蝶が浮かんでいた。羽ばたいていないところを見ると、木の枝にとまっているのだろう。

「さて、蝶はとまったぞ。ここに何とかの剣があるのか」
「うん、言い伝えが現しているのは、そのことだと思う。このどこかにある剣を手に入れて、黄金玉の持ち主に渡すんだ」
「それで、肝心の玉の持ち主はどこにいるんだい？」
「それはいえないよ。でも、ほとんど毎日会っているんだ」
光一は答えた。

「ならば、水を差すようで悪いが」
「なんだい」

「目的の場所ははつきりしたんだ。今夜はひとまず帰ろうや。こんな暗闇ではあまりにも危険だ。明るくなってから出直そう。それにロープもあった方がいいしな」

父さんのいう通りだった。やる気に満ちた心を冷ますのは苦しい。しかし、このような所で命を落としたり、元も子もない。物事は順調過ぎるほどに進んでいる。それに、光一の心に迷いはない。なんとしても剣を手に入れ、ひかりに渡すのだ。それから彼女が自由に決めること。剣に玉を納めることも、そのままにしておくこともできる。ついでに光一の手の窪みも用をなくして消えてしまいかもしれない。

「うん、帰ろう。でもその前に、もう一度ライターをつけて。蝶がとまった木をよく覚えておかないと」

「了解」
高い所に小さな炎が揺れた。目標は、かなり太くて、大きく湾曲している木だ。しかも枝は一本もついていない。特徴があるから忘れることはあるまい。

「もついいよ」
「よし、いこう、あっ」

もと来た方を照らそうとしていた炎が宙に舞った。

「どうしたんだい」

「何かが、ライターを弾き飛ばしたんだ」

炎は数メートル先の草むらで燃えている。オイルライターは蓋を閉めなければ炎は消えないのだ。枯れ草に燃え移りはじめている。

ズルツズルツズルツ・・・

どこからか重いものを引きずる音が響いた。後ろ、横、それとも前か・・・

次の瞬間、光一の体は凍りついた。

徐々に広がり大きくなる炎の照り返しを受け、しなやかな巨体がグツと頭部を持ち上げたのだ。その青黒い横腹には、光を放つ蝶が張り付いている。

「あの木は大蛇だったんだ。光一、下がってる！」

怒鳴り声とともに、光一は後ろに突き飛ばされ、体半分、水に浸かってしまった。父さんは仁王立ちになり、両手を組んだ。

「なんじ・・・」

すぐにも呪文を唱え始めたが、その体は、唸りをあげて振られた尾に投げられるように弾かれてしまった。十メートル以上も先の木の股にぶら下がっている。

「シュー、未熟な術者よ。儂わしの邪魔をするな」

掠れ声が森に不気味に響いた。

28、青蛇の剣

「父さ・・うっ」

立ち上がった光一の前に、牛の頭ほどの巨大な頭が突き出した。炎を後ろに置いていっているので、はっきりとは見えないが、それには目玉がなかった。頭部の中心にウロのような小さな窪みがある。

「我が心は乱れ、永き眠りより目覚めた」

大蛇は裂かれた木の幹のように大きく口を開いた。

求めていた剣、それは大蛇だったのだらうか。しかし、サイダの腕の中では本物の剣だったはずである。

「き、き、君は青蛇せいじゃの剣か！」

光一は声を絞り出した。

「いかにも僕は青蛇の剣、黄金の玉を納める者なり。逆に聞く、お前は何者か」

冷たい息が光一の頬を掠めた。氷を無理矢理に撫でつけられたような痛みが走り、恐怖はどこかに飛び去った。

「僕は、黄金玉の持ち主の友人だ。君を彼女に渡そうと思ってここに来た」

言葉が終わる前に、長い舌が伸び、光一の左手をチロリと触って戻った。

「お前は僕と同じく玉の座を持つ。それ故、我が心は乱れた。世に一つだけのものが、何故に二つとある？」

「そんなこと知らないよ」

「ならば、目覚めたる儂がすべきことは一つ。世に二つあってはならぬものを一つとすること」

いいながら大蛇は、光一の体に巻きついてきた。勢いを増した炎が、大蛇の鎌首の陰影を色濃く刻んだ。

「くそっ」

光一は腕を外側に突っ張ろうともがいた。しかし駄目だった。無理に力を加えれば、ナイフの刀のような鱗が上着を深く切り裂き、皮膚に食い込んでくる。

『苦しい・・・息ができない・・・なんでこんなことに・・・』

「こ、光一、おまえにも、その化け物に負けない力があるはずだ」
呻き声に首を傾ければ、充満する炎の熱気の中、父さんが微かに腕を動かしていた。呪いの形に手を組もうとしているが、片手は全く動かないようだ。

「とお・さ・ん」

絞り込まれた肺からわずかに呼気が出た。化け物に負けない光一の力、一体、それは・・・

光一は皮膚が切り裂かれるのを無視し、渾身の力を込めて左手を抜き出した。そして黒い枝の間に見える紺色の空に向け、めいっばい指を広げた。

「僕に力を！」

「玉なき座を、玉なき天に翳^{かざ}して何が起ころう」
しゃがれた笑いが降ってきた。底知れぬ黒い穴のような口が、吐き出す冷気とともに襲いかかった。

と、どこか空の彼方から眩い光が放たれた。

次の刹那、黄金色の光の矢が大蛇の体を貫き、同時に大地が割れる

ような地響きが轟いた。光一を締め付けていた束縛はずりりと解けた。

何が起こったのかは、すぐにわかった。光一はひかりを招き寄せたのだ。光一の力、それはやはり、雷の精霊であるひかりの力を使うことであつた。

激しい雨が降り始めた。黒雲の彼方から美しく輝く鳥が滑空してくる。そして目の前には、鎌首を力なく持ち上げた大蛇がいた。

「僕は黄金玉に秘めし力を無にできるはず。だのにその力に撃たれた。何故に・・・」

若者よ、いずれにせよ、お前は僕に打ち勝った。さあ、その手を我が額に重ねよ。さすれば僕は消える」

「それはだめだ。君が消えるかどうか決めるのは、彼女だ」

「ならぬ。玉の座はこの世に一つ」

最後の力を振り絞ったのか、大蛇がいきなり大口を開けて突進してきた。光一はどうすることもできなかつた。

「光一殿！」

ひかりの叫び声が響いた。大蛇の鎌首が、光一から外れて上に伸びた。

「我、役割を果たしたり」

掠れ声とともに、青黒い巨体は小さくなっていった。大木のような体が、腕の長さほどに縮み、草むらに転がった。大蛇は、本来の剣の姿に戻つたのだ。

光一は剣を拾い上げた。

片手ほどの長さの剣だったが、湿地に足場が沈むほどの重さがあつた。雨に消えかかった朱色の炎を、鏡面のように滑らかな刃に映し

ている。柄には、美しく彫り込まれた蛇に守られるように、虎目模様の玉がはまっていた。

光一が左手に触ればそこには未だに窪みが残っていた。

「ひかりちゃん・・・」

光一はひかりを探した。が、白い体はどこにも見えなかった。

「そんなのない・・・こんな・・・こんな、あつけないなんて」

体中の力が抜けていった。剣は地面に突き立った。

膝をついた光一の目の前には、美しい剣の柄があった。それが精霊であるひかりが落ち着いた先だった。

「ひかりちゃん、君はそれでよかったのかい・・・」

問いかけたが、返事はなかった。

最終章、我ら精霊密使

森の外に細い光がちらついた。
黒い影が跳ねるように近づいている。既に炎は消えかかり、あちこちに白い煙が立ち登っていた。

「大丈夫か、坊や」

影が飛びかかってきた。清水探偵だ。少し遅れて先生もやってきた。
「ええ、でもどうして」

「鶯が教えてくれたのよ。一枚の葉が、突然、ブザーのような音を立てて振動しはじめたの。その直後、ひかりちゃんが変身しながら飛び出していった。これは光一くんの身に何か起こったの違いない。そう思つて、鶯の葉の方角を手掛かりにやってきたら、青沼の森に雷が落ちたのが見えたの」

「で、坊や、お嬢ちゃんは」

「・・・」

光一は目の前の剣を指さした。

「そう・・・納まるべき所に納まったのね」

先生は背筋を強く張つて剣を引き抜いた。たぶん、ひかりのために準備をしてきたのだろう、腕にかけていたコートで包み、鈍く光る玉を撫でた。優しい指の動きは、まるで、ひかり本人を撫でているようだった。光一の頬に熱いものが流れた。

「僕が彼女を呼んだんだ。それでこうなつてしまった」

「あなたは悪いことをしたわけではないわ。ひかりちゃんは自分の意志でここに駆けつけた。そして想いを遂げたのよ」

先生は強くいった。

『慰めなんていらぬ！』

光一は大声で叫びたかった。しかし、それは先生の思いやりを、そして何よりも、ひかりの気持ちを投げ捨ててしまうことだった。

『せめて・・・せめて・・・さよならだけはいつておきたかった』

「しかしだ」

清水探偵が低く言った。

「なぜに坊やの左手は元に戻らないのかね」

確かに光一の手には、以前と変わらずに窪みが残っていた。でも、それに何の意味があるというのだろうか。

「思い違いなら恐縮だが、今一度、お嬢ちゃんを呼んでみてはどうか。本当に彼女がその剣に納まってしまったのなら、返事はないはずだが」

「まさか」

光一は一度、自分の頬を強く叩いた。そして深く息を吸うと、左手を剣の柄の前に突き出した。

「出でよ、雷いかづちの精霊よ！」

バツ！

言葉が終わると同時に、左手と柄との間に激しい火花が飛んだ。

先生が小さな悲鳴をあげ、抱えられていた剣が宙に飛んだ。そのまま剣は地面には落ちず、コートを巻き込んで宙に浮かんだ。

「ほほう、これは」

感嘆の声を漏らす清水探偵の斜め上方、宙に静止していたコートの一部に穴が開き、炎が燃え立った。突き出した柄が、炉に入れられた灼熱の鉄のように朱色に輝いている。

やがて虎目模様の玉が、ゆっくりと柄から離れはじめた。溝は、内側から打ち出されるように盛り上がり、ふいに剣は地面に落ちた。

宙に浮かんだままの玉の周囲には、霧のような白い光が集まり始めた。徐々に人の形になっていく。

息をとめて見守っていた光一の前には、いつしか、光をまとった女神のような少女が立っていた。

ひかりだ。

「光一殿、あなたは狭き剣の座より、私を解放して下さい。かの座に適合したのは遙か昔の荒れたる魂のみ。そして、今の私を置く場所は、ただ一つ」

言いながらひかりは、光一の左手にそつと触れた。

剣の化身の大蛇が、ひかりの雷光に倒れた理由はここにあった。今の彼女の雷光には、人への恨みを流し去った後の厚い心が宿っていたのだ。それは古い剣が受け入れられるエネルギーを超えていたのだ。

光一は目をしばたきながら後ろを向いた。その左手に刻まれた窪みは、わずかながら深く拡がっているようであった。

「玉の座の持ち主よ・・・」ひかりが後ろから言葉を投げた。

「改めて、我が願いを申し上げます。荒れたる過去の魂を流し去った私が、尚も霊力を持ちて、この世に在ることをお許しください。私は皆様と一緒に日々を過ごして行きたいのです」

それがひかりの本心であった。彼女は、納まるべき場所があるのに、この世に残りたい気持ちがあり、心が引き裂かれ、苦しんでいたのだ。

「いや、あのう」

光一はすぐにも答えたかった。しかし、ひかりの申し出にふさわしい言葉が見つからず、まごついてしまった。

「坊や、早くお嬢ちゃんに返事をせんかい」
清水探偵が足に噛みついた。

光一は目をつぶりながら振り返った。

「それが君の望みなら、ぜひにそのように。

・・それと・・これからは僕のことを、光一殿と呼ぶことはやめてほしい。たとえ僕に玉の座があつても、君は自由なのだから」

「ありがとうございます。しかし、精霊の身である私が、あなたを呼ぶにはやはり・・」

「んーいい場面だ。もうちつと見ていたいが、この辺で幕引きのようだ」

答えを躊躇しているひかりの横で清水探偵が嘆いた。

「おーいみんな、そこにいるの」

森の入口の方から泣きそうな声が聞こえてきた。小さな懐中電灯の光が揺れている。その後方には赤く点滅する光が見えている。

「勉君よ。季節外れの雷を見てやってきたんだわ」

先生の声が弾んだ。

「そつだよ、ひかりちゃん。僕らは、仲間なんだ」

目を開いた光一の前で、ひかりはこっくりとうなずいた。

「ひゃあ、みんなここにいたんだ。うわっ」

顔をのぞかせた勉の声が凍りついた。裸のひかりに気付いたのだ。

「グッフふ」

清水探偵が唸るように笑った。

「仲間が揃ったな。なんといつたかな。そう、精霊密使だ。お祝いをしたいところだが、小火ほやのせいで消防隊も来てしまった。残念ながら、今夜はこれで解散だ」
「それは私が預かっておくわね」
先生は青蛇の剣を地面から拾い上げた。

バツシャーン！突然、沼に水しぶきが上がる音が聞こえた。

「まずい、父さんを忘れてた」

「えっ、お父さん？どうかしたの」

「うん、でも、消防隊の人が来てるから大丈夫。先生たちは面倒なことになる前に、ここを離れて」

光一は勉から懐中電灯を借り、ひかりに向き直った。

「ひかりちゃん、お願いだ。みんなが見つからないように、思い切り派手に空を飛び回って」

「わかったわ、光一・・くん」

恥ずかしそうな声とともに、恐ろしくも美しい鳥に変化したひかりは、空に舞い上がっていった。

「じゃあ、また明日」

「おやすみ」

先生たちの姿が木々の向こうに消えた。

夜空に稲妻が走った。まるで闇の彼方から無数の龍が降りてくるようだった。一瞬のうちに空を駆け、森の反対側に落ちている。木々は、高い山のように黒い影を伸ばし、この場から立ち去る者たちの姿をおおった。。

耳をつんざくような轟音が響くなか、光一は走り寄る消防隊員に懐中電灯を振り回した。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5721h/>

精霊密使～ボクが恋したカミナリ精霊の少女

2010年12月28日01時05分発行